

歴代の会誌表紙　Vol.1

特集　東畑建築事務所創設 85 周年
特集　温泉と暮らす

2018 01
Vol.99　No.1150

建築と社会
Architecture and Society

日本建築協会

since 1917.03.30
日本建築協会は創立100周年を迎えました

若き創造者たちへ

「第65回青年技術者顕彰」のご案内

日本建築協会では、昭和29年から「青年技術者」を表彰してきました。これは、35才以下の優秀な設計者、技術者、研究者等を対象とするもので、若手建築技術者のいわば登龍門として定着しています。

今年も、青年技術者選考委員会を設けて、これまでどおり、計画・設計・構造・設備・施工およびその他の分野について青年技術者を表彰します。

選考は有職者による選考委員会が行い、選出された方は、本会総会での表彰、「建築と社会」への掲載等を予定しています。建築界の様々な分野で活躍されている皆様の積極的なご応募をお待ちしています。

応募提出規定

1．応募できる人は満35歳（平成30年３月30日現在）以下の青年技術者であって、本会個人会員に限る。

2．原則として、すいせん者を併記する。
すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。

3．応募分野は特定しない（建築に関するあらゆる分野を対象とする）。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等の分野にあって、なしとげたすぐれた実績について、下記の所要資料を1部、本会に期日までに提出する。

4．提出された資料は「青年技術者選考委員会」において選考する。

5．「青年技術者選考委員会」において選出された青年技術者は本会総会において表彰し、「第65回青年技術者特集号」（平成30年７月号予定）に掲載する。

6．提出資料

■応募用紙

本会事務局で発行、またはホームページからダウンロードして下さい。

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

A：業績資料（A3版5枚以内／書式は任意）

① 設計の場合――鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料

② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）――上に準じた資料

③ 上記以外の分野の場合――それぞれの分野にふさわしい資料

B：青年技術者の思い（A4版2枚以内／書式は任意）

上記業績資料に記載した業績において、本人が特に貢献した部分、または力量が活かされたと思われる部分の詳細な説明をしてください。また、本人の建築、都市、環境などに対する考え方、取り組み姿勢や将来展望等についてまとめてください。文字だけでなく必要に応じて図表、写真等も用いてもかまいません。ただし、応募者本人の執筆に限ります。

この資料は、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えていますので、十分配慮をしてください。

7．提出期限 平成30年３月30日（金）

8．提出先 （一社）日本建築協会「青年技術者選考委員会」
〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階
電話 06-6946-6981 FAX. 06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp

9．提出方法 郵送（当日消印有効）または持参

10．青年技術者選考委員会（予定）

委員長 勝山 太郎／㈱日建設計設計部門理事 グループマネージャー設計部長

委 員 岸田 文夫／㈱竹中工務店開発計画本部長（西日本担当）
長尾 健／長尾健建築研究所代表
橋本 修／㈱昭和設計執行役員プロジェクト推進室室長
松原 茂樹／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授
金尾 伊織／京都工芸繊維大学デザイン・建築学系准教授
桝田 洋子／㈲桃李舎代表取締役
井村 隆／清水建設㈱関西支店設備設計部設計長
小倉 良友／㈱日建設計エンジニアリング部門 設備設計グループ理事副代表設備設計部長
山口 善史／㈱大林組大阪本店建築事業部生産技術部長
山辻 直樹／大成建設㈱関西支店建築部購買管理室課長

2018年を迎えて

一般社団法人 日本建築協会　会長　設楽貞樹

新年明けましておめでとうございます。皆様には新年をフレッシュなお気持ちで迎えられたこととお慶び申し上げます。私も昨年６月より新しく会長職に就任して始めての正月を清新な気分で迎えております。

昨年、当協会は創立100周年を迎えました。「記念式典」をはじめとした各種イベントの実施や記念誌の刊行等に取り組むなど意義深い記念すべき年であり、大きな節目の年となりました。そして協会は昨年４月以降すでに101年目のスタートを切っております。

101年目からは100周年記念事業のテーマである「新しい地平へ」を実現するため、種々の新しい企画をスタートさせました。若手の会員が自由な発想で参加できるプラットホームの整備や、幅広く会員に論考発表の場を提供する論考コンクール「片岡安賞」を発足させるとともに、他団体の活動への連携参加もイケフェス連携プログラムを主催するなど、これまでにない幅広い動きに取り組み始めた年でもありました。

今年はそれらの新しい試みをさらに具体化しながら、皆様に見える形で活動を推進していこうと思っています。例えば、３月には「片岡安賞」の公開審査を行います。応募者から寄せられた力のこもった論考の中から一次審査で選ばれた数点を公開の場でプレゼンテーションしてもらい、その場で公開審査するという初めての試みです。「片岡安賞」と、当会にとってはいささか重い名前をつけたこの賞が、世間から評価されるような賞になっていくには評価実績が必要で、年数がかかるとは思いますが、協会のひとつの顔として成長してくれることを願う次第です。

そのほか、他団体や協会以外の活動との連携も一層積極的に行っていきたいと思います。もちろん従来から実施している「建築と社会」誌の発行をはじめ、講演会の開催、見学会や顕彰事業の実施、刊行物の発行などは、さらに充実させるとともに、今年はより一層皆様が参加していただきやすいイベントや各種企画を打ち出していきますのでご期待ください。

さて、建築界を取り巻く状況を見れば、各種偽装問題、データ改ざん問題が続き、社会からの目が厳しくなっています。一度失墜した信用を取り戻すには、その何倍何十倍もの時間と努力が必要なことをわれわれは知っています。社会を構成する一人ひとりが原点に立ち返って信用回復を目指す以外に方法はないでしょう。そのほか業界共通の悩みである働き方改革の問題も、まだまだ克服するには時間がかかりそうです。従来どおりの発想の延長線上では有効な解は見つからないのではとさえ感じます。

われわれの周辺は転換期を迎えています。このような時代にあって、日本建築協会は、年齢や業種、所属組織を超えて、建築に携わる者の充実感や喜び、さらには上記のような問題に対する議論を自由に展開・共有できる場を提供しています。多くの方々の参加をお持ちしています。昨年「新しい地平へ」向かって101年目の一歩を踏み出した当協会の歩みを更に確実なものにするため、新しい年を一緒に歩もうではありませんか。

本年の抱負

編集委員会

これからの100年に向けて、活気ある発信・言論のプラットホームに

編集委員長
勝山太郎

建築協会は昨年創立100周年を迎え、次の100年に向けて新たな一歩を踏み出しました。会誌「建築と社会」は「建築を通じ広く社会に貢献する」という理念のもと、協会設立当初から発行され、建築作品・技術の発表の場のみならず、言論を通じて社会的提言も行うオピニオン誌として発展してきました。100年に渡る会誌の歴史を築き上げて来られた方々に本当に敬服すると共に、次代に引き継いでいくための責任を感じます。ただ、毎月毎号、建築と社会の関係をあらゆる側面から掘り下げ、充実した内容を立案・企画し続けている各専門分科会委員・事務局の高い意識と真面目な姿勢は、長い歴史の中で世代を超えて継承されてきたスピリットだと思いますし、大変心強く思います。一方で、会誌を取り巻く状況は変化しており、作品や広告の発信の場としての魅力付けのため、新しい企画や取り組みをもっと積極的に打ちだす必要があると感じています。その取り組みの第一弾として今年は第1回「片岡安賞」論考コンクールの公開審査、受賞論考の表彰と掲載を行います。様々な世代や色々の立場の方々が広く参加して頂ける言論のプラットホームの一翼を担うイベントとなると期待しています。これからも皆様を繋ぎ、参加することが楽しく、自己研鑽の場ともなる会誌として広い役割を果たしていきたいと思いますので、ご支援とご協力を是非お願いいたします。

事業委員会

『新しい地平へ』向けて

事業委員長
中尾勝悦

昨年4月より情報見学小委員会の委員長を務め、6月に常任理事に選任されました中尾勝悦です。歴史ある協会の大役に、日々重責を感じています。本会との出会いは、入社間もない頃の『建築と社会』に始まります。その後『青年技術者』に顕彰して頂き、『私の空間作法』では長年掲載して頂いております。皆様のご指導のもと、この任を全うしてまいります。
さて、情報見学小委員会は、建築関係の各分野から多数参加頂き、多種の事業を連携協力して進めています。昨年は、茶室見学会及び3施設の近作見学会に加え、近代建築見学会・100周年記念式典・イケフェス関連事業への協力や建築関係4団体合同忘年懇親会の幹事を務めました。本年より茶室見学会は、中村昌生先生から池田彦一先生に引き継がれます。新作見学会は、大阪を離れて少し遠方の施設を企画しております。本委員会も『新しい地平へ』向けて歩み始めています。本年も皆様の積極的なご参加・ご協力をお願いいたします。

出版委員会

101年目新しい出発

出版委員長
西　博康

出版委員会は、1949年から、158冊の作品を創出して参りました。その領域は、意匠・構造・電気・設備・積算・施工・法規・係争・保全・外構・庭園など多岐にわたり、建築と社会をつないで参りました。1984年からは、「プロのノウハウ」シリーズを刊行し、多くの方に親しまれており、出版と合わせて、講習会なども行って参りました。昨年は、「改訂版イラストでわかる消防設備の技術」「図解一発で通す！建築申請」「図解住まいの寸法」を発刊し、評価を頂いております。
日本建築協会が101年目を迎える今年は、過去の作品を参考にしながら、時代のニーズに合う更なる新しい企画を進め、社会貢献に努めて参ります。出版では、建築の構造系の解り易い作品や、漏水対策の作品、建築と設備との接点に関する作品を予定しています。講習会では、既刊の出版物を利用した新たな講習会の実施等を多数行う予定です。是非ともご利用・ご活用をお願い申し上げます。

教育委員会

「継続事業の充実」

教育委員長
山形政昭

先年の協会創立100周年に際して『日本建築協会100年史1917-2017』など3冊の記念誌が刊行されました。関西の建築をコンパクトにして、かつ掘り起こして通覧できるものです。ぜひ、ご一読下さい。また『建築と社会』9月号は特集「100年前の建築、100年後の建築」で、建築をめぐる様々なテーマが興味深く盛られ、この先を予見させるものがあり、委員会活動の指針を得るものとして拝読しました。本委員会では協会の歴史とともに歩む「工高生デザインコンクール」と「実務講習会」の事業を行っており、担当委員諸氏の活度に支えられ幸いにして好調であります。同時にコンクールでは一層魅力的なテーマを模索中であり、講習会ではテキストの改訂も準備しております。今年も継続事業の一層の充実を、よろしくお願いいたします。

未来創生プロジェクト

「新しい地平」を見晴るかす未来創生プロジェクト

未来創生プロジェクト委員長
中村文紀

様々な活動を通じて、建築と社会の未来を探り、創り、育てていくことを目的とする未来創生プロジェクトが立ち上がりました。
このプロジェクトは、3つの委員会から構成されます。関西を中心に活動する組織設計、ゼネコンの概ね35歳以下の若手設計者が集い、建築の身近にある様々な社会との接点を見つめる活動を展開しているU35委員会。
概ね40代を中心として建築業界に囚われない、プラットフォームを立ち上げ、2020年東京オリンピックの20年後の社会を議論し、その成果を発信する2040委員会。
大学・設計・施工などの建築に関わる多様な分野からメンバーを構成し、建築現場見学会など次代を担う人材の育成に資する活動を行う建築次世代委員会。
このプロジェクトが「新しい地平」へと踏み出した協会のひとつのベクトルとなるよう努めてまいります。ご興味のある方は是非、協会までご一報を。

平成29年度 建築工事 実務講習会

この講習会は、建築CPD情報提供制度認定プログラムです。
（公社）大阪府建築士会（６単位）
（公社）日本建築家協会（６単位）

■講習会会場〈大阪府建築健保会館〉
交通：地下鉄谷町線・中央線谷町四丁目駅８号出口より徒歩５分



日　時：2018年 1 月18日（木）
　　9：00～17：30
会　場：大阪府建築健保会館
　　6Fホール
　　大阪市中央区和泉町2-1-11
　　TEL：06-6942-3622
定　員：100名（先着順）
受講料：15,000円（含テキスト代 税込）
　　※テキスト当日配布

■申込方法
FAXまたはE-mailにて、
①催し名「実務講習会」
②受講者氏名（年齢）
③事業所名
④受講票送付先住所
⑤担当責任者
⑥E-mailアドレス
⑦電話番号
⑧受講料支払方法
（銀行振込、郵便振替、等）
⑨CPDを申請される方は、申請先の団体名と参加者IDをお知らせ下さい。
受講料は、前納制となっておりますので、併せて銀行振込、郵便振替等で納入して下さい。受講料入金確認後、受講票を送付します。
なお、当会HPからもお申込いただけますので、http://www.aaj.or.jpをご覧下さい。

■申込先
（一社）日本建築協会（担当　内山）
〒540-6591
大阪市中央区大手前1-7-31 OMM7F
TEL：06-6946-6981
FAX：06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp
URL：http://www.aaj.or.jp

＜振込先＞
●三井住友銀行
　大阪中央支店　普通　0860034
●三菱東京UFJ銀行
　瓦町支店　普通　0210054
●りそな銀行
　北浜支店　普通　0272234
●郵便振替口座　00910-9-39975
名義　シャ）ニホンケンチクキョウカイ
　　一般社団法人日本建築協会

■趣旨と内容
●本講習会は、建設業はもとより、官公庁・設計事務所・設備会社など幅広い分野の中堅以下の技術者を対象としたものです。
●現場実務の基礎である「施工計画」と「仮設見積」に重点をおき、講義します。
●都市環境の変化に伴う法令・基準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。

■科目・講師

施工計画

川井　裕基 氏
鹿島建設㈱関西支店
建築部建築工事管理グループ担当部長

柏木　隆男 氏
㈱松村組本社
建築本部建築部部長

施工計画は、品質を確保し、安全で能率よく経済的に本体工事を進める鍵をにぎっています。この講習会では、仮設から地下、躯体、仕上、設備にわたり、適切な施工計画の要点をわかりやすく解説します。

仮設見積

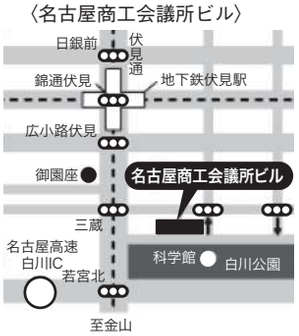
阿字地正人 氏
㈱大林組大阪本店
建築事業部生産技術部計画第二課長

仮設工事費は、非常に把握しにくい面があって、ついつい単位面積当たり、あるいは請負金比率のみで処理されがちです。施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。

日本建築協会東海支部主催 建築工事 実務講習会

この講習会は、建築CPD情報提供制度認定プログラムです。
（公社）愛知建築士会（６単位）
（公社）日本建築家協会（６単位）

■講習会会場
〈名古屋商工会議所ビル〉



日　時：2018年 1 月24日（水）
　　9：30～17：00
会　場：名古屋商工会議所ビル・９階
　　（愛知建築士会内）
　　名古屋市中区栄2-10-19
定　員：60名（先着順）
受講料：15,000円（含テキスト代 税込）
　　※テキスト当日配布

■申込方法
FAXまたはE-mailにて
①講習会名
②〒・住所
③受講者氏名（年齢）
④事業所名
⑤申込担当者名
⑥電話番号
⑦FAX番号
⑧E-mailアドレス
⑨受講料支払方法（銀行振込等）
受講料は前払制となっていますので、併せて銀行振込等で納入して下さい。受講料入金確認後、受講番号をE-mailまたはFAXで通知します。なお、日本建築協会東海支部HPから受講申込書のダウンロードができますので、http://www.aaj-tokai.jpをご覧下さい。
■締切日　2018年１月16日（火）
　但し、定員に達し次第締め切ります。

■申込先
（一社）日本建築協会　東海支部
〒460-0008
名古屋市中区栄2-10-19
名古屋商工会議所ビル・９階
（愛知建築士会内）
TEL：052-201-2201
FAX：052-201-3601
E-mail：info@aaj-tokai.jp
URL：http://www.aaj-tokai.jp

＜振込先＞
●三菱東京UFJ銀行
　栄町支店（普通　0167157）
　シャ）ニホンケンチクキョウカイトウカイシブ
　一般社団法人日本建築協会東海支部

■趣旨と内容
●本講習会は、官公庁・設計事務所・建設業をはじめ、設備・営繕など幅広い分野の技術者を対象としたものです。
●とくに取り付きにくい施工計画と仮設見積、現場実務の基礎である積算業務に重点をおき、講義します。
●都市環境の変化に伴う法令・基準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。
●積算業務では具体例より、その着工準備から完成に至るまでをわかりやすく解説します。

施工計画

日吉　智紀 氏
清水建設㈱名古屋支店
生産技術統括部生産技術グループ主査

適切な施工計画を立案できることが建築現場技術者の必須条件です。安全で、経済的な施工計画を解説します。

仮設見積

相原　仁史 氏
㈱大林組名古屋支店
建築工事部建築生産技術第一課課長

仮設工事費は、一般には非常に把握しにくい面があって、ついつい単位面積当たり、あるいは請負金比率のみで処理されがちです。施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。

積算業務

木原　陽 氏
㈱竹中工務店名古屋支店
見積部建築第１グループ主任

見積業務のなかで基本となるのは、数量積算です。この手順・基準を基本に、より合理的で正確な積算業務を解説します。

日本建築協会中国支部主催
建築工事実務講習会

この講習会は、建築CPD情報提供制度プログラムです。
建築関連CPD（６単位）

■講習会会場
（広島工業大学　広島校舎）
・広電市内電車　袋町または中電前下車
・広島バス　平和記念公園前下車



日　時　2018年 2 月15日（木）
9：30～17：00
会　場　広島工業大学　広島校舎
広島市中区中島町5-7
定　員　60名
受講料　15,000円（含テキスト代 税込）
※テキストは、当日配布させていただきます。

■申込方法
FAXまたは中国支部へ直接
①講習会名
②〒・住所
③受講者氏名（フリガナ）
④事業所名
⑤担当責任者
⑥電話番号・FAX番号
⑦受講料支払方法（銀行振込等）
⑧CPDを申請される方は、申請先の団体名をお知らせ下さい。
受講料は前払制となっていますので、併せて銀行振込等で納入して下さい。受講料入金確認後、受講票をお送りいたします。
■申込締切　2018年２月７日（水）
（ただし定員になり次第締切）
■受付時間　9：00～17：00
（土、日、祝除く）

■申込先
（一社）日本建築協会　中国支部
〒730-0805　広島市中区十日市1-1-9
（相生通り鷹匠ビル4階山陽工業㈱内）
TEL 082-232-6471
FAX 082-291-2233
E-mail：info@aaj-chugoku.jp
URL：http://www.aaj.or.jp

＜振込先＞
●広島銀行
本川支店（普通　3424438）
シャ）ニホンケンチクキョウカイチュウゴクシブ
一般社団法人日本建築協会中国支部

■趣旨と内容
●本講習会は、官公庁・設計事務所・建設業をはじめ、設備・営繕など幅広い分野の技術者を対象としたものです。
●とくに取り付きにくい施工計画と仮設見積、現場実務の基礎である積算業務に重点をおき、講義します。
●都市環境の変化に伴う法令・基準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。
●「積算業務」では具体例により、その着工準備から完成に至るまでをわかりやすく解説します。

施工計画
井上　昇 氏
清水建設㈱広島支店
工事長
適切な施工計画を立案できることが、建築現場技術者の必須条件です。
安全で、経済的な施工計画を解説します。

仮設見積
尾野本　悟 氏
広島工業大学
教授
仮設工事費は、一般には非常に把握しにくい面があって、ついつい単位面積当たり、あるいは請負金比率のみで処理されがちです。
施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。

積算業務
八道　憲一 氏
鹿島建設㈱中国支店
次長
見積業務の中で基本となるのは、数量積算です。この手順、基準を基本に、より合理的で正確な積算業務を解説します。

約款の改正について

民間（旧四会）連合工事請負契約約款委員会では、平成29年10月23日の委員会において、民間（旧四会）民間連合協定工事請負契約約款第４条（請負代金内訳書、工程表）を、平成29年12月１日より、下記の通り改正する旨の決議を行いました。
今般の改正は、公共工事標準請負契約約款、民間建設工事標準請負契約約款（甲）・（乙）及び建設工事標準下請契約約款（以下「中建審約款」という。）が、去る平成29年７月25日の中央建設業審議会において、改正されたことを受けて、中建審約款同様に改正するものです。

■約款改正日（改正版頒布開始日）
平成29年12月１日

■改正内容（新旧対比表）

現　行	改正内容
第４条　請負代金内訳書、工程表 （1）受注者は、この契約を締結したのち速やかに請負代金内訳書を監理者に提出し確認を受ける。 （2）受注者は、この契約を締結したのち速やかに工程表を発注者及び監理者に提出する。	（アンダーライン部分が改正箇所） 第４条　請負代金内訳書、工程表 （1）受注者は、この契約を締結したのち速やかに請負代金内訳書を監理者に提出し確認を受ける。 （2）受注者は、請負代金内訳書に、健康保険、厚生年金保険及び雇用保険に係る法定福利費を明示するものとする。 （3）受注者は、この契約を締結したのち速やかに工程表を発注者及び監理者に提出する。

■現行約款（現行版）への対応
今回の改正は、民法、建設業法等の法令の制定・改廃によるものではありませんので、本年12月１日（約款改正日）以降、お手持ちの現行約款をそのまま使用して頂いても差し支えありません。
しかしながら、民間（旧四会）連合工事請負契約約款委員会では、上記のとおり12月１日に改正約款を発行・頒布することから、その日以降に現行約款を使用される場合には、できる限り契約書「7. その他」欄に以下の特約を記載してご使用下さるようお願い申し上げます。
【特約（例）】

約款第４条（請負代金内訳書、工程表）に、以下（2）を加え、現行（2）を（3）に繰り下げる。

『（2）受注者は、請負代金内訳書に、健康保険、厚生年金保険及び雇用保険に係る法定福利費を明示するものとする。』

なお、詳細は、約款委員会HP（http://www.gcccc.jp）をご参照ください。

建築と社会

Architecture and Society
Journal of the Architectural Association of Japan
日本建築協会
2018 01
Vol.99 No.1150

■特集予告
●２月号／第24回私の空間作法
●３月号／ 東海支部特集

今月の表紙

2018年、101年目を迎えるにあたり、創刊からの表紙を選出して掲載することとなりました。
１月号はやはり始まりの第１集第１号にいたしました。
誌名『關西建築協會雜誌』は、日本建築協会へ改名する前の大正７（1918）年12月号（第１集第14号）まで続きます。
第１集の頃は現在のように特集テーマを決め、それに沿った論考を掲載するのではなく、建築と都市の問題や、防災、住宅問題など、会員それぞれが重要だと考える問題についての論考を掲載しているようです。
また外国の建築や論文、条例などの紹介も多く掲載されています。
片岡安初代会長が、都市や住宅の改良、建築条例制定について寄稿している一方、女性執筆者による、自分たちが住む家についての寄稿があり、硬いだけではないのが面白く感じます。

特集　東畑建築事務所創設85周年

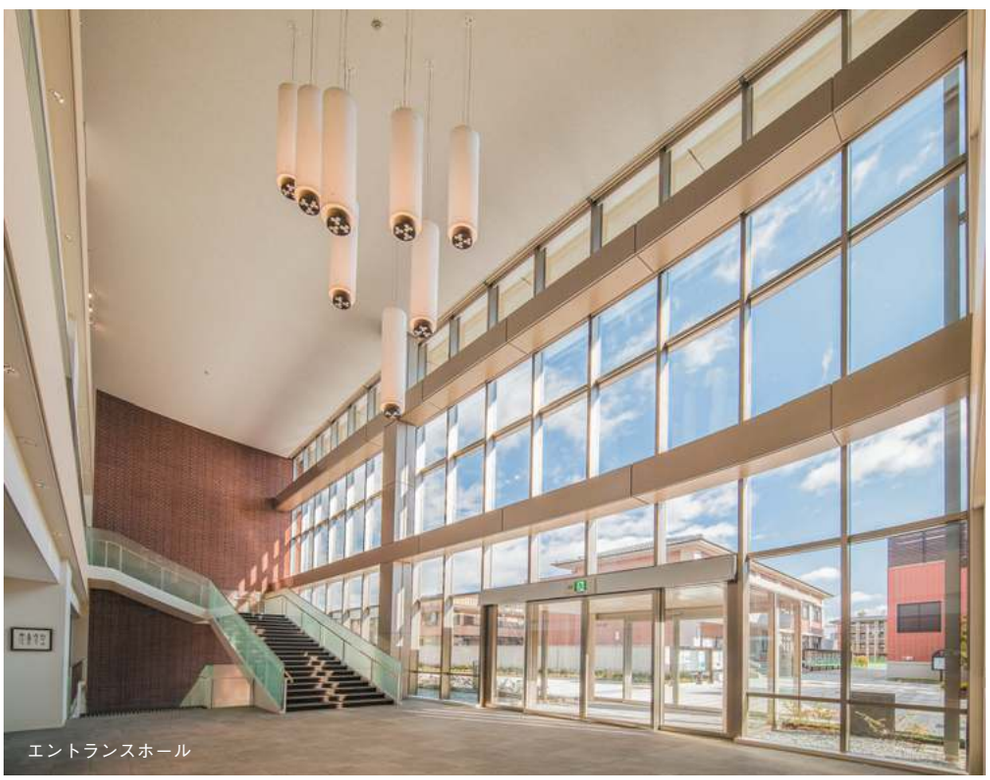
●理念・創設85周年にあたって ―― 10
●History of 85　東畑建築事務所の　これまで、これから ―― 12
●木を活かす　適材適所で木を活かし　木造の良さを伝える ―― 18
●集いの場をつくる　場をつくり、人が集い　新たな価値が生まれる ― 22
●記憶の継承　記憶を受け継ぎ　風景をつくる ―― 26
●安心の提供　確かな安全の上に　一人ひとりの心に響く安心を築く ― 30
●価値の再生　ハード・ソフトの技術を活かし　新たな価値を創り出す 34

特集　温泉と暮らす

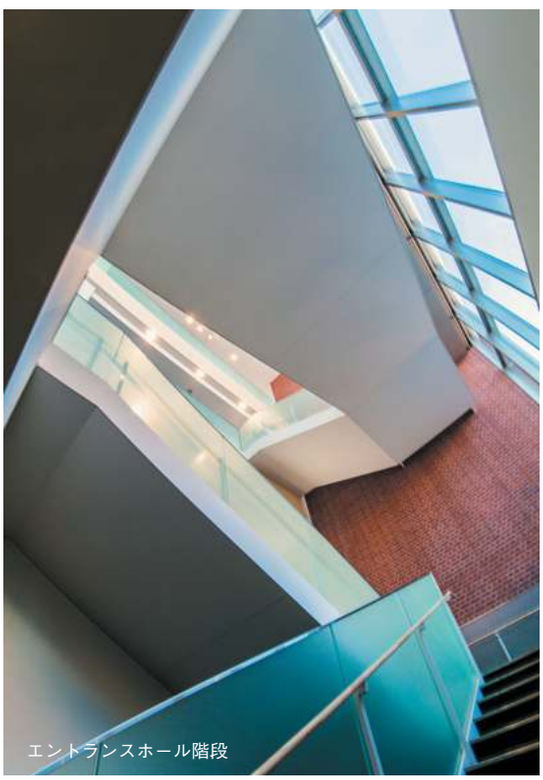
【総論】
温泉から見る　～歴史・人・街・文化～●松田忠徳 ―― 40
【各論】
1　温泉とまちづくり　城崎温泉・木屋町小路プロジェクトを通じて
●後藤春彦 ―― 44
2　健康・福祉と温泉　温泉を活用したユニバーサルデザインのまちづくり●田中直人 ―― 46
【寄稿】
飯田　匡・内山優子・大佐古和代・勝山太郎・設楽貞樹・田中直人・戸川勝之・松田奈緒子・森　裕史・守井　辰・吉村英祐・米井　寛（記事掲載は順不同） ―― 50

年頭の言葉　2018年を迎えて●設楽貞樹　1
本年の抱負　常設委員会●勝山太郎・中尾勝悦・西　博康・山形政昭・中村文紀　2
会告　若き創造者たちへ「第65回青年技術者顕彰」のご案内　3
平成29年度建築工事実務講習会（本部、東海支部）　3
建築工事実務講習会（中国支部）/約款の改正について　4
作品作風　同志社女子大学 楽真館　6
gallery　Geosymbiosis●白鳥　武　8
法令コーナー　マンション建替え法による容積率緩和特例を許可●中　敦史　60
構造の頁　施設をつなぐ縁側モールとアトリウム空間―阿久比町庁舎―●安田拓矢　61
建築と社会を考える　成熟社会の住環境づくり●鈴木克彦　62
中村昌生・池田俊彦対談①　茶室　～究める道を歩んで　66
デザインコンクール　第63回工高生デザインコンクール設計課題／伝統工芸館　71
Member's Forum　ヒマラヤの学校建設―ネパール中部大地震からの復興支援を通じて―●野田隆史　78
information　ゴッホ展 巡りゆく日本の夢／伝統工芸企画展 赤膚焼・奈良一刀彫・奈良漆器… 悠久の美と技／アラビアの道ーサウジアラビア王国の至宝／特集展示 ほのぼの俳画、生田南水／おかざき世界子ども美術博物館　所蔵　天才たちの青春ー世界の巨匠たちが子どもだったころー　80
月間の動き　平成29年11月　88

東側広場からの外観



エントランスホール



エントランスホール階段

同志社女子大学 楽真館

建　築　主　学校法人 同志社
設計・監理　東畑建築事務所
施　　工　清水建設

景観・地域環境に配慮した安心・安全なキャンパス

同志社女子大学今出川キャンパスでは、安心・安全なキャンパスを目指し、既存建物の耐震診断を行った結果、耐震強度不足の建物があることが判明した。そしてこの問題に対する検討を行う過程において、周辺環境に対して日影既存不適格が存在すること、全学共通の学修スペースが不足することがわかり、総合的に整備を行うことになった。

楽真館は、この整備の中で耐震強度の不足する既存建物の建替えとして計画され、さらに今出川キャンパスにおける中核となる施設として整備された。楽真館には、同志社女子大学では初めてのラーニング・コモンズや、公開講座や各種イベントなど様々な年齢の方にも利用していただける約250名収容の講義室をはじめとする各種講義演習室、人間生活学科関連施設等によって構成されている。

建物の中心に位置するラーニング・コモンズは、透明感のあるガラス張りの空間とし、吹抜けを有する伸びやかな構成、上下階を繋ぐらせん階段によって一体感のある劇場空間とし、学生の能動的学修活動が建物内外から立体的に見ることが出来る設えとなっている。吹抜け正面には360インチスクリーンを設置しており、学生のイベントやプレゼンテーションに活用できる。

外観は、国・登録有形文化財である栄光館やジェームズ館など今出川キャンパスの歴史ある建築物との意匠的な調和を図るために、レンガの風合いや特徴的なボーダーラインを基調とした外壁とし、アーチ窓や深い軒と勾配屋根を有するデザインとしている。

（石井康彦／東畑建築事務所）

所 在 地　京都市上京区今出川通寺町西入三丁目常盤井殿町543番地
敷地面積　49,443.97㎡
建築面積　1,624.49㎡
延床面積　6,358.17㎡
構造規模　SRC造一部S造　地上４階・地下１階
工　　期　2016年４月～2017年８月末
最 寄 駅　京都市営地下鉄　今出川駅
撮　　影　時空アート


アーチ窓のあるホワイエ


ラーニング・コモンズ


外部から見えるラーニング・コモンズ

まち　建築　ひと

gallery

ジオシンビオシス

Geosymbiosis

地球共生デザインを
追い求めて

地球共生家・地球共生デザイナー

白鳥　武

本当は建築デザインに没頭したい。

持続可能性を求め、廃棄木材や割竹の構造活用や、地震多発地の被災後復旧を容易にする構法を開発してきた。

しかし、自然と共生する建築・住環境を追究していくと地球と共生しないと「嘘」になる。主流の価値観から成る社会や生活文化だけでなく、母なる大地と生きる多様な民族や未知の人々、動物や虫などあらゆる声なき生命体達と共生を図るには、国際社会の多様な歪にも目を向ける必要がある。
一方で戦後70年を経ても我々人類の紛争や環境破壊は止むことを知らず、軍事力や権力による搾取も、難民や動物の苦しみも繰り返される。そんな中、狭義の建築学術分野に囚われると一向に解決できない。新しいビジョン・教育・デザイン手法が必要。

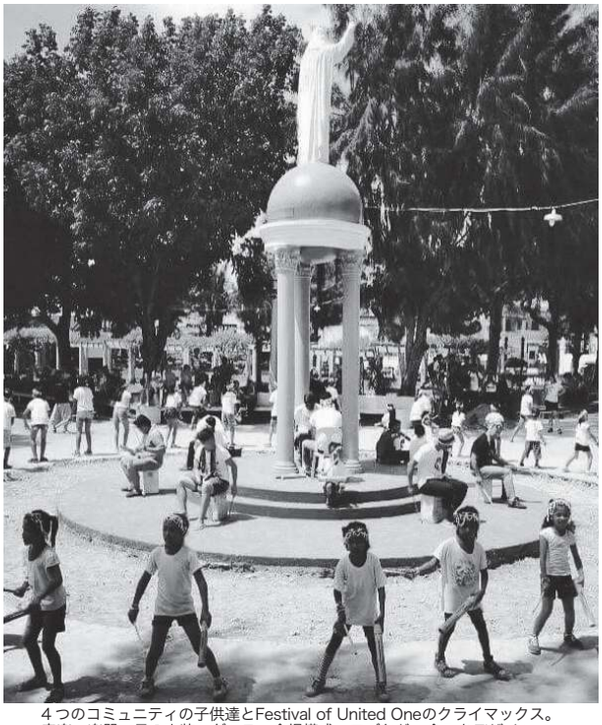
そこで環境と人を含めた「全生命体との調和的共生ビジョンとそれの追求姿勢」をジオシンビオシス/地球共生と命名・定義（2010）し、それを複眼的に具現化する行為の総称を「地球共生デザイン」として提唱する。持続可能な開発・イノベーション・人道主義の理念３軸を指針に現地市民らとの知的創造活動・協同を前提として「地球共生阻害問題群」の解決を図る。そのプロセスで共生ビジョンを持った人間連盟を繋げていく。他分野との接点を拡張しながら、有形・無形を問わず包括的に何でもデザインして行く。

2015/16年は自然災害・搾取・貧困が蔓延するフィリピン社会に切り込んだ。風通しとプライバシー、台風圧分散効果を狙うシェルターや生業提案群、子供達200人との祭り等多様なデザインを行った。2017年は文化的ジェノサイドによる負の連鎖や住宅難に苦しむカナダ先住民の文化応答性D.I.Y木造住宅（T.U.R.T.L.E）を提案。大工技術指導と施工を軸にしたコミュニティ復興プロジェクトや都市部における祭りとムーブメントEnd To Endを始動。Sagkeeng Anicinabe First Nationから栄誉の鷹羽を受勲。協同で導いた成果はみんなのもの。地球共生阻害問題ある処に我らあり！

白鳥　武（しらとり　たけし）
1970年 東京生まれ
1993年 米国ジョージア工科大学卒業
1994-2002年 鹿島建設(建築設計部等)
2004年 スイス連邦工科大学ローザンヌ木構造修士課程修了
2010年 京都大学大学院農学研究科森林科学専攻　博士課程修了(農博)
2010年 AGA（吾が）研究所設立
ジオワンダーアカデミー開校
2013年 京都府立大学大学院特任助教
現　在 摂南大学理工学部准教授
地球共生デザイン研究室

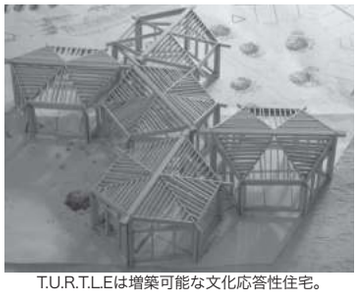


地球共生ワークショップダイアグラム。協同の指針である理念３軸。


4つのコミュニティの子供達とFestival of United Oneのクライマックス。
音楽・楽器・貝の衣装・ダンス・会場構成・ロゴなど、全てをデザイン。


Geosymbiotic workshopでYoutube検索、視聴可能。


貝の衣装デザインが美しい笑顔の子供達。


T.U.R.T.L.Eは増築可能な文化応答性住宅。


Sagkeeng Anicinabe First Nationの若者と日本の学生の協同と笑顔は
共生への確かな希望に。


2015年は貧困地域の診療所として活用されたシェルター。
狭くてもプライバシーを確保できる十文字平面と間仕切り内部仕様。


2016年は「風を割る」Windbreaking 多角形状のシェルターに挑戦。
屋根はホタテ由来の反射性塗布材。


現地自然素材、ココランバーでメインフレームをつくり、施工作業も協同。


プロトタイプ施工途中。この敷地はレジデンシャルスクールという、多くの
先住民を苦しめた同化政策としての寄宿生学校の跡地に偶然建てられた。

企画編集：加嶋章博（作品作風小委員会）

85
SINCE 1932
東畑建築事務所
TOHATA ARCHITECTS & ENGINEERS





理念

依頼主と社会への貢献

私たちは、依頼主への価値の提供とともに、社会全体からの信頼を獲得し、社会と文化の醸成に貢献する。

人間と環境への真摯な眼差し

私たちは、建築・都市の創造を志すにあたり、人間とそれを取り巻く環境に深い尊厳と信頼を持つことを旨とする。

持続可能な建築･都市環境の創造

私たちは、時間の経過とともに真の価値を発揮するような建築・都市環境の創造を目指し、持続可能な社会の実現に寄与する。

創業者精神の継承

清純潔白の社風を培い来たりし先輩の美風を受け継ぎて、当社に職を奉じ技芸を研鑽するの喜びを深く悟り、これが発揚に一層の努力をなし、些かなりとも之の名誉を汚さざる様自重自戒のこと。

私たちは、この創業者の言葉を戒めとして心に刻み、謙虚さと誠実さをもって組織と業務のあり方を見つめ直す。

叡智の結集

私たちの組織の最大の財産は人であり、各人が有する叡智である。各人は、自らの研鑽に励み、組織は、各人の主体的意志を尊重しつつ、叡智を結集して総合的能力を高める。

ー 創設85周年にあたって ー

2017（平成29）年12月13日、当社は創設85周年を迎えました。創業者・東畑謙三が常に目指したのは、「最大よりも最優」をモットーに建築技術を通じてお客さまのさまざまな要望に期待以上に応え、社会に貢献することでした。その姿勢は幸いにも多くのお客さまから好意を持って迎えられ、その後も多くの所員によって受け継がれて、今日に至っています。その意味で当社とは、数々の名建築を残してきた東畑謙三の、もうひとつの「作品」といえるかもしれません。

個人であれ法人であれ、建築をつくることはお客さまにとって一大事業。歳月や災害に耐え、長きにわたってその価値を保ち続けるには、耐久性・安全性・機能性といった基本性能の高さが不可欠です。さらに近年は、街づくりや省エネ・環境性能や耐震性などの先端技術も、求められています。われわれが目指している“技術に裏付けられた持続可能な建築・都市環境の創造”はこれらの性能を末永くお客さまに提供し続ける建築のあり方であり、設計者の姿勢に他なりません。

一方、社会が目まぐるしく変化する中で、われわれに求められる役割は拡大の一途をたどっています。そのフィールドは、個々の建築から街づくりへと広がり、その業務も設計作業以前の企画・提案から竣工後の運営手法の構築、さらに異分野の専門家達との協働など多岐にわたっています。その中でも重要なのは、お客さまや利用者、社会全体に対して、十分な説明責任を果たすこと。「なぜこの建築でなければならないのか」が厳しく問われている今、このプロセスはきわめて重要です。

複雑多岐にわたるわれわれの業務を支えているのは、常に社会に目を配り、最新の建築技術を精力的に学びつつ、自由な創造力を発揮してきた「自律」した所員たちの存在であり、それを全員で支える組織事務所としてのシステムです。それはまた、創設以来現在に至るまで、皆様から寄せられた信頼と期待の源泉でもあります。いかに建築が変貌し、建築手法が変化しようとも、人が暮らすための空間を人がつくる、というこの一点は揺らぐことがありません。時代に応じた創造性を発揮しつつ、時代を超えた価値をお客さまと社会に対して提供し続けるために、当社はこれからも歩み続けます。今後とも、皆様のご指導ご支援をよろしくお願いする次第です。



代表取締役社長　香西 喜八郎

History 85 SINCE 1932

東畑建築事務所の これまで、これから

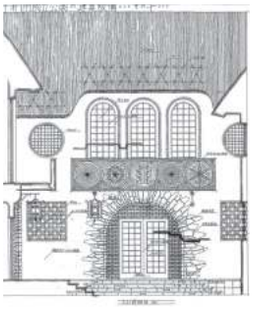
創設まで

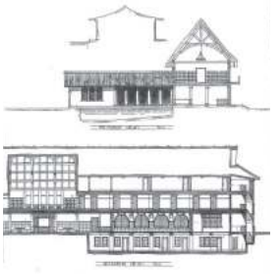
東畑謙三は、1902（明治35）年に三重県で生まれました。第三高等学校から1923（大正12）年に京都帝国大学建築学科に入学。卒業後は大学院に進学し、武田五一などのもとで建築を学びますが、大学院では、日本建築学会の『建築雑誌』に対抗するかたちで発刊された『建築学研究』の編集にあたったといいます。東畑はこの雑誌に近代建築運動のリーダーのひとり、ル・コルビュジエのことを掲載したこともあり、「日本に最初にコルビュジエを（活字で）紹介したのは自分だ」と後に語っています。この頃、武田五一のもとで、東方文化学院京都研究所（現 京都大学人文科学研究所）の設計に従事しました。建物は1930（昭和5）年に完成しますが、武田五一は設計をほぼ東畑に任せたといい、この建物は東畑の処女作といっていいでしょう。

その後の東畑は、産業建築に傾倒していきます。義父・岩井勝次郎（岩井産業（現 双日）の創業者）から「これからは産業建築だ」と諭されたこともきっかけになったようですが、1932（昭和7）年の欧米視察でアルバート・カーン（米国の建築家）設計の工場建築を目にして、その思いは決定的になったといいます。建築を機能に応じて合理的に構成していく、また、その設計の方法や体制においても合理的であるべきだ、という“合理主義”を東畑はこのとき学び、後に自らを“構成技師”と呼びつつ、これを実践していきます。



東方文化学院京都研究所





卒業設計「十和田湖国立公園における建築設備」

東畑謙三の精神とその軌跡

History of KENZO TOHATA

東畑謙三は、1902年（明治35年）三重県に生まれました。五きょうだいの三男で長兄は文化勲章を受章した農政学者で東京大学教授を務めた東畑精一。次兄敬二も京都大学で哲学を修めた学者でした。弟四郎は、東京大学法学部を出て農林事務次官を務め、妹喜美子は哲学者三木清に嫁ぐなどいわゆる学者一家に生まれ育ちました。

東畑は、京都大学大学院時代から武田五一にその傑出したデザイン力を見出され、スパニッシュ・ロマネスク様式の「東方文化学院京都研究所（現 京都大学人文科学研究所）」を設計しました。にもかかわらず東畑は自身を建築家とは呼ばず、建築技師を終生標榜しました。ル・コルビュジエからモダニズムの洗礼を受け、戦前戦中の工場建築で徹底したモダニズムを追求し、自らのデザイン志向を限りなく抑制しました。

「関西ペイント本社ビル」（1950年・現存せず）の外壁を縦に分割する金目地のモザイクタイル、「寧楽美術館」（1969年）のボリュームのある大和屋根を二分する中央部のスリット、「辰馬考古資料館」（1977年）の外部をさらに空間で包むという空間の多重構造を生み出した手法などには、抑制したデザインの中にも東畑のこだわりが見てとれます。

東畑が半世紀以上にわたり、技術研鑽の参考資料として自ら厳選し蒐集した、稀覯書コレクションに「清林文庫」があります。「清林」の名は中国の漢詩「清風竹林に満つ」から付されたもので、稀覯書の1冊1冊が、東畑の見識に適ったものばかりです。総数は15,000冊以上にのぼり、建築をはじめ、美術、工芸、絵画、彫刻、古地図、考古学、探検記など多岐にわたります。なかでも建築書に関しては、質と量ともに国内最大級・最良のコレクションとして評価されています。



創業者
東畑 謙三
とうはたけんぞう

1902年 三重県一志郡嬉野町生まれ
1926年 京都大学工学部建築学科卒業
1927年 京都大学大学院入学
1929年 外務省嘱託として東方文化学院京都研究所設計に携わる
1932年 東畑謙三建築事務所開設
1951年 組織変更により東畑建築事務所開設、代表取締役に就任
1998年 4月没

草創期

社長：東畑謙三（1932~1950年）

欧米視察から帰国した後、1932（昭和7）年12月13日、東畑は大阪市北区堂島の地に事務所を開きます。当初のスタッフはわずか５人。東畑は自ら図面を引き、クライアントへの提案やプレゼンテーションを行い、現場にも立ち会います。一方、スタッフには実務の初歩から指導し、かたわらで海外の新しい技術や思想を貪欲に学んでいきました。その強いリーダーシップは、東畑が仕事を指示するとき、所員は全員直立不動で聞いたという逸話からもうかがえます。当社の草創期は、このような、まさに小さなアトリエでした。

当時の建築界には、欧州からもたらされた近代建築運動が根付きつつありました。東畑は、米国でアルバート・カーンの建築から学んだ合理主義を実践すべく、国内の産業建築に新風を吹き込みます。事務所開設後の初仕事となった「東亜紡績楠工場」以降、紡績工場の設計が続きました。これまでの紡績工場で問題となっていたトラスへの綿埃への付着を解消すべく、ノコギリ屋根ラーメン構造を採用しました。これは鉄骨量を減らしてコストを抑えつつ、柱の少ない大空間を造る手法としては画期的なものでした。



東亜紡績楠工場

最小のコストでクライアントにとって最大のメリットを追求する姿勢は、その後の事務所の方針となっていきます。

この時期の事務所の理念は、東畑自ら語った次のような言葉に集約されるでしょう。「自分たちは建築という技術の専門家なのであって、施主に最小限のコストで最大限の満足を与えるような仕事をせよ。独善的なデザインや考えを押しつけるような事をしてはいけない。また、単にものをバラバラに並べただけでは建築にならない。一個の建築に必要な要素を検討し、それらを構成していくことで建築をつくっていくこと」。こうした東畑の姿勢は、個を前面に出す建築家とは一線を画す“もうひとつの行き方”といっていいでしょう。しかし、この言葉が示す、独善を排し利他的にふるまうこと、あるいは、抑制的でありつつも構成的に精緻に建築をつくることなどは、現代に通じる設計者としても重要な価値観の一つであるともいえるでしょう。戦後の混乱期を経て、1947（昭和22）年、東畑は事務所を再開します。時代は戦後復興期。各地で操業を再開した紡績工場の修復に、東畑とそのスタッフは邁進しました。

1950（昭和25）年、建築関係資材統制が解除された日本は、本格的な建築の時代に入ります。この時期、当社は多数の製鉄工場も手掛けています。また、紡績工場では無窓工場も実現しました。雨風の影響を遮断したこの工場は、均質な製品づくりを目指す紡績会社が長年、待ち望んできたものでした。



雨風の影響を遮断した無窓工場

年表でみる東畑建築事務所の歴史

History of TOHATA ARCHITECTS & ENGINEERS

1930年代

東畑建築事務所の出来事

1932年　東畑謙三建築事務所開設
　　所員数5名
1937年　設計監理のため
　　中国に所員派遣
1939年　大阪府豊中市に
　　分室設置



豊中分室（1939）

社会の出来事

1933年　ブルーノ・タウト来日
　　大阪市営地下鉄御堂筋線
　　梅田-心斎橋間開通（日本初の地下鉄）
1934年　国会議事堂完成
1939年　第二次世界大戦

1940年代

東畑建築事務所の出来事

1940年　所員数10名
1941年　東畑謙三、京都大学講師就任
1948年　東畑謙三、大阪大学講師就任

社会の出来事

1944年　東南海地震
1945年　第二次世界大戦終結
1947年　日本国憲法施行
1948年　福井大地震、死者3,895名
1949年　湯川秀樹ノーベル物理学賞

1950年代

東畑建築事務所の出来事

1950年　所員数20名
1951年　東畑謙三、日本建築協会副会長就任
　　東畑建築事務所に改組、
　　一級建築士事務所登録
1957年　九州支社を開設
　　本社を大阪市東区伏見町に
　　新築、移転
1958年　東京支社を開設



本社ビル（1957）

社会の出来事

1951年　サンフランシスコ講和会議、日米安全保障条約
1954年　三種の神器ブーム（冷蔵庫・洗濯機・掃除機）
1955年　尺貫法廃止、メートル法統一
1958年　東京タワー完成
1959年　伊勢湾台風、死者行方不明者5,101人

成長期

社長：東畑謙三（1951～1982年）

日本の復興が本格化するにつれ、当社の業務は、それまでの産業建築主体から官庁、オフィスビル、学校、共同住宅など、多方面に広がっていきました。1955（昭和30）年に設立された日本住宅公団は、良質で本格的な大規模住宅を次々と供給。当社でも、千里ニュータウンなどの大規模公営住宅や大阪市法円坂住宅などを手がけています。とりわけ、20階建ての超高層住宅と屋上庭園・商業施設・体育館・ホールなどの公共的施設をバランスよく配置した兵庫駅前市街地住宅は、その後の市街地再開発のひとつのモデルとして高い評価を受けています。オフィスビルでは、関西ペイント本社ビル、三重会館、富士フイルム大阪支店ビルなどがこの時期の主要な設計実績です。

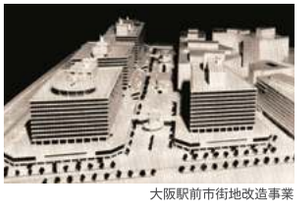
1960年代の当社は、三重県庁舎や甲南大学15号館などを手がける一方、大型ショッピングセンターなども設計しています。大阪市の命を受け、戦後のバラックが残る大阪駅前の市街地改造計画にも東畑は参画しました。1959（昭和34）年の事業着手以来25年に及んだ大事業でしたが、都心の大規模再開発事業としては国内の先駆的プロジェクトと位置づけられます。また、1972（昭和47）年から計画に着手した日商岩井大阪本社ビルは、大規模総合設計制度の第１号事例であるとともに、ダブルチューブ構造による高層建築の試みとしても画期的なものでした。

一方、こうした業務の拡大は、事務所の組織改革を進める契機ともなりました。東畑は、それまでの自ら手を動かしてスタッフを先導するスタイルを次第に改め、仕事は熟達した技術者に任せつつ、この集団を指揮するコンダクターのような役割を指向していきました。1960年代～70年代にかけては、東畑の意思を適確に受け止めた６人のリーダーが、100人を超える所員を束ねるスタイルが定着します。並行して、九州事務所（1957年）、東京事務所（1958年）、名古屋事務所（1960年）を相次いで設立し、こうして全国に事業展開する総合組織事務所としての体制が整備されていきました。

“人類の進歩と調和”を掲げる大阪万国博とともに始まった1970年代は、1973（昭和48）年のオイルショックによって深刻な景気後退期を迎えます。この事態を受け、当社では、逆境に耐える強靭な組織づくりを図るべく、「システム委員会」が置かれ、組織上の権限と責任の明確化、業務の流れのフローチャート化、対外的な設計責任への対応体制整備、などのシステムづくりが行われました。なかでも新設された「調査室」は、内外の建築資料・情報の収集・管理を通じて、設計部門へのサポートを行うとともに、当時増えつつあった都市再開発計画や公共建築コンペへの対応を目指したものでした。その成果は、河内長野駅前再開発、京都駅前南口再開発などのコンペ当選に現れましたが、この後、調査室が発展して多くの市街地再開発事業を手掛けることにもなりました。

創業者東畑謙三が事務所を率いた時代は、まさに日本の高度経済成長とともにありました。東畑は、美術や陶芸などの芸術全般への深い造詣に根差したデザイナーとして腕を振るう一方で、若き日に米国で学んだ合理主義に基づく合目的的な建築づくりや組織づくりに注力しました。このような自らの行き方を“構成技師”と呼び、高度成長の時代に、個を前面に出す建築家としてではなく、さまざまな与条件を分析して合目的的に建築を構成し、あるいは、多くの個が集う組織のシステムをつくる構成技師として、事務所を成長させ、社会に貢献していきました。


富士フイルム大阪支店ビル


大阪駅前市街地改造事業


三重県庁舎

年表でみる東畑建築事務所の歴史

東畑建築事務所の出来事

1960年代

1960年　所員数91名、名古屋支社を開設、清林社を設立
1962年　東京支社を東京事務所に昇格移転
　　東畑謙三、藍綬褒章を拝受
1963年　名古屋支社を名古屋事務所に昇格
1964年　東畑謙三、日本建築家協会会長就任
1966年　東京事務所、永田町ビルに入居
1967年　東畑謙三、万博博覧会建設顧問就任
1969年　東畑謙三、大阪市建築審査会会長就任

1970年代

1970年　所員数173名、
　　東畑謙三、大阪府開発審査会会長代理就任
1971年　東畑謙三、日本建築協会名誉会長就任
　　DEMOS導入
1972年　東畑謙三、日本建築学会名誉会員
　　勲三等瑞宝章を拝受
1973年　東畑謙三、
　　沖縄国際海洋博覧会協会建設顧問就任
1973年　市川宏、大阪府建築士会理事・日本建築家協会関西支部幹事就任
　　東畑本社ビル（新伏見町ビル）竣工
1975年　北九州支所移転（清和ビル）
　　市川宏、大阪建築設計監理協会副会長就任
　　技術開発室設置

社会の出来事

1960年代

1960年　カラーテレビ本放送開始
1963年　テレビ衛星中継 ケネディ大統領暗殺事件
1964年　東京オリンピック
1966年　日本の人口1億人突破
1967年　非核三原則（核政策の基本方針）
1969年　アポロ11号月面着陸成功

1970年代

1970年　日本万国博覧会開幕
1972年　沖縄返還
1973年　オイルショック
1974年　佐藤栄作　ノーベル平和賞受章
1975年　ベトナム戦争終結
1976年　ロッキード事件
1978年　新東京国際空港開港


永田町ビル（1966）


新伏見町ビル（1973）

発展期

社長：市川宏（1982〜1997年）

1982（昭和57）年、満80歳を迎えた東畑謙三に代わり、市川宏が第2代社長に就任します。市川は社員に対し、「技術者としての責任は全うしつつも、個人の個性を存分に発揮してほしい」と語りかけます。創業者が自ら組織を牽引する時代が終わり、さまざまな個性を引き出し、その総体としての東畑建築事務所をより輝かせようとする市川の思いの表れでした。



大阪国際見本市会場 インテックス大阪



小山田記念温泉病院



天理市庁舎

この時期の代表作としては、日本初の骨組膜構造を採用した大阪国際見本市会場 インテックス大阪、病院内部に大規模なアトリウムを設け長期療養型病院の先駆けとなった小山田記念温泉病院、主棟の屋根に曲線の塔状屋根をのせた天理市庁舎などがあります。

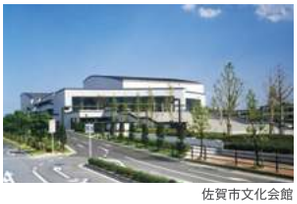
いずれも、事務所の伝統である手堅い構造的技術と、“個”の時代にふさわしいのびやかな表現とが調和しており、東畑謙三以後の事務所の方向を示す作品でした。建築雑誌に作品が掲載される場合、担当者が署名入りコメントを発表するようになったのもこの頃です。

こうしたいい意味での自由さは1990年代にも受け継がれ、佐賀市文化会館、国際花と緑の博覧会 政府苑、千里ライフサイエンスセンター、広島広域公園陸上競技場、泉佐野市総合文化センターなどの作品が次々と生まれました。当時はバブル末期の建設ラッシュが続いた時代。各プロジェクトの担当者は事務所に蓄積された技術を背景に、自らの建築観とテーマを深く掘り下げ、手堅さだけではないソフトで意欲的な作品をつくり上げていったのです。



国際花と緑の博覧会 政府苑

所員による個性の表出を奨励する市川は、組織事務所としての効率化・総合化を図りつつ、全国に通用する総合建築事務所を目指していました。とはいえ、その基本となるのは、設計技術の蓄積と研鑽であり、クライアントに真摯に向き合い必要とされる建築を確実につくりだす姿勢です。こうした創業者から受け継いだ遺伝子を大切にしつつ、この時代、当社は多様な建築表現という果実を結びつつ発展していきました。



佐賀市文化会館



広島広域公園陸上競技場

History of TOHATA ARCHITECTS & ENGINEERS

1980年代

1982年 東北新幹線開通
東京ディズニーランドオープン
1986年 チェルノブイリ事故
1988年 青函トンネル開通
瀬戸大橋開通
1989年 昭和天皇崩御
ベルリンの壁崩壊

1980年 所員数231名、北九州支所、北九州事務所に昇格
1982年 東畑謙三、取締役会長就任　市川宏、代表取締役社長就任
1983年 横浜支所開設
1986年 市川宏、黄綬褒章を拝受
1987年 福岡支所開設
1988年 大阪事務所CAD導入
1989年 九州事務所移転（福岡センタービル）
東畑謙三、紺綬褒章を拝受

1990年代

1990年 国際花と緑の博覧会開幕
東西ドイツ統一
1991年 長崎、雲仙普賢岳噴火
湾岸戦争勃発
1995年 阪神・淡路大震災
1997年 地球温暖化防止京都会議
京都議定書（COP3）採択
1998年 明石海峡大橋完成

1990年 所員数292名、情報システム室設置
1991年 都市開発／情報管理部設置
1994年 名古屋事務所移転（三井生命名古屋伏見ビル）
市川宏、日本建築協会会長就任
勲五等双光旭日章を拝受
1994年 東北支所開設（仙台市太白区）
1997年 東北支所移転（仙台市青葉区）
東畑謙三、取締役名誉会長就任

1997年 市川宏、代表取締役会長就任
真塚達夫、代表取締役社長就任
1998年 東畑謙三 没（享年97歳）
1999年 ISO9001認証取得
「待てしばしはない―東畑謙三の光跡―」刊行



ねずみ色からぼたん鍋まで（1990）



待てしばしはない ―東畑謙三の光跡―（1999）

新生期

社長：真塚達夫（1997～2004年）
社長：谷淳之介（2004～2009年）

1997（平成9）年、2代目社長市川宏の後を継いで社長に就任した真塚達夫は、創業家以外からの初の社長でした。その時代は、オーナー事務所から組織事務所への本格的脱皮の時期だったといえます。

次第に薄れていくオーナーのカリスマ性に代わって、組織をまとめ引っ張っていくためには何が必要か。真塚が打ち出したのは、“社会のニーズに応じて活動する”ためのシステムづくりでした。品格や倫理性を大切にし、クライアントの要望に技術力で応えることはもちろんですが、計画の原点にさかのぼり、積極的にプログラムを提案する事務所を目指すとし、そのためには組織のあり方自体にも思い切った改革が必要だ、というのが真塚の判断でした。

就任以後、真塚は次々と新機軸を打ち出します。実務能力だけでなく成果にウエイトをおく所員評価、顧客満足を高めるためのISO認証取得、一部業務の分社化による経営の多角化、中国市場への進出‥‥。中でも大阪・東京の二極体制を確立し、さらなる発展を目指そうという東西二眼レフ論は、創業の地・大阪に軸足を置きつつ東京に打って出る真塚としての将来ビジョンでした。

作品においては、1990年代には横浜国際総合競技場（日産スタジアム）、三重県議会棟、小倉競馬場などが誕生。2000年代には滋賀県立成人病センターやさいたま新都心合同庁舎。また、帝塚山大学・神奈川県立保健福祉大学・甲南大学・大阪商業大学のような大学建築が完成しています。

真塚が描いた分社化や拠点再整備の構想は、企業の新生期にこそふさわしい事業モデルだったといえるかもしれません。バブル崩壊後の景気低迷に伴う成長の停滞や、内部統制を強化する必要などを背景に、やがてビジョンの再構築を決断し、当社が社会に存在する意義は何かという原点を踏まえた事務所像の構想に着手することになりました。


小倉競馬場


さいたま新都心合同庁舎

真塚に続いて社長に就任した谷淳之介は、“全社一丸”を掲げ、社内にあっては競争よりも協調を、社外に対しては誠意をもってものづくりにあたることを繰り返し所員に説いて回りました。設計者に求められる能力を、“生み出す力”、“表現する力”、“説明する力”という分かりやすい言葉で言い表し、ものづくりへのモチベーションを高めていきました。また、当時会長職にあった2代目社長市川宏の指令のもと、当社の理念と規範を見直す作業も行われました。“最大よりも最優”を目指すとした創業者精神に立ち返りつつ、東畑建築事務所が社会に存在し続ける意義をこの理念と規範に結晶させ、今に至っています。


富士フイルム先進研究所

谷社長時代には、富士フイルム先進研究所、済生会熊本病院、警視庁東京湾岸警察署などが完成していますが、新設された社内組織としては、「環境計画室」があげられます。これは、環境計画に対する知見を集約しジャンル横断的に計画提案を行う先駆的なチームですが、当社の理念である持続可能な建築・都市環境の創造の実現に向けて、これまでに様々な成果を残しています。

創業者精神とものづくりの原点への回帰を謳いつつ、全社一丸体制を進めてきた谷は、一定の区切りがついたとして、2009年に退任しました。

年表でみる東畑建築事務所の歴史

東畑建築事務所の出来事

2000年　所員数316名
　　環境計画室設置
　　海外事業プロジェクト室設置
2004年　谷淳之介、代表取締役社長就任
2005年　上海東畑建築設計諮訊
　　有限公司設立
2007年　創立75周年事業として「清林文庫」展を
　　武庫川女子大学甲子園会館にて開催
2009年　「近代建築」創立75周年特集
　　「歴史と未来のコンテクスト」刊行
　　九州事務所移転
　　（富士フイルム福岡ビル）
2009年　香西喜八郎、代表取締役就任


「清林文庫」展（2007）

2000年代

社会の出来事

2000年　白川英樹がノーベル化学賞を受賞
2001年　アメリカ同時多発テロ事件
　　大阪府にユニバーサル・スタジオ・ジャパンが開園
2002年　FIFAワールドカップ・日韓大会が開催
2003年　宮城県北部地震、十勝沖地震
2004年　スマトラ沖地震
2005年　郵政民営化関連法案が可決、成立
2006年　日本で携帯電話の番号ポータビリティが開始
2007年　米でサブプライムローン問題が浮上
　　京都大学の山中伸弥教授が、人工多能性幹
　　細胞（iPS細胞）の作成に成功したと発表
2008年　日本で主要国首脳会議（洞爺湖サミット）開催
2009年　民主党大勝利で政権交代
　　裁判員制度スタート


「清林文庫」展（2007）

そして現在

社長：香西喜八郎（2009年～）

2009（平成21）年、谷淳之介から経営のバトンを受け継いだ香西喜八郎は、子会社の統合や上海事務所の整理など、役割を終えた組織の改変を行い、同時に、競争力のある組織事務所としての体制整備に取り組みます。建築品質の向上に欠かせない品質推進本部の設置、あいまいだった役員の所掌の明確化、自律的な運営に任されていた４事務所（大阪・東京・名古屋・九州）の3オフィスへの統合による全社一丸体制、経営戦略に対する厳密な姿勢などは、やや牧歌的な雰囲気があった事務所内にいい意味での厳しさをもたらしました。

技術面では、学校エコ改修事業への参画などの環境設計や、BIMへの対応に積極的に取り組んでいます。BIMについては、設計品質の向上に寄与する一定レベルの技術を得ていますが、今後の動向を見極めつつ、裾野の拡大と設計技術の進展を目指しています。

香西の目指すものをひと言でいえば、本業において社員が最高のパフォーマンスを発揮できる環境を提供する事務所の構築といえるでしょう。その背景には、ここ10年でますますスピードアップする世の中の変化があります。変化を追うのではなく、変化をリードする事務所にならなければという危機意識が、香西の改革を支えています。2017（平成29）年には念願だった「設計監理本部」を設置。個々のスタッフの設計を大切にしつつ、当社ならではの建築哲学がすべての仕事に息づいている、そんな事務所のあり方を目指しています。



武田薬品研修所・宿泊棟



ホテル「THE THOUSAND KYOTO」



同志社大学 良心館

創設当初から高度で手堅い技術力を大切にしてきた当社ですが、これからの事務所はさらに高い情報力とデザイン力を併せ持つべきだ、というのが、香西の持論です。目まぐるしく変化する法令や技術にいち早く対応し、クライアントのニーズに期待以上の提案で応えていく。その積み重ねが、クライアントに選ばれる事務所づくり、「東畑でなければ」といわれる事務所づくりにつながるのだと。クライアントの要望に対して、ハードとしての建築でお応えするだけでなく、その要望の根源にまでさかのぼり新たなソリューションを打ち出す、コンサルタント的な役割をも提供できるのが当社の強みです。

今や建築を取り巻く状況はますます複雑化しており、設計に求められるのは直接のクライアントだけでなく、施設の利用者、さらに社会全体にまで広がっています。すべての要望を満たすことは至難の業ですが、その険しい道の向こうにこそ創業者・東畑謙三が掲げた“依頼主第一主義”の理念があります。創設85周年を迎えた建築のプロフェッショナル集団として、当社はこれからも自らに課せられた社会的責任を高いレベルで果たしていく決意です。次頁以下に当社の目指す最新の取組みとこれからを 5 項目のテーマにまとめました。

History of TOHATA ARCHITECTS & ENGINEERS

2010年　所員数282名、広島支所を開設
　　名古屋事務所が移転（名古屋KSビル）
2011年　市川宏 没（享年87歳）
2012年　香西喜八郎 日本建築協会会長就任
　　本社・大阪事務所が移転（新高麗橋ビル）
2013年　「近代建築」創立80周年特集「共感する建築ー
　　わたしたちの設計手法ー」刊行
　　「建築と社会」創立80周年特集「U-35のまなざし」刊行

2010年代

2010年　小惑星探査機「はやぶさ」帰還
　　尖閣諸島中国漁船衝突事件発生
2011年　世界人口が70億人を突破
　　東日本大震災、福島原子力発電所事故
　　FIFA女子ワールドカップドイツ大会が開催され、
　　なでしこジャパンが優勝
2012年　京都大学の山中伸弥教授がノーベル生理学・医学賞
　　を受賞
2013年　京都大学人文科学研究所（旧 東方文化学院京都研究所）を改修
2014年　東畑公式ホームページ改定、東畑Facebookリリース
2015年　日刊建設工業新聞と、日刊建設通信新聞から、東畑
　　建築事務所特集が発行
2017年　香西喜八郎が会長を務める日本建築協会が創立100周年
　　「清林文庫」展開催
　　12月13日創設85周年



新高麗橋ビル（2012）



京都大学人文科学研究所（2013）

2013年　富士山がユネスコ世界文化遺産に認定
2014年　リニア中央新幹線が着工
2016年　113番元素の名称が「ニホニウム」と正式決定
2017年　米国でドナルド・トランプ氏が大統領就任

設計JV

◇大阪駅前市街地改造事業：大阪市都市再開発局
◇京都駅前南口再開発：（基本設計）京都市計画局市街地再開発課、地域計画・建築研究所／（設計監理）京都市計画局市街地再開発課
◇小山田記念温泉病院：藤川建築設計事務所
◇天理市庁舎：天理市市長公室庁舎建設事務所
◇国際花と緑の博覧会 政府苑：近畿地方建設局営繕部
◇佐賀市文化会館：石橋建築事務所
◇広島広域公園陸上競技場：住宅・都市整備公団
◇横浜国際総合競技場：松田平田設計
◇小倉競馬場：旧 日本競馬施設
◇さいたま新都心合同庁舎：建設省関東地方建設局営繕部、日建設計、RTKL
◇神奈川県立保健福祉大学：大林組東京本社一級建築士事務所
◇同志社大学 良心館：類設計室



新城市立作手小学校·つくで交流館 アリーナ

木を活かす

適材適所で木を活かし
木造の良さを伝える

建築の木造化・木質化が急速に進むなかで、
当社は積極的に木造建築の提案に挑戦しています。



上京区総合庁舎 エントランスロビー



新城市立黄柳川小学校 クラスルーム

なぜ今、木なのか

昨今、非住宅建築物の木造化が脚光を浴びています。これには、戦後間もない頃から国がとってきた政策が背景にあります。戦後の木材需要の高まりから、拡大造林政策が始まり、それまで自然の風景であった里山の広葉樹を伐採し、スギ、ヒノキ、カラマツなどの針葉樹をどんどん植えていきました。その結果、国内の人工林が増大していったのですが、間伐されないまま放置された植林は、花粉症をもたらし、ゲリラ豪雨で各地の川をせき止める原因にもなりました。

この現状から国は、木の活用に乗り出しました。最初に動き始めたのは木造3階建て校舎をはじめとした公共建築物の木造化。木造の校舎建築では、新城市立黄柳川（つげがわ）小学校が、木造の大規模建築として当社にとってよい先例となりました。以降も木造校舎建築に意欲的に取り組んでいます。

期待の新材料といわれているCLT（直交集成板）も登場。CLTや耐火木造などを含めた木造化は、国の政策であり、その活用方策を提案し続けることが求められます。当社はこうした背景のなか、国や自治体の要請、クライアントのニーズ、ユーザーや社会のニーズにこたえるため、さまざまにチャレンジしてきました。

木材活用は、各地の森林組合が供給してきた長く親しまれた流通製材と開発が進むさまざまなエンジニアリングウッドをいかにバランスよく使用するかが大きなポイントの一つです。地域の製材を生かすために最新の加工技術や集成材などを使うという観点が重要です。

木をいかに活用するか

一口に建築物の木造化といっても、これまで鉄骨造やRC造が当たり前だった建築物を簡単に木造化することはできません。耐火の問題、建設費の問題、材料調達の問題、構造計画上の問題など、そこにはいくつものハードルが立ちはだかります。



魚津市立統合小学校木造校舎



魚津市立統合小学校木造校舎 クラスルーム

2020年完成予定の魚津市立統合小学校木造校舎は、2015年の建築基準法改正を受けて、文部科学省の“木の学校づくり先導事業”のモデル校となった木造3階建て校舎です。法改正により、それまでは耐火建築物でなければならなかったものが、準耐火建築物として建てられるようになりました。準耐火建築物では、柱などの構造部を太くして燃えしろをつくる“燃えしろ設計”にするか、防耐火性の高い材料で覆う“被覆型”にするか大きく二つに分かれますが、この校舎では両者の良いところを組み合わせたハイブリッドとしました。

真庭市落合総合センターでは、当時の国土交通省通達の別棟解釈により、木造部分を3,000㎡以下に抑えて、それ以外の部分をRC造で構成しました。



真庭市落合総合センター



真庭市落合総合センター 中央ロビー

京都市の上京区総合庁舎は木造ではありませんが、内装仕上げ、家具や照明器具、受水槽にまで地域産木材をふんだんに活用しました。コストに配慮し、不燃化の必要のない部位への使用を原則とし、天然の素材を活かした使用方法に配慮しています。



上京区総合庁舎 待合ロビー



上京区総合庁舎

山口県の長門市庁舎は、5階建て7,000㎡超の木材活用庁舎です。日本初の2時間耐火木造と鉄筋コンクリートのハイブリッド構造を採用しており、今後の大規模木造建築の先導的役割を果たすことを目標としています。市有林を適材適所に活用した大規模木造建築として、5階建ての新庁舎棟の耐火木構造部分は積層ラミナによる大断面集成材を用い、平屋建てのエントランス棟は、一般製材の組み合わせによる架構計画としています。

当社では、木をできるだけ多く活用し、なおかつ十分な防耐火性能を備え、木造建築に関連する法令をよく理解したうえで、先進的技術も取り入れながら設計に臨んでいます。



長門市庁舎



長門市庁舎 エントランス棟

地元産材を調達する難しさ

大規模な木造建築を設計するにあたり、予想以上に困難なのがスムーズな木材調達です。

魚津市立統合小学校木造校舎では、木材の調達のため、当社主催のもと、林業関係者・行政・設計者が一堂に会した木材調達検討会を立ち上げました。こうしてコーディネーターとして木材の専門家を間に入れ、うまく現場に木材を調達できるようプランニングしました。

愛知県新城市で手がけた小学校と交流施設の複合施設である新城市立作手小学校・つくで交流館でも同様に、木材調達のための検討会を開きました。広大な市有林を、いかに公共建築物に有効活用するかという命題があったため、その命題にこたえる形で当社が主催して進めたものです。



新城市立作手小学校・つくで交流館 普通教室棟

滋賀県草津市の草津市立老上西小学校は、3棟の普通教室棟を木造化し、市内唯一の木造校舎となりました。滋賀県には一定規模以上の木を製材できる協力工場が少ないため集成材ができず、最終的には外材を使わざるを得ませんでした。関西で木造をつくる際は、木材の調達が最も難題なのです。木造の学校をつくることが国の政策であり、木質化を超えた木造が今後期待されているので、難題をクリアしながらチャレンジをし続けなければと考えています。



草津市立老上西小学校



草津市立老上西小学校

当社はできる限り地域の材料を地域で使おうという趣旨のもと取り組んでいます。前述の新城市立黄柳川（つげがわ）小学校の事例では、山のことや製材の現状を知るため、まず地域に入りこんでヒアリングを行い、さまざまな情報収集に努めました。情報収集するうちに、地域の抱える問題が明らかになってきました。当時樹齢50～60年の木々が多数あり、それが使えず困っているという深刻な問題でした。それを把握したうえでプロポーザルにチャレンジしました。そのときの問題点把握や技術が活かされているわけです。

CLTへのチャレンジと工夫



京都府茶業研究所

木材の消費増に期待が寄せられるCLTの使用にも挑戦しています。宇治茶の研究棟として建てられる宇治市の京都府茶業研究所では、CLTおよび地元京都府の流通製材の活用が求められました。京都府の森林組合や木材組合などと共にプロジェクトチームを発足させて木材調達に関する議論を進めました。CLTと流通製材をいかに融合させるかがポイントの一つでしたが、当社が提案したのは、下部フレームを流通製材でつくり、屋根面をCLTで構成することでした。

茶業研究所は延べ面積1,000㎡以下で大空間を必要としなかったため、JAS規格に適合したJAS材ではなく、JAS材に準じた管理が行われている木材・KTS（京都木材規格）材を使用して構成することができました。

“小スペース・地域性・短期施工”が求められた真庭市役所前バス待合所では、CTLが最適でした。真庭市立北房統合小学校・こども園は内装や家具に地域産材、壁や屋根にはCLTを積極的に採用しました。特に、こども園ではCLTパネル工法と在来床組工法を組み合わせ、本格的なCLT構造に取り組んでいます。



真庭市役所前バス待合所



真庭市役所前バス待合所



真庭市立北房小学校・こども園
小学校メディアセンター



真庭市立北房小学校・こども園 こども園 保育室

構造として、仕上げや意匠として、木を活かす

木は、構造に使う場合と、仕上げや意匠で使う場合で、活かし方が異なります。今の法令は、どんな建物にも使いやすい状況にまではまだまだ緩和されていませんし、耐火性やコストの問題もあります。

大空間が求められる大規模建築では、流通製材でスパンを大きくとるのは非常に難しく、そこには一工夫が必要です。「構造的にこうすれば流通製材でも簡単に組める」といった提案ができればよいのですが、設計自体が困難となる場合もあるのが現状です。さまざまな試行錯誤の中で木造建築設計の提案を続けてきた当社が今強く感じるのは、“木造”や“木を見せること”にこだわりすぎないことが大事ではないかということ。「ここまでなら木造でできる」という線引きを自分たちで行い、それ以上のところはRC、鉄骨でコストを抑えるといったことも可能です。RCや鉄骨とのハイブリッドは実際に新城市立作手小学校・つくで交流館で挑戦しました。

外装材で使う場合は、経年劣化や耐候性が最もネックとなります。京都府茶業研究所では、外部から屋根構造であるCLTの現しを見せ、屋根面を内勾配にすることでこの課題をクリアしました。また、新城市立作手小学校・つくで交流館では、メンテナンスできる1階は外装を木質化し、上部はガルバリウム鋼板にして、木造らしい外観に仕上げるといった工夫を行っています。



京都府茶業研究所

日本では、木を使うからには見せなければならないと思いがちです。いろいろな木の見せ方がありますが、逆転の発想で木を“使い過ぎない”ことも一つのポイント。限定的に使うことで木を際立たせることもできるのです。結局は適材適所の一言に尽き、その中で少しでも多く、日本の良さである木造を採用するのが当社の役割です。



新城市立作手小学校・つくで交流館 普通教室

木造の普及で社会に貢献する

当社は建築を通じて社会に貢献するという理念を持っています。

木造建築では、木造技術の進展、環境負荷の低減、安らぎの空間づくり、地産地消による地域経済活性化……といった観点での貢献が考えられます。これらを実現するために最も必要なのは、木造化・木質化を“普及させる”ための努力です。

人口減少、少子高齢化が今後も進む時代にあって、人々の居場所やコミュニティの場を包む空間は木造がふさわしいと考えています。

木材にはまだまだ可能性があります。木材でなければできない空間づくりにこれからも挑戦していきたいと思います。

建物概要

魚津市立統合小学校木造校舎
発注者 魚津市
所在地 富山県魚津市
用　途 小学校
延面積 4,950㎡
構　造 W
階　数 3F
竣工年 2019年(予定)

真庭市落合総合センター
発注者 真庭市
所在地 岡山県真庭市
用　途 公民館/市役所支所
延面積 4,741㎡
構　造 W・RC
階　数 2F・3F
竣工年 2016年
受　賞 木材利用優良施設表彰
(農林水産大臣賞)、
木材活用コンクール(第1部門賞)

上京区総合庁舎
発注者 (株)かみぎょう
所在地 京都市
用　途 庁舎
延面積 7,927㎡
構　造 SRC/S
階　数 4F/B1F
竣工年 2014年
受　賞 府内産木材活用
優良施設コンクール(優秀賞)、
京都景観賞 建築部門(奨励賞)、
京(みやこ)環境配慮建築物(最優秀賞)

新城市立黄柳川小学校
発注者 新城市
所在地 愛知県新城市
用　途 小学校
延面積 3,125㎡
構　造 W/RC
階　数 2F
竣工年 2013年

長門市庁舎
発注者 長門市
所在地 山口県長門市
用　途 庁舎
延面積 6,879㎡
構　造 W/RC/免震構造
階　数 5F
竣工年 2021年(予定)

新城市立作手小学校・つくで交流館
発注者 新城市
所在地 愛知県新城市
用　途 小学校/交流館
延面積 4,532㎡(小学校:3,197㎡、
交流館:1,168㎡)
構　造 W/RC/S
階　数 1F
竣工年 2017年

草津市立老上西小学校
発注者 草津市
所在地 滋賀県草津市
用　途 小学校
延面積 9,342㎡
構　造 W/S
階　数 2F
竣工年 2016 年

京都府茶業研究所
発注者 京都府
所在地 京都府宇治市
用　途 研究所
延面積 951㎡
構　造 W
階　数 1F
竣工年 2018年(予定)

真庭市役所前バス待合所
発注者 真庭市
所在地 岡山県真庭市
用　途 バス待合所
延面積 8㎡
構　造 CLT
階　数 1F
竣工年 2014年
受　賞 木材活用コンクール
一般社団法人全国木材組合連合

真庭市立北房統合小学校・こども園
発注者 真庭市
所在地 岡山県真庭市
用　途 小学校/認定こども園
延面積 小学校:3,451㎡、
こども園:1,705㎡、
構　造 小学校:W/RC、こども園:W
階　数 小学校:2F、こども園:3F
竣工年 2018年(予定)



京都スタジアム

集いの場をつくる

場をつくり、人が集い
新たな価値が生まれる

スペースだけをイメージしてつくるのではなく、
クライアントと一緒に考えてつくる姿勢こそを当社は大事にしてきました。
異なる機能を持ったものが交わるところに、
あるいは人と人が交わるところに新たな価値が生まれます。



国東市新庁舎 回廊



明石駅前再開発

建物を含む“場所”そのものをつくる

1932年の創設以来、当社は、“依頼主第一主義”という理念を忘れることなく、建築物というハードをつくることで時代の要請にこたえ、社会に貢献し続けてきました。しかし現在は、“つくって終わり”という時代ではありません。そこに新たな価値を生み出すことが求められます。当社がつくる対象は、建築物だけではなく、建築物を含む“場”あるいは“コミュニティ”や“地域”、さらには“まち”に拡がっています。

場所をつくっても人が集まらなければ意味がありません。そこで設計者は工夫を凝らし、人が集まるための“仕掛け”をプランニングするのです。価値ある場所を生み出すために当社が行ってきた取り組みを、最新事例とともに紹介します。

“新たな価値を生み出す場所をつくる”には二つの視点があります。一つは、本来の用途にさまざまな機能を付加してつくるもの。もう一つは、異なる用途を複合させてつくるものです。

日常的に活用できる仕掛け［機能を付加する］

一つ目の視点である“本来の用途にさまざまな機能を付加してつくる”場所とは、例えばスタジアムのように、スポーツが行われそれを観戦するというメインの機能に、利用者のニーズから生まれる機能や、意図的、能動的に仕掛ける機能を加えていくものです。

観戦する場所という機能としては、長野市の南長野運動公園総合球技場や京都府亀岡市の京都スタジアム、北海道函館市の函館競馬場などがあげられます。

南長野球技場は臨場感あふれる2層式スタンドにリニューアルしました。ピクニック感覚のウッドテラスや、子供連れにも安心なフィールドを望めるキッズルームなど、観客の多様なニーズに応える取り組みを行っています。スタジアムショップやキッチンカーが並ぶ外周デッキの賑わいの演出もスタジアム体験に欠かせない要素です。

京都スタジアムでは、都市公園法に縛られない市街地立地の“まちなかスタジアム”が実現しました。試合のない日でも日常的に人が集まり、収益性を高める施設をつくることを目指し、国の政策である“スタジアム・アリーナ改革推進事業”の先進事例となるスタジアムです。国の政策に並行する形で、発注者と共に、具体化していきました。例えばVIPラウンジなどバンケット機能を充実させたほか、沿道を彩る店舗や国内最大級の室内クライミング施設などのにぎわい施設を併設しました。サッカー観戦者のニーズは変わってきています。上記2件には、そのニーズを見据えた当社の提案が盛り込まれています。


南長野運動公園総合球技場


函館競馬場 下見所


函館競馬場 2階下見所席


京都スタジアム スタンド


京都スタジアム

函館競馬場は、レースのない日の方が圧倒的に多く、他場の中継を行っています。レース時のみ使用するパドックには、オッズやレース映像を映す大型映像装置があり、この活用を考えました。一般的なパドックは屋外の立見席ですが、函館競馬場では、立見席の後ろに屋内化したイス席を設けることで、ガラス越しに大型映像を見ることができ、一年を通して全国のレースや各種イベントを楽しむことができます。

人の流れを活性化させる仕掛け［機能を付加する］

“つなぐ”をコンセプトに機能や環境を実現した大分県国東（くにさき）市の国東（くにさき）市新庁舎は、既存ホールと庁舎を屋外の回廊でつないで交流スペースを形成し、新たな地域コミュニティを生み出しています。兵庫県明石市の明石駅前南地区第一種市街地再開発事業も、再開発ビルをコアとして周辺地域を含む中心市街地を活性化させることを目指しました。駅周辺の人の流れをスムーズにし、日常的に市民が憩う場所を形成しています。

兵庫県西宮市の武庫川女子大学学校教育館では、学生の“居場所をつくる”ことをテーマに、二つの教室棟の間に学生の自発的学びを促す空間“コミュニティ・コモンズ”を配しました。吹き抜けで立体的な回遊性を持たせ、授業の合間などにどこからでも立ち寄れる場所になっています。


国東市新庁舎 回廊


明石駅前再開発 市民広場


武庫川女子大学学校教育館
コミュニティ・コモンズ

人と人を結びつける仕掛け［異なる用途を複合させる］

二つ目の視点である“異なる用途を複合させてつくる”場所とは、教育施設などで見られる、複数の用途の施設を結び合わせた複合施設です。各所で交流スペースが現われ、ときにはクライアントにも設計者にも思いもよらなかった使われ方が、化学反応的に生まれることもあります。

“もともと異なる場所にいた人同士を結びつけた”顕著な例が、東京都調布市の社会福祉法人桐仁会特養保育園、大阪府高槻市の社会福祉法人多邦会有料老人ホーム朋央・城南宙保育園、徳島県吉野川市の吉野川市立高越小学校・こども園です。



社会福祉法人 桐仁会特養保育園



有料老人ホーム朋央·城南宙保育園



有料老人ホーム朋央·城南宙保育園 地域交流室



吉野川市立高越小学校·こども園

前の2件は、入居者の生活の場づくりが一つの大きなテーマとなる高齢者施設で保育園を併設したケース。桐仁会では特養と保育園の中間接点にカフェも付属した地域交流スペースを設置、高齢者と幼児だけでなく、園児の保護者や入居者の家族、地域住民との交流も生まれます。多邦会でも地域交流室を設けてコミュニケーションのきっかけづくりとし、ふれあいイベント開催時には、1階にある両施設をつなぐ通路によって地域交流室を一体利用しています。複合施設とすることで土地を有効活用でき、建築費や運営費の軽減が図れるほか、介護士の託児所としても利用できるため介護士が確保しやすいというメリットもあります。

高越小学校・こども園は、4小学校、4幼稚園、2保育園を再編して、小学生と園児が接する“地域の核”となる施設を実現。建物内外に小学生、園児が交流しやすいしかけをつくり、また身近に本に親しめる場をつくるなど、新たな価値を生み出していくことを意図しました。

新しい関係性を生み出す仕掛け［異なる用途を複合させる］

大学では、先述の武庫川女子大学と同様に、学生の居場所としてコミュニケーションのための空間が注目されています。京都市の同志社女子大学 楽真館では、建物の中央部にラーニング・コモンズを設け、見る・見られる関係性ができる空間づくりを目指しました。既存図書館への増築である北九州市立大学図書館では、3層吹き抜けのラーニング・コモンズを設け、その周囲にグループ学習室や視聴覚コーナーなどを配し、新しい学びの“場”を提供しています。



武庫川女子大学学校教育館 コミュニティ·コモンズ



北九州市立大学図書館 ラーニング·コモンズ



同志社女子大学楽真館 ラーニング·コモンズ

「防災拠点施設」「消防学校」「学習施設」の3機能を融合した富山県広域消防防災センター・消防学校・四季防災館は、これまで閉ざされがちであった消防を開かれた施設とすることを目指しました。開くことで見る側の防災意識が変わり、見られる側も責任感が一層醸成されるという、相乗的な“見る・見られる”関係性や仕組みをつくろうと努めました。公共施設でありながら気軽に立ち寄れる設えとしました。



富山県広域消防防災センター·消防学校·四季防災館

多数の機能を複合させるなかで、接点を単なる通過動線ではなく、交流の場である「NODE（ノード）」と位置づけたのが、大阪府吹田市の武田薬品研修所・宿泊棟です。デザインもその機能を踏まえ、建物ブロックの結節点が空間のアクセントになるよう工夫しました。



武田薬品研修所・宿泊棟



武田薬品研修所・宿泊棟

対話が“化学反応”へのチャンスを生む

“場をつくる”ことはすなわち“人を集める”方法を考えることだといえます。つくった場に人を集め、にぎわいの空間とする。そのための仕掛けまでを考えるのが設計者の役目なのではないかと考えます。更に言うならば、人を集めたさらにその先の収益性などの効果についても、例えばシンクタンクとタッグを組むなどして提案に盛り込むことができれば、クライアントにより満足してもらえるでしょう。

新たな仕掛けに挑戦するためには、クライアントとの度重なる対話が欠かせません。その背後のユーザーや市民、社会にも目を向けねばなりません。当社の能力や技術、ノウハウでできること、あるいはやろうとしていることが、クライアントの望むものとマッチするような設計につながれば理想です。しかしそれは表層的なコミュニケーションだけでは決して実現しません。クライアントが話す“オモテ”の言葉から、潜在的に何を要望しているのかを対話の中で探っていかねばならないと考えます。設計において、その部分を大事にしていくことが、思いも寄らない“化学反応”を生み出すチャンスへとつながるのではないでしょうか。



明石駅前再開発 あかし市民広場

建物概要

南長野運動公園総合球技場
発注者 長野市
所在地 長野市
用　途 観覧場
延面積 26,684㎡
構　造 RC/S
階　数 4F
竣工年 2015年
備　考 設計JV：竹中・東畑・北信・千広・アーキプラン

日本中央競馬会　函館競馬場
発注者 日本中央競馬会
所在地 北海道函館市
用　途 競馬場
延面積 25,931㎡
構　造 S
階　数 5F
竣工年 2010年
備　考 設計JV：JRAファシリティーズ

京都スタジアム
発注者 京都府
所在地 京都府亀岡市
用　途 スポーツ施設
延面積 34,000㎡
構　造 RC/S
階　数 4F
竣工年 2019年(予定)

国東市新庁舎
発注者 国東市
所在地 大分県国東市
用　途 庁舎
延面積 7,567㎡
構　造 RC/S
階　数 4F
竣工年 2016年

明石駅前南地区第一種市街地再開発事業
発注者 明石駅前南地区市街地開発組合
所在地 兵庫県明石市
用　途 市街地再開発/集合住宅/公益施設(市役所窓口/図書館/子育て支援施設)/店舗/事務所
延面積 66,057㎡
構　造 RC/SRC/S造
階　数 6F/B4F(施設棟)、34F/B1F(住宅棟)
竣工年 2017年

武庫川女子大学　学校教育館
発注者 学校法人武庫川学院
所在地 兵庫県西宮市
用　途 大学
延面積 9,483㎡
構　造 S
階　数 7F
竣工年 2014年

社会福祉法人桐仁会特養保育園
発注者 社会福祉法人桐仁会
所在地 東京都調布市
用　途 特別養護老人ホーム/保育所
延面積 13,441㎡
構　造 RC/S
階　数 6F
竣工年 2019年(予定)

社会福祉法人多邦会有料老人ホーム朋央・城南宙保育園
発注者 社会福祉法人多邦会
所在地 大阪府高槻市
用　途 介護付有料老人ホーム/ショートステイ/デイサービス/保育園
延面積 3,453㎡
構　造 RC
階　数 3F
竣工年 2009年

吉野川市立高越小学校・こども園
発注者 吉野川市
所在地 徳島県吉野川市
用　途 小学校/こども園
延面積 6,052㎡
構　造 W/RC/S
階　数 2F
竣工年 2018年(予定)

同志社女子大学　楽真館
発注者 学校法人同志社
所在地 京都市
用　途 大学
延面積 6,358㎡
構　造 SRC/S
階　数 4F/B1F
竣工年 2017年

北九州市立大学図書館
発注者 公立学校法人北九州市立大学
所在地 北九州市
用　途 大学(図書館)
延面積 3,843㎡
構　造 S
階　数 3F
竣工年 2016年

富山県広域消防防災センター・消防学校・四季防災館
発注者 富山県
所在地 富山市
用　途 防災センター/消防学校/宿泊施設/学習施設
延面積 12,730㎡
構　造 RC/SRC/S
階　数 13F/B1F
竣工年 2011年
受　賞 中部建築賞(一般部門)入選
富山県建築賞(作品部門)入選

武田薬品研修所・宿泊棟
発注者 武田薬品工業
所在地 大阪府吹田市
用　途 研修所/宿泊所
延面積 23,933㎡
構　造 SRC/RC/S
階　数 4F
竣工年 2010年
受　賞 大阪サステナブル建築賞(奨励賞)、おおさか優良緑化賞、日本造園学会賞(設計作品部門)



同志社大学 良心館

記憶の継承

記憶を受け継ぎ風景をつくる

ある記憶を共有し、次代へと受け継いでいくことは、
個人や家族にとってはもちろん、地域や組織にとっても重要なことです。
土地や空間に刻まれた先人たちの“こころ”をいかに建築という“かたち”にし、
人々に伝えるか。既存建築の保存にとどまらず、当社はさまざまな挑戦を続けています。



同志社大学 良心館 パーパスロード



大阪市立大学理系学舎 テラス

“記憶の継承”が持つ公共的価値

建築は、そのクライアントや利用者、地域、さらに社会全体にとって、かけがえのない記憶のよりどころとなります。私たちは例えば、法隆寺を通して飛鳥時代の人々の思いに触れ、復原された東京駅舎を通じて、近代化に邁進していた大正期の時代精神を感じとります。こうした歴史的建造物ではなくても、自分たちが育った街や学校の空間を懐かしく思い出す人は多いのではないでしょうか。建築に求められる公共性には、こうした“記憶の継承”が含まれている――それが、当社の基本的な考え方です。

伝統が培った精神を形にする

こうした“記憶の継承”は、教育施設において重要であると考えます。大学のキャンパスでは、創立時の建物や風景がシンボルとして受け継がれ、学生・教員、さらに地域に対して、各校の歴史と校風を語りかける役割を果たしています。こうした記憶の継承は、新たな建築においても必要な要件となります。

同志社大学今出川キャンパスの一連の事例（良心館、礼拝堂改修、ハリス理化学館改修）は、その好例といえるでしょう。明治時代、日本建築の典型というべき京都御苑の北側にあえて西洋式学舎を建設し、キリスト教主義に基づく教育をスタートさせた創立者・新島襄の精神は、現代から見てもきわめて創造的なものです。今出川キャンパスに連なる新旧の赤レンガ建築は、こうした新島の志の象徴でもあるのです。



同志社大学 良心館 サンクンモール



同志社大学 良心館 階段室



同志社大学 良心館 ラーニング・コモンズ

良心館の建設に当たっては、ラーニング・コモンズに代表される最新の教育環境を構築する一方、外壁には伝統的な本レンガ中空積みを採用。さらに、緑豊かな遊歩道や芝生広場を整備することで、創成期の同志社の原風景復元に努めています。重要文化財である礼拝堂、ハリス理化学館などを含む一連の整備事業を通じて当社が常に意識したのは、約140年に及ぶ同志社大学の精神的伝統を体感できるキャンパスの再構築に他なりません。



同志社大学 礼拝堂



同志社大学 礼拝堂

風景の記憶は、地域の財産でもある

“記憶の継承”とは、単なる“造形の継承”ではなく、“培われた精神の継承”であるという姿勢は、同志社大学に隣接する同志社女子大学の事例でも貫かれています。

新設されたラーニング・コモンズを含む講義棟 楽真館、食物栄養科学の実験棟 新心館とも、機能的には最新の大学施設ですが、重要



同志社女子大学 楽真館


同志社女子大学 新心館


同志社女子大学 楽真館 ラーニング・コモンズ

文化財が点在するキャンパス風景との調和や京都御苑方面から眺めた際の景観保存は引き続き堅持され、これらの建物が同志社女子大学の精神の伝統を受け継ぐものであることを示しています。その成果は、今出川で学んだ未来の同志社女子大学卒業生たち、またその風景とともに暮らす京都の人々が、これら21世紀の赤レンガ建築を、かけがえのないものとして受け取ってもらえるかどうかにかかっています。


同志社大学 良心館 サンクタスコート

末永く“記憶を継承”するために

“記憶の継承”は、必ずしも明治・大正期の建築（群）に限られるのではありません。例えば、大阪市立大学理系学舎の事例は、1960年代に建設された南北２エリアの既存学舎を、南エリアは改修再利用、北エリアは新棟建築の形で再整備したものです。新棟の建築に当たっては、将来の実験機器などの更新で外観が損なわれないよう建物のフレキシビリティを高める一方、伸びやかな水平庇を強調した既存学舎のデザインを受け継ぎ、創立130年を超える大阪市立大学の伝統を視覚的に物語る建物としました。


大阪市立大学理系学舎

また、甲南女子中学校・高等学校、甲南女子大学の事例では、40年以上前に村野藤吾氏が設計し、その後も大切に使われてきた既存建築の風合いの継承が大きなテーマです。新たに建設された校舎では、風・光・緑をコンセプトに、村野建築が持つ造形美やのびやかさを現代的な形で継承しています。また、甲南大学ではクライアントに対して、既存校舎の文化財登録を提案、制度面から“記憶の継承”を支えることを試みています。


甲南女子大学 新10号館


甲南女子中学校・高等学校 光のアトリウム


甲南女子中学校・高等学校

価値ある建築に込められた個人や学校や地域の記憶を守るために、文化財登録を活用する手法は、イオンモール四日市北 レンガ棟レストランでも採用されています。旧東洋紡績の原綿倉庫だったこの建物の再生では、築80年を超えるレンガ外壁の内部に鉄骨造建築を造り込むことで、歴史的建造物の保存と安全性の確保を両立させました。さらに国の登録有形文化財への登録を果たすことで、紡績が盛んだったこの地域の記憶を継承しています。


イオンモール四日市北 レンガ棟レストラン


イオンモール四日市北 レンガ棟レストラン

地の歴史に深く学び、未来へと繋ぐ

最後に、既存建築の修復や増築などによらない、新築のみによる“記憶の継承”の試みをご紹介します。さかい利晶の杜は、堺市が生んだ２人の偉人・千利休と与謝野晶子の顕彰を通じて、郷土・堺の歴史の継承を目指した施設。建設地は利休の誕生地であり、晶子の生家近くでもありますが、それ以外の歴史的遺産などはありません。そこで当社が採用したのは、さまざまな見立てによって２人の生涯や事績を浮かび上がらせる手法でした。例えば、“緑の環濠”と名付けられた施設周囲の緑地は、“東洋のベニス”とたたえられた中世屈指の環濠都市・堺へのオマージュ。また、ガラスと金属で構成された切妻屋根の建物には、与謝野家をはじめとする商家が軒を連ねていたという近代の堺のにぎわいの記憶が重ねられています。施設内のさかい待庵は、利休作の茶室で唯一現存する妙喜庵待庵の創建時の姿を復元したもので、侘び茶人・利休が理想としたもてなしの場“市中の山居”の空間を現代によみがえらせました。

こうした取り組みが、地域の“記憶の継承”にどれほど寄与するのか。評価が定まるのはまだまだ先のことだと思われますが、人々の心のよすがとなってきた建築や街並みが急速に失われ、画一的で記憶を呼びおこさない風景が拡大する日本の現状を考えるとき、このような手法によって記憶を再び掘り起こし、受け継いでいくことは、重要なことだと考えます。それぞれの場所が持つ歴史の声に耳をすませ、往時の人々が風景や建築に込めた思いに聞き入りつつ、現代の建築に求められる機能をも十全に盛り込んでいくこと。決して容易ではない道ですが、それこそが当社に期待されている役割であり、当社がクライアントと社会に対して果たすべき責任のひとつであると考えています。


さかい待庵


さかい待庵 茶室


さかい利晶の杜

建 物 概 要

同志社大学 良心館
発注者 学校法人同志社
所在地 京都市
用　途 大学
延面積 40,273㎡
構　造 SRC/S
階　数 5F/B2F
竣工年 2013年
受　賞 英国BDAブリック賞（ベストインターナショナル プロジェクト）、照明普及賞、日本建築学会作品選集（入選）

同志社女子大学 楽真館
発注者 学校法人同志社
所在地 京都市
用　途 大学
延面積 6,358㎡
構　造 SRC/S
階　数 4F/B1F
竣工年 2017年

大阪市立大学理系学舎
発注者 公立学校法人 大阪市立大学
所在地 大阪市
用　途 大学（研究実験施設）
延面積 11,978㎡（新棟）
10,879㎡（改修棟）
構　造 SRC/RC/S（新棟）、RC（改修棟）
階　数 7F/B1F（新棟）、3F（改修棟）
竣工年 2015年
受　賞 JIA優秀建築選

甲南女子大学 新10号館
発注者 学校法人甲南女子学園
所在地 神戸市
用　途 大学
延面積 11,322㎡
構　造 RC/S
階　数 6F
竣工年 2018年（予定）

さかい利晶の杜
発注者 堺市
所在地 堺市
用　途 文化観光拠点施設（博物館）
延面積 3,405㎡
構　造 RC/PC/S/W
階　数 3F
竣工年 2015年
受　賞 おおさか環境にやさしい建築賞（事務所部門賞）、堺市景観賞（建築物等部門）、大阪まちなみ賞（緑化賞）

同志社大学 礼拝堂
発注者 学校法人同志社
所在地 京都市
用　途 大学（礼拝堂）
延面積 200㎡
構　造 レンガ造
階　数 2F/B1F
竣工年 2012年

同志社女子大学 新心館
発注者 学校法人同志社
所在地 京都市
用　途 大学（研究実験施設）
延面積 5,584㎡
構　造 SRC
階　数 3F/B1F
竣工年 2015年

甲南女子中学校・高等学校
発注者 学校法人甲南女子学園
所在地 神戸市
用　途 学校（中学校・高等学校）
延面積 10,317㎡
構　造 RC/SRC/S
階　数 4F
竣工年 2012年
受　賞 人間サイズのまちづくり賞（奨励賞）、照明普及賞

イオンモール四日市北 レンガ棟レストラン
発注者 フォレスター特定目的会社
所在地 三重県四日市市
用　途 ショッピングセンター（レストラン）
延面積 1,102㎡
構　造 S/レンガ造
階　数 1F
竣工年 2001年



NHK新京都放送会館

安心の提供

確かな安全の上に
一人ひとりの心に響く安心を築く

安心・安全な建築の提供は、設計に携わる者にとっては基本とはいえ、
実際に求められる内容は、案件ごとにさまざまであり、安易な対応は許されません。
クライアントや利用者が真に求める「安心・安全」とは何か。
対話を通じてそれを丁寧に解きほぐすことから、当社の仕事は始まります。



長門市庁舎



出水市新庁舎

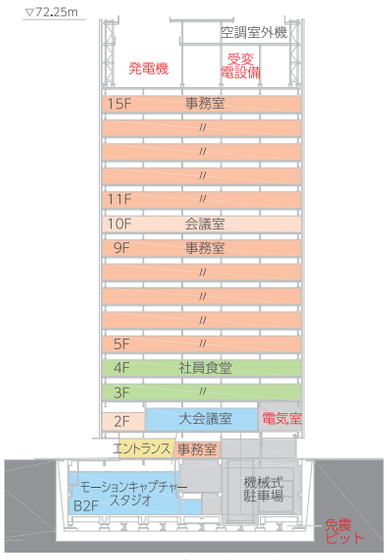
確かな「安全」とは

建築の“安心・安全”といえば、まず連想されるのは建築の耐震性でしょう。特に自治体庁舎や病院など、公共性の高い施設においては、被災後にも途切れることなく業務を行うこと、また被災した方々を受け入れる避難施設として機能すること（BCP：Business Continuity Plan＝事業継続計画）が重要な要素となります。その一方で、費用対効果という経済的な条件も当然勘案されなければなりません。そのためには、耐震・制震・免震の各技術を厳密に比較し、最適な手法を選ぶ必要があります。

当社には、耐震性を確保する３つの手法それぞれに関する豊富な経験と深い知見があります。ここに挙げた事例、出水市新庁舎、長門市庁舎、カプコン研究開発第２ビル、社会医療法人愛仁会 千船病院、岡山済生会総合病院はすべて免震工法を採用していますが、いずれも制震工法ならばどうなるかという比較プロセスを経て、クライアントにご理解いただいたものばかりです。「免震構造にすれば問題ない」といった安易な判断に寄りかかることなく、地盤状況や工事費・工事期間、さらにクライアントの業務内容等との兼ね合いまで考慮し、最善の提案を行うことが、“依頼主第一”を掲げる当社の変わらない姿勢です。



カプコン研究開発第2ビル



カプコン研究開発第2ビル BCP対策図



長門市庁舎 耐火木架構が一望できる吹抜空間



岡山済生会総合病院



社会医療法人愛仁会千船病院

“安心”と“安全”への深い理解

一般に“安心・安全”はひとくくりに扱われることが多いですが、実は“安心”と“安全”の間には大きな違いがあります。“安全”が確保されて当然のハード的要件であるとすれば、“安心（感）”はより個別的・心理的なものであり、クライアント・利用者ごとに求められる水準もニュアンスも大きく異なります。



社会医療法人愛仁会千船病院 外来待合室



公益財団法人浅香山病院 屋上リハビリ庭園

一例が病院施設です。災害時のBCP確保が最優先される施設として、“安全”は当然の条件ですが、“安心”の内容は各病院によってさまざまに異なり一般解を求めることは難しいといえます。例えば、社会医療法人愛仁会 千船病院の場合は、人口減少社会における医療需要の変化に容易に対応できる予備スペースや設備更新スペースを確保し、長期的に診療機能を保つことが地域の安心につながると考えられました。一方、浅香山病院　一般科においては、“入院期間の長い患者が安心して療養できる”ホスピタリティを求められたことから、季節感豊かな屋上リハビリ庭園の整備や、自然の光や風を積極的に取り入れる工夫を提案しています。工事による全面閉鎖が許されない病院の性格上、“居ながら工事”を前提とした工事計画を組むことも、“安心”の重要なポイントとなりました。



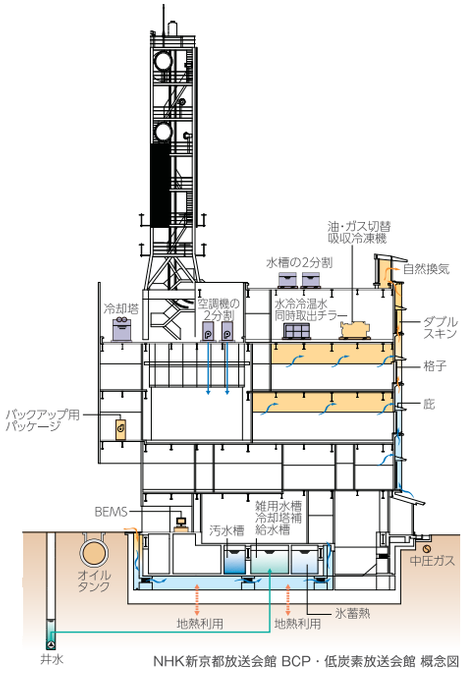
公益財団法人浅香山病院

BCPを可能にする高レベルの“安心”設計



NHK新京都放送会館 エントランスホール

プロフェッショナルな立場から、高レベルの“安心”を求められることもあります。その一例がNHK新京都放送会館です。公共放送は、万一の大災害時でもBCPすなわち“関連情報の発信を確実に行うこと”が求められますが、そのためには耐震性の確保に加え、被災後も放送機能を維持・継続するためのさまざまなバックアップ設備が必要です。緊急時の予備電源や冷却設備はもちろん、放送スタッフのための給排水システムまでがそろって初めて、放送局はスタッフからも、視聴者からも“安心”と“信頼”を寄せられる存在となるのです。当社では、インフラ途絶状況の中でも長時間継続して放送可能なバックアップシステムを構築。ハイレベルな“安心”を求めるクライアントのニーズに応えることができました。



NHK新京都放送会館 BCP・低炭素放送会館 概念図

また、カプコン研究開発第２ビルにおいては、ゲーム業界の生命というべき人材と製作データを、予測される大規模地震や風水害などから守ることが強く求められました。そこで、起こり得る災害と想定される被害、その対策に必要なコスト予測などを綿密に計算。それをもとに、どのレベルまでの安心・安全を求めておられるのか、クライアントの思いを十分に引き出し、読み解き、設計案に反映させています。ゲームクリエイターの中には海外の方々も多く、“安心”を高めた設計は優秀な人材を確保する上でも有効とされています。

一人ひとりの安心に寄り添うために

“安心”と深くかかわる概念としてユニバーサルデザイン（UD）があります。これは、言うまでもなく「文化・言語・国籍・年齢・能力のいかんを問わず快適に利用できる施設・製品などのデザイン」のこと。建築に即していえば、「誰が利用しても安心できる施設・空間のデザイン」ということができるでしょう。

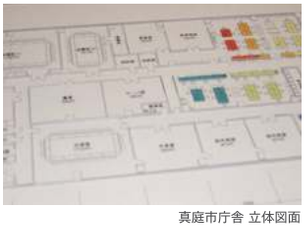
当社が手がけたUDの一例として、真庭市落合総合センターが挙げられます。この建物は、約4,000㎡の床面積のうち3,000㎡近くを木造準耐火構造とした大規模木構造施設であり、また豊富な地産地消の木質バイオマス空調を採用したZEB建築。同時に、市役所支所・保健センター・図書館などが統合され、多くの市民が利用する公共施設として、UDの発想が積極的に採用されています。例えばエレベーターには、車イス使用者や盲導犬利用者が方向転換しなくても済む直進型を導入。施設の窓は、軽く開閉がしやすい木製網戸付引違窓としました。さらに、センター内のこども保健センターには、吹き出し口のない床輻射式冷暖房システムを選択。これは、乳幼児がいる床面近くの温度を最適に保つと同時に、小さな子どもたちが指詰めやつまずき事故に合わないための配慮です。



真庭市落合総合センター 中央ロビー

こうしたUD設計を進める場合、利用者である障がい者や海外の方の声をいかにして聞き取るかが大きな課題となります。例えば、同じ市内にある真庭市庁舎を設計した際は、スタイロホームで壁などを立ち上げた立体図面を事前に作成。市内に暮らす障がい者の方々と、トイレの位置や点字サインのルートなどについて協議を重ね、計画内容に反映させました。こうしたプロセスについては、案件ごとに手探りで進めているのが実情であり、決して完全とはいえません。しかし、知見を重ねることで当社独自のUD化手法が確立されるものと期待しています。

建築におけるUDの視点は、グローバル化の進行やダイバーシティの拡大、女性の社会進出などを背景に、ますます重みを増しています。公共的施設における多言語表示はすでに“常識”ですし、宗教的・文化的バックグラウンドの異なる人々の来訪も珍しいことではありません。こうした国際化・多様化の時代にあって、当社は基本的な“安心”のスペックについても、多様な利用者に対する説明責任まで果たす姿勢を重視しています。



真庭市庁舎 立体図面



真庭市庁舎 協議風景



真庭市庁舎

建 物 概 要

出水市新庁舎
発注者 出水市
所在地 鹿児島県出水市
用　途 庁舎
延面積 10,941㎡
構　造 RC/SRC/S/免震構造
階　数 5F
竣工年 2016年

長門市庁舎
発注者 長門市
所在地 山口県長門市
用　途 庁舎
延面積 6,879㎡
構　造 W/RC/免震構造
階　数 5F
竣工年 2021年(予定)

カプコン研究開発第2ビル
発注者 カプトロン
所在地 大阪市
用　途 事務所
延面積 11,132㎡
構　造 S/SRC/RC/免震構造
階　数 16F/B2F
竣工年 2016年

社会医療法人愛仁会 千船病院
発注者 社会医療法人愛仁会
所在地 大阪市
用　途 病院
延面積 32,773㎡
構　造 RC/免震構造
階　数 9F/B1F
竣工年 2017年

岡山済生会総合病院
発注者 社会福祉法人 恩賜財団 済生会支部岡山県済生会
所在地 岡山市
用　途 病院
延面積 46,627㎡
構　造 RC/免震構造
階　数 10F
竣工年 2015年
受　賞 岡山市景観まちづくり賞、SDA賞(地区デザイン賞)、照明普及賞

公益財団法人 浅香山病院
発注者 公益財団法人浅香山病院
所在地 堺市
用　途 病院
延面積 17,477㎡
構　造 RC
階　数 6F/B1F
竣工年 2016年
受　賞 みどりのまちづくり賞(一般社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会関西支部長賞)、おおさか環境にやさしい建築賞(商業施設その他部門賞)、CASBEE堺 建築環境賞(優秀賞)

NHK新京都放送会館
発注者 日本放送協会
所在地 京都市
用　途 放送局
延面積 6,755㎡
構　造 S/SRC
階　数 5F/B1F
竣工年 2014年
受　賞 京(みやこ)環境配慮建築物(最優秀賞)

真庭市落合総合センター
発注者 真庭市
所在地 岡山県真庭市
用　途 公民館/市役所支所
延面積 4,741㎡
構　造 W･RC
階　数 2F･3F
竣工年 2016年
受　賞 木材利用優良施設表彰(農林水産大臣賞)、木材活用コンクール(第1部門賞)

真庭市庁舎
発注者 真庭市
所在地 岡山県真庭市
用　途 庁舎
延面積 7,850㎡
構　造 RC/S
階　数 4F
竣工年 2011年
受　賞 おかやまUDたてものコンテスト(最優秀賞)



熊取交流センター 煉瓦館

価値の再生

ハード・ソフトの技術を活かし新たな価値を創り出す

近年、建築物のリノベーションやコンバージョンが大きな注目を浴びています。
その背景にあるのは、建築が持つ潜在的価値を次代に伝えたいという人々の思い。
単なる省コストやノスタルジーにとどまらず、それぞれの建築の可能性を引出し、
新たな価値の発信を続けていきます。



横浜市庁舎 市民広間



門司港レトロ（旧大連航路上屋）耐震補強フレーム

どんな“価値”を“再生”するのか

“価値の再生”とは何を意味するのか、という点については、さまざまな考え方があります。例えば、老朽化した既存建築の再生に当時と違う素材を使うのは“再生”というより“改修”というべきではないのか、単なる耐震改修までを“価値の再生”に含めるのは行き過ぎではないかなど、明確な解答はまだ共有されていません。

リノベーションにせよコンバージョンにせよ、建物改修の技法としては定着していますが、当社にとっての課題は、それが真に“価値の再生”と言い得るものとなっているかどうかにあります。ここでは「既存の建築物などに対し、修復・改変などの建築的操作を行い、その建築物の潜在的価値を再生・向上させる、あるいは新たな価値を付加する」プロセス全体が、すなわち“価値の再生”であると定義します。

歴史的建築に新たな生命を吹き込む

“価値の再生”の分かりやすい例として、歴史的な建築を現代向けに再活用するものがあります。例えば、門司港レトロ（旧大連航路上屋）は、昭和初期に建設された国際貨客ターミナルを交流施設として再活用したコンバージョン事例です。“建築物の潜在的価値を再生した”好例ですが、これは当社が徹底した耐震補強工事を提案し、実現したものです。同様のプロセスは、大正時代のレンガ造建築を博物館として再生した水道記念館、築後半世紀以上を経た建物に大規模な構造補強とバリアフリー改修を施した大阪城天守閣 平成の大改修などでも活かされました。



門司港レトロ（旧大連航路上屋）



門司港レトロ（旧大連航路上屋）階段室



大阪城天守閣 平成の大改修



水道記念館

また、熊取交流センター 煉瓦館では、昭和初期の旧綿布工場のレンガ壁とノコギリ屋根を修復・補強し、交流施設として再生しました。かつて盛んだった綿布産業の記憶を伝えるだけでなく、地元の祭りで使われる“だんじり”を保存・展示することで、地域の人々に欠かせない施設となっています。



熊取交流センター 煉瓦館

耐震改修そのものが“価値の再生”のカギとなるケースもあります。横浜市庁舎耐震補強 免震レトロフィットは、1959年に村野藤吾氏が設計した横浜市庁舎の耐震改修に挑んだ例です。各工法の綿密な比較・検討を経て当社が提案したのは、性能的・コスト的に効果が高く、“居ながら工事”が可能な柱脚免震工法でした。



横浜市庁舎 竣工時

2009年に終了したこの免震改修は、2011年の東日本大震災でも十分な効果を発揮。横浜市民の貴重な遺産を継承するだけでなく、災害本部としての機能も発揮しました。



横浜市庁舎

ハード･ソフト両面で価値の再生を

当社が積極的に取り組んだ分野に、学校エコ改修事業があります。これは、高度経済成長期に建てられた学校建築を改修し、温熱環境や省エネ性の改善を目指すものです。環境省主導で進められたこの事業でユニークだったのは、ハード面の改修だけでなく、改修後の校舎を利用した環境教育の実践が求められた点でした。当社では、学校ごとに独自の環境教育プログラムを立案し、先生や児童生徒と一緒に考える姿勢で臨みました。こうしたソフト面の対応は、従来では考えられなかった業務であり、当社の総合力を活かして取組んだことにより大きな成果が得られたと考えています。

この事例でも分かるとおり、当社にとってのリノベーション・コンバージョンは、単なるハード改修にとどまりません。むしろ、ハード・ソフト両面を含むプロセスと捉えることで、よりよい“価値の再生”“価値の創造”が可能になると考えています。



京都市立朱雀第四小学校 あかしやホール エコ改修



豊田市立土橋小学校 エコ改修



北名古屋市立西春中学校 エコ改修



環境教育 子どもエコガイド



環境教育 雨水貯留槽を見る



環境教育 緑のカーテンを使った授業

「スクラップ＆ビルド」とは別の道

近年、スクラップ＆ビルドよりも改修等の手法が選ばれるようになった理由のひとつは、コストの問題が大きな要素だといえます。例えば、学校統合で廃校となった高校を庁舎に転用した奈良県郡山総合庁舎は、新築の25%程度の工事費で実現したことで好評を得ました。全国でこの15年間に統廃合で消滅した学校は、約6,800校に上がっていますが、うち約6,000校は、校舎施設をほぼ残したままだといわれます。行財政予算が厳しさを増す中、こうした学校建築のコンバージョンは、今後も各地で求められると考えられます。また聖書キリスト教会　東京教会では、既存の製菓工場を教会とその付属施設へとコンバージョン。既存部分を最大限活用することで、ローコストでありながら、当初の要望を大幅に超える床面積を確保しています。

限られた予算の中でよりよい成果を目指す当社の姿勢は、リノベーション・コンバージョンにおいても変わりません。



聖書キリスト教会 東京教会



奈良県郡山総合庁舎



聖書キリスト教会 東京教会 大礼拝堂

大阪市中央卸売市場　東部市場は、食の安心・安全の確保を目指し、リノベーションを行いましたが、食の流通機能を停止できないとの条件下、居ながら工事によりHACCP（ハサップ）的考え方を導入した衛生環境、コールドチェーンシステム（低温卸売場）の実現、さらには、大型輸送に対応できる場内動線と施設を整備し、利便性の高い荷捌き場である大屋根（大口出荷対応ゾーン）を設置するなど物流の円滑化を図りました。リノベーションを超えた高価値を付加することにより、老朽化していた施設を時代の要請に応える最新機能に再生させた事例といえます。



大阪市中央卸売市場 東部市場

サステナブルな社会の礎となる建築を

近年日本においては、大量生産・大量消費社会から、持続可能（サステナブル）な社会の構築への転換が唱えられています。建築界においてもスクラップ＆ビルドの時代から、良質な建築物による社会ストックが求められる時代にあります。その手法は単なる建替え・改修等の従来型手法だけではなく、既存施設においては、耐久性・安全性・快適性の向上を図るとともにコンバージョンを含む大規模リノベーションという視点が必要であると当社は考えます。潜在的な価値を活性化させることに留まらず新たな価値を創り出すことで、当社の理念である“依頼主と社会への貢献”を実現していきたいと考えます。

また、これらの手法・技術は、新築建築物の設計においても重要な視点であり、世代を超えて使い続けられる建築物としての機能・耐久性・安全性を検証し、良好な社会ストックとなるよう重要な課題として今後も取り組んでいきたいと考えています。

建物概要

門司港レトロ（旧大連航路上屋）
発注者 北九州市
所在地 北九州市
用　途 集会場/展示場
延面積 4,708㎡
構　造 RC/SRC/SC
階　数 2F
竣工年 2012年

大阪城天守閣 平成の大改修
発注者 大阪市
所在地 大阪市
用　途 博物館/資料館
延面積 5,071㎡
構　造 SRC/S
階　数 8F
竣工年 1997年

水道記念館
発注者 大阪市
所在地 大阪市
用　途 博物館
延面積 1,927㎡
構　造 RC/S
階　数 2F
竣工年 1996年
受　賞 旧 建設省都市景観大賞 景観形成事例部門（商空間レベル）

熊取交流センター 煉瓦館
発注者 熊取町
所在地 大阪府泉南郡熊取町
用　途 交流センター
延面積 2,032㎡
構　造 RC/S
階　数 2F
竣工年 2004年
受　賞 大阪都市景観建築賞（大阪まちなみ賞）大阪府知事賞

横浜市庁舎
発注者 横浜市
所在地 横浜市
用　途 庁舎
延面積 20,756㎡
構　造 SRC/RC/S
階　数 8F/B1F
竣工年 2009年

京都市立朱雀第四小学校　エコ改修
発注者 京都市
所在地 京都市
用　途 小学校
延面積 5,436㎡
構　造 RC/S
階　数 3F
竣工年 2012年
受　賞 京（みやこ）環境配慮建築物 一般建築物改修部門（優秀賞）、コカコーラ環境教育賞（優秀賞）、学校自慢エコ大賞（優秀賞）、エネルギー教育賞（優秀賞）

豊田市立土橋小学校　エコ改修
発注者 豊田市
所在地 愛知県豊田市
用　途 小学校
延面積 5,758㎡
構　造 RC
階　数 4F
竣工年 2012年
受　賞 こども環境学会賞（デザイン奨励賞）、キッズデザイン賞（子どもの未来デザイン 学び・理解力部門）、コカコーラ環境教育賞（優秀賞）、JIAゴールデンキューブ賞 2013/2014学校部門（優秀賞）、日本建築学会教育賞（教育貢献）

北名古屋市立西春中学校　エコ改修
発注者 北名古屋市
所在地 愛知県北名古屋市
用　途 中学校
延面積 6,179㎡
構　造 RC/S
階　数 3F
竣工年 2008年
受　賞 愛知まちなみ建築賞、JIA環境建築賞（優秀賞）

奈良県郡山総合庁舎
発注者 奈良県
所在地 奈良県大和郡山市
用　途 庁舎
延面積 10,748㎡
構　造 RC/S
階　数 4F
竣工年 2011年

聖書キリスト教会 東京教会
発注者 宗教法人 聖書キリスト教会
所在地 東京都練馬区
用　途 教会
延面積 5,416㎡
構　造 RC
階　数 7F/B2F
竣工年 1995年
受　賞 BELCA賞（ベストリフォーム部門）

大阪市中央卸売市場 東部市場
発注者 大阪市
所在地 大阪市
用　途 卸売市場
延面積 117,184㎡
構　造 RC/S
階　数 5F
竣工年 2012年

会社概要

名　　称　／ 株式会社 東畑建築事務所

営業種目　／ 建築･土木･造園の設計監理、都市計画
およびこれらに関連する調査･企画･コンサルタント業務

創　　設　／ 1932年（昭和 7年）12月

役 職 員　／ 312名

■ 本社オフィス

東京
〒100-0014　東京都千代田区永田町 2-4-3
TEL:03-3581-1251 FAX:03-3581-1257

大阪
〒541-0043　大阪市中央区高麗橋 2-6-10
TEL:06-6202-0391 FAX:06-6223-1474

■ 名古屋オフィス

〒453-0801　名古屋市中村区太閤 3-1-18
TEL:052-459-3621 FAX:052-459-3623

■ 九州オフィス

〒812-0018　福岡市博多区住吉 3-1-1
TEL:092-263-0860 FAX:092-263-0862

写真提供一覧

◇ K's Photo Works　野口兼史
京都大学人文科学研究所（P2･9）
さかい利晶の杜（P21）
京都市立朱雀第四小学校 エコ改修（P28）
同志社大学 良心館 サンクンモール（P19）

◇ SS大阪
大阪国際見本市会場 インテックス大阪（P7）
国際花と緑の博覧会 政府苑（P7）
上京区総合庁舎（P10･11）
草津市立老上西小学校（P12）
社会福祉法人多邦会有料老人ホーム朋央･城南宙保育園（P16）
熊取交流センター 煉瓦館（P26･27）
大阪城天守閣 平成の大改修（P27）
水道記念館（P27）

◇ SS九州
佐賀市文化会館（P7）
小倉競馬場（P8）

◇ SS東京
聖書キリスト教会（P29）

◇ SS名古屋
小山田記念温泉病院（P7）
新城市立黄柳川小学校（P10）
豊田市立土橋小学校 エコ改修（P28）
北名古屋市立西春中学校 エコ改修（P28）

◇ アーバン･アーツ
富士フイルム先進研究所（P8）

◇ 相川経雄
清林文庫展（P8）

◇ 上諸尚美
同志社大学 良心館（P9･18･19･20）
同志社大学 礼拝堂（P19）

◇ 北九州市
門司港レトロ（旧大連航路上屋）（P26･27）

◇ 近代建築社（冨田英次）
武庫川女子大学学校教育館（P15･16）

◇ 佐武浩一
富山県広域消防防災センター･消防学校･四季防災館（P16）

◇ 時空アート
武田薬品研修所･宿泊棟（P9･17）
真庭市役所前バス待合所（P12）
真庭市落合総合センター（P11･25）
同志社女子大学 楽真館（P16･19･20）
同志社女子大学 新心館（P20）
大阪市立大学理系学舎（P18･P20）
甲南女子中学校･高等学校（P20）
NHK新京都放送会館（P22･24）
カプコン研究開発第2ビル（P23）
公益財団法人浅香山病院（P24）
真庭市庁舎（P25）
大阪市中央卸売市場 東部市場（P29）

◇ 写真通信
国東市新庁舎（P14･15）

◇ 伸和
社会医療法人 愛仁会 千船病院（P23･24）

◇ 相互企画印刷
新高麗橋ビル（P9）

◇ 竹中工務店
岡山済生会総合病院（P23）

◇ 東畑建築事務所
ねずみ色からぽたん鍋まで（P7）
待てしばしはない ー東畑謙三の光跡ー（P7）
明石駅前再開発 あかし市民広場（P17）
門司港レトロ（旧大連航路上屋）階段室（P27）
環境教育 緑のカーテンを使った授業（P28）
環境教育 子どもエコガイド（P28）
環境教育 雨水貯留槽を見る（P28）

◇ トロロスタジオ
新城市立作手小学校･つくで交流館（P10･12･13）

◇ ナトリ光房
明石駅前再開発（P14･15）

◇ フォトスタジオ嵯峨
函館競馬場（P15）

◇ ミヤガワ
南長野運動公園総合球技場（P15）

特集

温泉と暮らす

日本には心も体もホッとする「温泉と暮らす」生活文化が根付いています。そして、それを支える建築やまちなど、各地の歴史や自然環境の中で個性的で魅力的な温泉地も名湯百選などに挙げられるように数多くあります。

近年では国内外から多くの観光客が訪れる観光地としても注目され、地域の活性化や再生への視点からも注目される多くの温泉地での取り組み事例があります。

このような状況をふまえ、本特集では、湧きいずる水に豊かな自然の恵みを感謝し、熱く大地のめぐみに温めあう温泉から、生活文化と建築やまちづくりを考えることにしました。構成としては、温泉地の建築と社会に焦点をおきながら、これからの温泉と生活文化を考える論考に引き続き、日本各地の事例について、現地へのルポ取材の結果や温泉に関わる思い出紀行にまつわるエッセイなどを肩の凝らないかたちで紹介するものです。

日本の各地には、有名、無名にかかわらず、本号で紹介できなかった多くの温泉があります。それぞれの人にとって、それぞれの温泉とどのような物語があったかはさておき、本号に寄せていただいた皆様の論考やルポから多くの方々がこれからの生活文化やまちのあり方を感じ取る契機になればと願っています。

計画系編集幹事　田中直人

【総論】

温泉から見る　～歴史・人・街・文化～／松田忠徳

【各論】

温泉とまちづくり　城崎温泉・木屋町小路プロジェクトを通じて／後藤春彦

健康・福祉と温泉　温泉を活用したユニバーサルデザインのまちづくり／田中直人

【寄稿】

飯田　匡／内山優子／大佐古和代／勝山太郎／設楽貞樹／田中直人／戸川勝之／松田奈緒子／森　裕史／守井　辰／吉村英祐／米井　寛／五十音順（記事掲載は順不同）



企画：計画系分科会

飯田　匡／鈴木克彦／田中直人／松田奈緒子／守井　辰／吉村英祐

総　論

温泉から見る

～歴史・人・街・文化～

松田忠徳

温泉学者
モンゴル国立医科大学教授

■縄文前期の日本最古の温泉痕跡

日本人ほど温泉と係わってきた民族は珍しいと思われるが、私たちの祖先はいつ頃から温泉と親しんでいたのか興味のあるところだ。

『日本書紀』、『続日本紀』、『万葉集』、『風土記』などに温泉の様子が描かれている。だが、このような書物が現れるようになるのは奈良時代に入ってからのことだから、たかだか1300年前のことになる。実際には遙か前から日本人は温泉に浸かっていただろうことは容易に想像できる。

昭和39（1964）年に、わが国でもっとも古い温泉の痕跡、縄文人が湯に浸かっていた痕跡が、在野の考古学研究家、藤森栄一（1911～1973）によって確認された。最古の温泉痕跡はJR中央本線上諏訪駅前のデパートの建設工事中に、5.5ｍの地下から発掘された。約6000年前、縄文前期はじめの大量の爪形文の土器片や局部磨石斧が硫黄の湯垢と共に出土したのだ。旧石器時代末の曽根人と呼ばれる人たちの遺跡である。

「６ｍのスクモ層下に大きな岩石が累々とあって、そのまわりは明瞭にかつて湯が湧いていたことを示す湯アカがいっぱい。調査員は、そのどろどろの、いまにも硫黄臭と鉄のくさったような湯の匂いのただよう岩のそばで、思わず、『湯に入っていたんだ』とつぶやいたのである。山の内温泉の地獄谷では野猿だって湯に入っている。何の不思議があろう。石器時代の人たちが湯に入っていた」（藤森栄一『縄文の世界』）。

■『出雲国風土記』に見る禊祓と温泉

奈良時代に書かれた『出雲国風土記』（733年頃）は、わが国の古代温泉に関する史料の宝庫といえる。『出雲国風土記』には島根県の玉造、出雲湯村、海潮などの温泉についての記述があり、なかでも出雲湯村は現在もなお『風土記』に書かれた当時のままの泉源を有する。



『訂正出雲国風土記』（文化３年刊、筆者蔵）

『風土記』の記述から、古代の日本人にとって温泉はどのような存在であったのか、なぜ日本人は温泉に浸かったのか等を推察することができる。その中でもっとも象徴的な記述は玉造温泉についての次の一節だろう。

「この里の川辺には温泉が湧いている。この温泉の出る所はちょうど海陸景勝を兼ねた所であって、男も、女も、老人も、若者も、あるいは道路を往復し、あるいは海上を浜辺に沿って行き、毎日のように集まって市場のような賑わいをなし、また、入りみだれて酒宴を楽しんだりしている。そしてこの湯で一度洗えば容貌も美しくなり、重ねて洗えば万病すべて治癒してしまう。このように、昔から今まで例外なく効験を得ているので、世人はこれを神の湯と言っているのである」（加藤義成『修訂出雲国風土記参究』）。

玉造温泉が「神の湯」と呼ばれていたのは、その効能が優れていたせいばかりではなかった。そこが「禊祓の忌里」であったからである。出雲国造（いずもくにのみやつこ）に伝わる数々の儀式のなかでもっとも修行を積んできたのが、潔斎（けっさい）である。玉造川の岸辺に湧く神の湯で、国造は穢れをきよめていた。

「みそぎ」は心身を聖水できよめ滌（そそ）ぐことだが、出雲では温泉も使われていた。国造は諸国にあって、朝廷の直臣として祭事を司ることを務めとしていたが、古代においては政治（まつりごと）も執り行っていた。

「ここかしこの聖なる川に流れ出る、生命賦与者の若水（わかみず）を、身に沐浴みていよいよ若返り、滌ぎふる淀みの水をかぶり、いよいよ若返りますよう」（『出雲国造神賀詞』）。

聖泉の水は若水であり若やぐ霊力をもつと信じられていた。聖水で沐浴することにより、罪穢が滌ぎきよめられ、健全な肉体と精神がさずけられ、若返ると考えられていた。禊ぎは「復活」の信仰と密接に結びついていた。復活は「若返り」である。

玉造の湯も禊ぎに使われていた。それは、温泉の神である大国主名命（おおくにぬしなのみこと）の本拠が出雲であることの反映でもあった。出雲国造が玉造の出湯（いでゆ）で潔斎浴をしていたのは、ここが国造の

松田忠徳

1949年北海道生まれ。
東京外国語大学大学院、モンゴル国立医科大学大学院修了。
文学博士、医学博士。温泉学者、旅行作家。札幌国際大学教授を経て、現在モンゴル国立医科大学教授、北京徳稲教育機構教授（上海・復旦大学）。
著書に『温泉手帳　増補改訂版』（東京書籍）、『温泉はなぜ体にいいのか』（平凡社）、『温泉教授の湯治力』（祥伝社新書）、『江戸の温泉学』（新潮社）、『温泉力』（ちくま文庫）、『温泉教授・松田忠徳の古湯を歩く』（日本経済新聞出版社）、他多数。DVD「温泉教授・松田忠徳の日本百名湯（全10巻）」（日本経済新聞出版社）もある。

居住地に近かったことが理由として考えられるが、温泉を潔斎浴に用いたのはその霊験が神の湯としてふさわしかったと考える必要がある。

『出雲国風土記』で、私たちの先人は病気を治癒する温泉と娯楽のための温泉、まさに現代人と変わらぬ使い分けを1300年前の奈良時代にしていたことを理解できた。摩訶不思議な温泉の誕生やその効能を考えると、古代の人々が温泉を神と結びつけたとしても無理はなかったろう。大地から湧き出すおどろおどろしい熱湯に畏れおののき、そこに宗教的な性格が付加されたとしても何ら不思議はない。湯浴みによって劇的に痛みが消えたり傷が治癒したとき、温泉に対する信仰心が芽生え、「神の湯」と表現されたとしても、ごく自然のことだったろう。

■湯垢離（ゆごり）の思想

先ほど、聖水は若水だと述べた。温泉も古くから洋の東西を問わず「若返りの湯」と言われてきた。現代科学は、還元系の水（温泉）は生き物の細胞を活性化し、アンチエイジングの機能を果たすと説明することができる。

老化とは錆びる状態、細胞が酸化されること。いわばその対極にある還元力のある温泉を浴びることは、錆をとりぴかぴかにすることだから、科学的にも若返る。実際、私共は500人に及ぶ入浴モニターの実証実験で、老化や疾病の主たる原因といわれる活性酸素を除去、抑制することを確認してきた。

その昔、温湯のみを「ゆ」と言ったわけではない。民俗学者、折口信夫の『皇子誕生の物語』によると、「ゆ」と言うべきものの中に「いづるゆ」、あるいは「いでゆ」があり、神意により偶然に現れて来るのが「いづ」で、その自然なる「ゆ」が禊ぎの水のもっとも神聖なものと信じられていた。ちなみに「出湯（いでゆ）」とは温泉の古語である。

温泉も聖水と同じように神聖なものと考えられた。「湯垢離（ゆごり）」ということばがある。たとえば熊野三山詣での際に温泉で禊ぎを行なった。熊野の本宮大社や那智大社に近い湯の峰、湯川などの温泉が湯垢離の場として知られていた。

現代人は「ゆ」と言うとその響きから温かい「湯」をイメージしがちだが、本来「斎（ゆ）」を指すと考えた方がいいだろう。その昔、沐浴する川のことを斎川と言った。禊ぎをする神聖な川のことである。その水のことを「斎川水（ゆかわみず）」と称した。斎は「いむ＝斎む」、つまり「ケガレを避けて、心身を清めてつつしむこと」を意味する。

湧水が流れる斎川水は神聖な禊ぎの水であったことがわかる。同じ湧水である出湯も、神聖な水＝湯と考えたと思われる。日本人は古来、こうした禊ぎの思想と、湯浴みを通して得られる霊験あらたかな薬湯としての温泉を結びつけてきたと思われる。

■温泉は権力なり

慶長９（1604）年３月、征夷大将軍徳川家康（1543～1616）が熱海に来湯した。関ヶ原の戦いから４年後のことである。

この瞬間、その歴史的事実をもって、日本における熱海の位置づけが決定したといっても過言ではなかった。熱海は天下人家康によって、名だたる名湯の中から選ばれた「温泉の中の温泉」となった。

天下を掌中にした直後、激務の間隙を縫って将軍様がわざわざ出かけて行く温泉というものの魔力に、諸大名はもちろん、江戸っ子たちも魅入られることになる。家康の熱海湯治が温泉と庶民の濃厚な関係の端緒となっただろうことは間違いないだろう。

戦国時代は温泉の争奪戦でもあった。「信玄の隠し湯」、「謙信の隠し湯」という言葉が現代にも伝えられている。いかに戦国の武将、政（まつりごと）のリーダーたちが温泉好きであったかを示す言葉として使われてきた。

だが本来の意味は、温泉を制する者は権力を手にするということであった。温泉は、刀傷を負い疲弊した兵士を癒やす“心身再生の場”であった。野戦病院であった。だから、さまざまな効能をもつ多様な泉質の温泉を隠し持つことが群雄割拠の乱世を制する武将の必須条件ともいえた。

伊達家仙台藩62万５千石、前田家加賀藩102万２千石、細川家熊本藩54万石、島津家薩摩藩72万８千石…。有力藩は恵まれた温泉を複数有し、また現代の日本を代表する温泉県にもなっている。しかも温泉は兵士だけでなく庶民の病気も治癒し、“湯役税（入湯税）”を徴収でき、藩の財政を潤した。

温泉のなかった尾張三河の武将、信長、秀吉、家康が外へ勢力を拡大しようとしたのは必然であったろう。天下人となった豊臣秀吉（1537～1598）は有馬を、徳川家康は熱海を掌中に収め、共にわが国を代表する大温泉地に発展させた。これも歴史の必然であった。天下人が愛する温泉は、諸大名にとっても、庶民にとっても、みなぎる“温泉力”というパワーの象徴であったからだ。

奈良時代に温泉寺を建立した高僧行基や、鎌倉時代に12坊舎を造った仁西上人らが基礎を築いたといわれる古湯有馬は、柿本人麻呂、藤原道長、清少納言などといった豪華な名前に彩られ、京、大坂などの権力、経済力、文化力に裏打ちされた別格の名湯である。

有馬の今日に至る繁栄の土台を築いたのが、最初の天下人秀吉であった。秀吉は天正12（1583）年以来、記録に残されているだけでも戦の前後に９回、北政所（きたのまんどころ）や千利休を伴って湯治に訪れ、茶会を開いている。心身を甦らせてくれる有馬の鉄錆色の湯に秀吉はすっかり惚れ込んでいたようだ。

秀吉は湯浴みを楽しむだけでなく、源泉保護や六甲川の改修工事、浴場の改築などを積極的に行い、それが後の“有馬千軒”といわれる江戸時代の繁栄へとつながった。



江戸前期の有馬（『有馬温泉小鑑』、筆者蔵）

■徳川将軍家と温泉

記録によると家康は慶長９年３月１日に駕籠で江戸を発ち、３日に熱海に到着した。このときは義直、頼宣の２人の幼い息子と伊達政宗配下の連歌師蓮如を伴っての７日間の滞在であった。

10男頼宣は温泉の申し子といってもよかった。家康の側室、お万の方は子宝に恵まれないのを憂え、よく温まる湯として知られる中

伊豆の吉奈で湯治をした。そのかいがあってか、慶長７（1602）年に頼宣、翌８年には後に水戸家の始祖となる頼房を授かっている。

わずか２歳で家康に伴われ熱海で湯治した頼宣は、元和５（1619）年、55万５千石をもって紀伊藩に入封した。徳川御三家紀伊家の誕生である。頼宣が、紀伊の山深き龍神温泉を開発したのは、さすがである。龍神は現在も、川中温泉（群馬県）、湯の川温泉（島根県）と共に「日本三美人湯」として女性に根強い人気だ。

頼宣は龍神のやわらかな重曹泉にぞっこんだった。村の年貢を免除したばかりか、亥の年ごとに藩費で浴舎、宿を改築するほどの力の入れようだった。宝永７（1710）年の龍神温泉の絵図を見ると、宿の数は13軒にも及んでいる。この時代の温泉地の規模としては明らかに大きな方である。

家康が熱海湯治のために宿泊した御殿の場所は、湯元大湯に隣接した今井半太夫の「一碧楼（いっぺきろう）」（現在の「熱海ニューフジヤホテル」のあたりだと思われる）。わずか７日間の湯治滞在のために新しい御殿が造営されたようだ。それが旭日隆昌の将軍様に対する熱海のおもてなしであった。家康の御殿は使用後すぐに取り壊され、その跡地に大名を迎えるための本陣、一碧楼が建てられた。その直後から、諸大名の間に熱海湯治ブームが巻き起こるのである。

家康の熱海での湯治期間は７日間であった。７日を一廻り、もしくは一巡りという湯治期間の習慣はすでに中世以来、ほぼ確立されていたようだから、家康もその習慣に則ったに違いない。14日を二廻り、二巡り、21日を三廻り、三巡りなどと呼んだ。

湯治における一廻り７日という習慣は、古くは医療において寺院の医僧が診療に当たっていたため、仏事と同じように投薬、湯治の日数も７日単位としてきたことに基づくものと思われる。

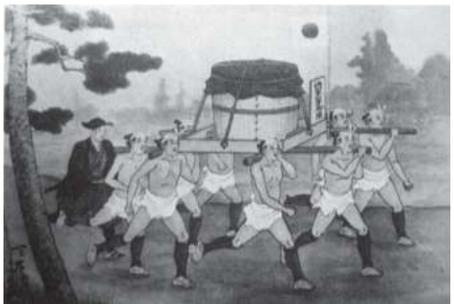
天下人家康が一廻り７日間の湯治を実践することにより、後の江戸っ子の湯治ブームの中で、この湯治法がしっかり根付くことになる。家康の熱海湯治から400年を経た平成の現代でも、その習わしを踏襲しているとは驚きを禁じ得ない。

もっともわれわれの先人たちは惰性でそうしてきたわけではなかった。免疫力を高めるためにこの単位が心身にとって心地よいリズムであることを経験的に知っていたのである。それが理に適っていたことが、今日ではドイツや日本の医学者たちによって解明されている。湯治の開始によって、ひずんだ状態にある生体の諸機能がほぼ７日周期のリズムを描きながら正常化していくことが突き止められている。

生体のリズム性反応の主役は自律神経である。湯治開始後、交感神経が優位になると、警告反応が起き、今度は副交感神経が優位になり、過剰反応の修復をおこなう。血圧や血糖値が上がり過ぎると、今度は下げるという様にである。交感神経優位相と副交感優位相が交互に発現して、生体の機能（適応）性反応の波が生まれ、自律神経全体のバランスが整うまでこうした波動は続く。

秀吉が有馬の湯にぞっこんだったように、家康が熱海の湯に絶対の信頼を寄せていたことを窺わせる記録が残っている。熱海湯治をした年の７月15日に、熱海の湯を５桶わざわざ京都・伏見まで運ばせ、信頼する人物に与えていたのだ。その人物の名は周防の大名で、吉川広家である。広家は吉川元春の子で、毛利元就の孫にあたる。朝鮮の役で勇名を馳せた広家は、関ヶ原の戦いで家康に忠勤を励んだことで知られる。その広家が老いて病気がちであることを知った家康は、伏見まで信頼する熱海の湯を届けさせ、広家の恩に報いたのである。

家康の温泉に寄せる信頼が後継者たちにも伝わったのか、３代将軍家光は熱海に別荘を建てているし、歴代の将軍は江戸城に熱海の湯を運ばせて湯治をしている。その記録は事細かく残されている。



熱海の汲湯（『熱海歴史年表』、筆者蔵）

■俵山温泉、地域で湯を守る哲学

山口県長門市の俵山は日本海から直線で10キロほど内陸部の、正川が削った狭い谷間に開けた湯町である。白猿による温泉発見譚にまつわる地元の口伝によると、平安初期の延喜16（916）年の発見という。

古くから町の湯、川の湯、正の湯の三大源泉が知られ、わが国を代表する療養温泉として今日に至っている。俵山の発祥の湯「町の湯」の開湯は正確なことは不明だが、江戸時代よりかなり前から利用されていたことは間違いなさそうだ。

俵山では町の湯源泉がリウマチ、神経痛、川の湯源泉が皮膚病、火傷、正の湯源泉が胃腸病の名湯として知られている。これらの効能が昔からよく知れ渡っていて、俵山の療養温泉としての年輪を感じさせる。明治37（1904）年に刊行された田村禎祐『俵山温泉誌』にも、「川の湯は皮膚諸病に適し、町の湯は筋骨関節の諸病に奇効を奏す、就中リウマチスは当温泉の夙に名声を博ふしたる所以にして、最も適応し効験極めて著しく」と記されている。俵山のシンボルである公衆浴場「町の湯」の優れた療養効果は私共の実証実験においても確認されている。

わが国を代表する温泉地の大半は江戸時代にその発展を見た。俵山もすでに江戸前期より、長州藩36万９千石毛利家の直営の由緒正しき湯治場として、歴史にその名を刻んできた。貞享５（1688）年の３代藩主吉就（よしなり）を皮切りに、歴代の藩主が俵山で湯治をしている。なかでも萩に藩校明倫館を創設するなど長州藩の文化興隆に尽くした６代吉元は俵山の湯にぞっこんで、『毛利文書』には４度の湯治滞在の記録が残されている程だ。

藩政期当時の俵山の実力を示す資料がある。慶長15（1610）年の長州藩検地帳である。これは現代の課税台帳に相当するもので、藩が税を取り立てるための重要な基礎資料であった。対象となったのは田畑、屋敷，鉱山、湯坪（温泉）等。

このとき見積もられた湯坪石を見てみよう。周防国吉敷郡「湯田温泉」（現在の山口市）…27石７斗２升。長門国豊浦郡「川棚温泉」（同下関市）…８石３斗５升。長門国大津郡「俵山温泉」…86石。いずれも現在の山口を

代表する温泉場である。石盛は温泉の入浴者数に対して賦課されるものであるから、俵山はすでに江戸初期において活況を呈していたことが容易に想像できる。

江戸中期の寛延３（1750）年には、俵山に27軒もの宿があった。この数は藩政期に隆盛をみた熱海、有馬等と比べても遜色のないものだ。ここからも辺境の地にありながら俵山がいかに異彩を放っていたかを想像することは難しくない。もちろん霊泉としての類い希なる効能によってであった。その後、文化５（1808）年までに１軒増えて、湯宿の数は28軒になっていた。

俵山の発展の歩み、及び現代の俵山を見ると、他の多くの観光地化した温泉地とは際だって異なる点があることに気づく。それは「町の湯」「白猿の湯」という二つの外湯（公衆浴場）を中心に湯町が形成され、基本的には宿は内風呂を持たないという藩政時代のままの原則が今なお貫かれている点だ。20軒程の旅館の内、宿に風呂を持つのは１，２軒で、療養客は現在も２軒の外湯へ通う。地域の住民も旅館経営者、従業員も客と同じ外湯で入浴するという、昔ながらの習わしを維持しているのである。



俵山温泉（俵山温泉提供）

俵山温泉の最大の魅力は、このように江戸や明治、大正、昭和初期の湯町の形態がそのまま残されていることだ。何故、そのような江戸時代さながらの湯町が現在も存続しているのか。

俵山の湯宿経営者であった坂倉幸博はその著『俵山温泉燭光』（2005年）の中でこう述べている。「28軒の上限は何故か。湯壺の広さは湧出量によって決まる。利用人員は浴槽を広くしても、お湯はぬるくなり、汚染してアルカリ性は急速に衰えてゆき、治療効果はなくなる。先輩は長年の経験によりこのことを心得ていた。と考えるのはもっともなことで、宿の過密は過当競争を招き、共倒れの恐れがある」。

この文章に温泉に関わる者の使命感を感じることができる。「治癒効果のない温泉はもはや温泉とはいえない」との思いを強く感じ取ることができる。その思いを貫くことによって、同時に自分たちも生かされていると。それは単に収入を得るということだけではなく、多くの人々に喜んでもらえるような温泉を守り育てているという温泉経営者たちの自負心でもある。

■共同湯を取り巻くように形成された温泉街

温泉場は江戸時代には外湯（共同湯）を取り囲むようにして形成されてきた。有馬や同じ兵庫県北部の城崎のような歴史ある温泉地においても、宿に風呂（内湯）を持つようになったのは戦後のことである。宿から外湯に通う湯客相手に市が立ち、食料品店、土産物屋、食堂、遊技場などが軒を連ね湯町が発展していった。

だからいまだに外湯のある温泉街は日本人にとって“癒しの原風景”といえる。

加賀の名湯、山代では共同湯を「総湯」と呼び、総湯を中心とした周囲の町並みを「湯の曲輪（がわ）」という。平成６年に公衆浴場として初めて国の重要文化財に指定された木造三層楼の「道後温泉本館」（築明治27年）を取り囲むようにして、温泉街が周囲に広がっている道後温泉などは現代でも分かりやすいだろう。

もっとも典型的な例は群馬県の草津温泉である。現在もなお毎分４千ℓとも言われる豊富な湧出量を誇る草津温泉の最大の湯元である「湯畑」のぐるりを、幾重にも取り巻くように共同湯、旅館、土産物屋、民家などが所狭しと建ち並び、大きな温泉街が形成されてきた歴史を俯瞰できる。



草津温泉「湯畑」

草津の現代の姿は江戸時代や明治時代に刷られた温泉絵図と見比べても、基本的には変わりないことが分かる。温泉街の生命線は温泉であり、その温泉が噴き出す湯畑を現在に至るまで取り壊すことなく守り通してきた草津町の人々の哲学が見え隠れする。その結果、江戸時代と変わることない自然湧出の湯が大量に噴出し続けている。その圧倒的な湯力は現在もなお老若男女を魅了して止まない。

しかも湯畑の周辺には数多くの共同湯が点在し、湯客は地域住民と共同湯に無料で入浴しながら裸の付き合いができる。草津のように地域の生活と密着した温泉場の雰囲気を味わうことができる温泉場は、特に信州に数多く残されている。その代表格は13か所もの共同湯が村内外の人々に無料で開放されている野沢温泉村の野沢温泉だろう。

野沢温泉は有名な「野沢菜」の発祥の地でもある。温泉街の中心に湯煙を上げる野沢を代表する湯元、“麻釜（おがま）”は、旅館や外湯の湯を賄う大切な泉源であると同時に、村人の台所でもある。90度もある麻釜源泉で野沢菜や山菜、野菜をゆがくと、「風味が増す」と村人たちは皆口を揃える。秋も深まり湯煙が一段と濃くなると、野沢菜をゆがく村人でいっそう賑わう。



野沢温泉「麻釜」（野沢温泉提供）

野沢には30数本の泉源がある。しかもすべて江戸時代と変わりない自然湧出の極上湯だ。江戸初期に飯山藩主松平遠江守がこの地に御茶屋（別荘）を建て、毎年のように湯治をした頃のままの湯質を保ってこられたのは、村人の生活に密着した温泉であったからに違いない。“効く”温泉を守り育ててきたのである。江戸後期から続く「野沢組」という温泉、水利権などを守る自治組織があり、その決定権は村議会より上だと言われている。村内で新たな温泉掘削が認められない代わりに、共同湯が開放されているのである。

（まつだ　ただのり）

各論

1

温泉とまちづくり

城崎温泉・木屋町小路プロジェクトを通じて

後藤春彦

早稲田大学教授

後藤春彦

1957年　富山県生まれ
1980年　早稲田大学理工学部建築学科卒業
1982年　同大学大学院理工学研究科修士課程修了
1987年　同大学大学院理工学研究科博士課程修了
早稲田大学理工学部助手、三重大学工学部助教授、早稲田大学理工学部助教授、1998年より同大学教授

専門分野：都市計画、地域計画、景観設計
著書：『無形学へ　かたちになる前の思考』（編著・水曜社）、『人口減少時代の地域づくり読本』（共著、公職研）、『医学を基礎とするまちづくり』（編著・水曜社）、『実践まちづくり読本　自立の心・協働の仕掛け』（共著・公職研）、『景観まちづくり論』（学芸出版社）、『図説都市デザインの進め方』（丸善）、『まちづくりオーラル・ヒストリー』（水曜社）ほか多数
受賞歴：日本建築学会賞（論文）、日本都市計画学会　計画設計賞、土地活用モデル大賞　国土交通大臣賞、グッドデザイン賞ほか多数

■はじめに

温泉と一口に言っても、温泉権と呼ばれる権利形態によって大きく異なる。「温泉とまちづくり」というテーマでの執筆を依頼されたことに鑑みると、まちづくりに直結しているとも言える泉源の権利形態のひとつが「財産区」ではなかろうか。「財産区」とは、山林や原野、用水施設、公共建築、そして温泉など、地域の財産や公の施設の管理・処分・廃止の権能をもつ特別地方公共団体である。すなわち、地域のひとびとの共有財産として温泉が位置付けられている場合、おのずと、温泉とまちづくりは不可分な関係を有することになる。

今回は、筆者がこれまで関わった「温泉とまちづくり」のうち、とても印象深かった兵庫県城崎温泉の事例を紹介してみたい。城崎温泉も、まさに「財産区」によって温泉が管理されている。その「財産区」は湯島と呼ばれる温泉の湧くひとつの谷からなる地域である。

■復興まちづくり

筆者が城崎温泉でまちづくりのお手伝いをさせていただいたきっかけは、平成14年に当時の町長だった西村肇氏から電話をいただいたことだった。早稲田大学の建築学科は城崎温泉と深い縁があるとのお話をされた。詳しく伺うと、大正14年にこの地を襲った北但馬地震まで遡る。この年の５月、兵庫県但馬地方をM7.0の激しい揺れが襲い、城崎温泉の建物のほとんどが倒壊し、木造旅館の密集する温泉街のほぼ全域が焼け野原となり、人口3410の町の犠牲者は死者272人、負傷者198人にのぼったと言う。

復興の陣頭指揮にあたった当時の町長は、彼の祖父にあたる西村佐兵衛だった。当時は関東大震災による帝都復興期とも重なり、国からは無利息借入金が出されたものの、技術者が派遣されることはなかった。西村佐兵衛は母校である早稲田大学に復興支援を求め、その結果、建築学科教授の岡田信一郎と吉田享二が派遣されることになった。岡田は大阪中之島公会堂、歌舞伎座、明治生命館などを手がけた当時を代表する建築家であり、一方、城崎の近隣の出身の吉田は当時最先端のRCを研究する工学博士であった。これが城崎のまちづくりと早稲田の縁のはじまりということになる。

西村佐兵衛の「湯の涌き出づる限り、子どもたちの歓声が聞こえる限り、この町は発展する」との強い信念のもと、６棟の外湯と城崎小学校のRCによる再建を中心とする明確な復興ビジョンが示され、災害に強いまちの再生をめざした防災都市計画が立案された。特に、避難路の確保や延焼防止を目的とした土地の１割無償提供による区画整理、まちの骨格を形成する大谿川の改修、公共機関・角地建物のRC化などが手掛けられた。さらに復興事業は官主導になりがちであるが、防火地域の決定において町民大会などの住民合意形成の機会を設けたことや、生活再建のための低金利融資制度を導入したことなどは画期的であった。そうした災害を克服したことによって、木造三階の旅館が隙間なく連なる今日のような独特な町並みができあがった。

名著『日本の都市空間』（彰国社1968）に「一文字型」と名付けられ、航空写真とともに紹介された、大谿川の玄武岩による護岸や太鼓橋、柳や桜並木などの落ち着いた城崎の佇まいは、大正初期に城崎温泉を訪ねた志賀直哉の目に映ったまち並みではなく、震災復興を機に新たに強い意志の下に創造されたものであり、西村佐兵衛のリーダーシップと、岡田信一郎の建築・都市デザイン力、吉田享二の建築不燃化の研究蓄積によるところが大きい。

■市町村合併を契機とする住民自治の展開

さて、西村町長（当時）からのお話は豊岡市他５町の合併にあたって、住民の自己決定・自己責任にもとづいて地域の将来像を主体的に描く、城崎独自の新しい自治のかたちを模索できないかということだった。

平成15年から２年間の歳月をかけて、私の研究室では若い温泉観光業を担う人々とともに、まちづくりワークショップや社会実験などを重ねて『城崎このさき100年計画』と名付けた合併後の「住民自治」のための計画を策定した。この計画は城崎町の審議会を経て公的な計画としてオーソライズされたが、合併

後に城崎温泉の住民自治によって取り組むコミュニティ計画の性格を色濃く打ち出したもので、従来の行政計画にかわるコミュニティ発意による構想的な計画のあり方を示している。

特にユニークなのは、基幹産業である温泉観光を支える地域経営の連合体の再編をめざし、温泉にまつわる権利を所有するとともに外湯の維持管理を担う「財産区」をまちづくりの中心に据えたことだった。この「財産区」は公職選挙法に基づく議員選挙を行う特別地方公共団体であり、城崎温泉は合併後もまちづくりの意思決定機関を湯島地区に確保していることになる。

『城崎このさき100年計画』は、いつ、誰が、どの予算で取り組むのか計画の実行性は何も担保されていない構想的な計画ではあるが、いつか、誰かと一緒に、やってみたいプロジェクトが多数記されている。合併後も、商工会、旅館組合、観光協会など、さまざまな団体がこの計画をひとつずつ実行しており、まさに、まちづくりのバイブルになっている。

こうした背景には、湯量の少ない温泉資源を共有する運命共同体的な発想が根付いていることが挙げられる。「内湯紛争」が20年以上も続いた苦い歴史を乗り越えて、外湯めぐりが発展した。建物の形をひとつずつ変えて外湯めぐりを楽しんでもらうのも苦肉の策だった。現在は、集中管理配湯方式が導入され、お湯の管理は一元化されている。

温泉観光地は日銭を稼ぐ商売であるため本来は利己的になりがちだが、互いの利益を守るためにまとまることが必然で、当事者意識がとても高く、空間のルールづくりもしっかりしており上手にコモンを形成している。それには、『旦那マインド』と呼んでいるが、街を経営しているという感覚をもった旦那衆の力が欠かせない。老舗の旅館の旦那衆らは自分の生まれた土地に対するプライドや愛着をもって後継者を育てている。

城崎温泉では、こうした力学から外部資本の進出を拒み、家族経営の小さな旅館の共存共栄をはかる商売の形態になっていった。

■木屋町小路（三十三間広場と火伏せ壁）

城崎は岡田信一郎のみならず、西山夘三なども外湯の設計を手がけている。旦那衆はみな普請趣味がある。彼らは一生の間に何度も普請をする機会があって、とても建築について詳しい。旅館では、季節毎にふすまや障子などの建具を取り替えて、時代に合わせて客室を和風にしたり洋風にしたりチューニングしている。そうした、建築に対する目利きに囲まれながら、「木屋町小路」と呼ばれる公共空間の設計をさせていただく機会も得た。

四所神社という城崎の谷で最も重要な神社の正面に、従前は鉄骨３階の温泉旅館が建っていた。それが経営的に傾き、このままでは外部資本が進出してくる恐れがあるということで、旦那衆が集まって、結局、豊岡市に買いとってもらうことにした。その結果、四所神社の鳥居の前にオープンスペースができたので、それを参道と見立てるところから設計が始まった。延長が60mだったので「三十三間広場」という名称が浮かんだ。

この「木屋町小路」プロジェクトでは、四所神社から新しい動線として「三十三間広場」をつくり、広場の奥にさらに商業スペース（チャレンジショップ）と中庭を設けて、通り抜け動線を流し込むことを意識した。空間を入れ子状に開いたり閉じたりすることを繰り返しながら、表の旅館街と裏の大谿川をつないで、回遊性を生み出すことをこころみた。その結果、観光客の動線に大きな変化が生まれている。

「火伏壁」と名付けた防火壁は、大正14年の震災の復興計画における角地建物の不燃化の思想を受け継いでいる。RC壁の仕上げは、和紙貼りとした。カビや落書きが心配されたが、一冬、モックアップをつくって暴露実験を行い、耐朽性を確認した。

実は、『城崎このさき100年計画』に先立って、マサチューセッツ工科大学（以下MIT）の学生と早稲田の学生が１週間程度合宿して、町民に設計案を提案するシャレット・ワークショップを開催した。その時のMITの学生のファースト・インプレッションが多くの人々に影響を与えた。１人の学生は、「泥棒道」と子どもたちが呼んでいる山際の道の価値を発見した。裏道の有機的なネットワーク案はこの時からすでに描いていた。もう１人の学生は、城崎の谷っていうのは人間の耳の穴みたいな形をしていると言い出した。そうすると、ここに鼓膜が張られるはずだと。その鼓膜の位置が、四所神社の前だった。旅館の旦那衆たちも、面白いこという学生がいるなと彼女の話を聞いていたが、それがずっと記憶されて、四所神社の前を通る度に、この谷で奏でられる音色はここで拡声して温泉街に広がっていくのだと考えるようになる。場所のもっている潜在的な力を見事に言い当てて、その場所の力をみなと共有することに繋がった。いわゆる一軸の道に旅館が並ぶ単純な構造に、背後の山ひだの有機的な形態のネットワークをつなぎ、それと直交するような聖と俗をむすぶ参道軸を引くアイディアが生まれた。

城崎の谷は、旅館がびっしりと建ち並んでいるため、まち並みの中に入ると谷の中にいる感じがしない。しかし、このプロジェクトによって、四所神社の前でようやく、谷の北面と南面の緑と緑が両方から顔を出す。まさにMITの学生が鼓膜と表現したものができたように思う。

城崎温泉「木屋町小路」プロジェクトは、日本都市計画学会・計画設計賞、土地活用モデル大賞・国土交通大臣賞、グッドデザイン賞、兵庫県・人間サイズのまちづくり賞などを受賞した。また、その都市デザイン手法は、『図説都市デザインの進め方』（丸善出版2006）にまとめているので、興味のある方は参照いただきたい。

■おわりに

平成27年１月、城崎温泉で死者二人が出る大規模火災が発生し、木造三階建ての旅館が建ち並ぶ佇まいの存続が危惧された。既存不適格建築物にあたるため、増改築や用途変更の際に、これまでの意匠や形態を保つことができなかったが、この災害を契機に豊岡市は「城崎温泉地区における歴史的建築物の保存及び活用に関する条例」をつくり、認定歴史的建築物として建築基準法の適用除外を認めることを可能とした。

北但馬地震の復興まちづくりの成果が歴史的景観となり、後世に継承されることは感慨深いものがある。

（ごとう　はるひこ）

各論

2

健康・福祉と温泉

温泉を活用したユニバーサルデザインのまちづくり

田中直人

島根大学大学院特任教授

■はじめに

「福祉」には「しあわせ」という意味がある。生活の中では、大半の人は、家庭のお風呂であっても温泉地の浴場であっても「入浴」の際には、ほっこりと、しあわせを感じることであろう。ひとそれぞれ身体状況が異なるので、長湯や高温の湯が苦手な人もいるが、私たちの生活の中で「入浴」は大切な行為のひとつである。

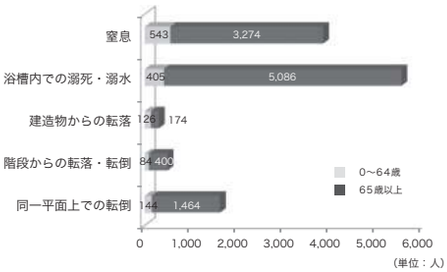
多様な人の入浴行為を受け入れる「温浴空間」は多様である。さらに、そこで期待される機能も多様である。身体を清潔に保つ衛生機能に始まり、リハビリやリラックスにつながる健康機能、そして個人はもとより、家族や友人、地域のひとたちと育まれるコミュニティ機能も大切な機能である。

温泉の場合にはお湯の泉質によってさまざまな効能があり、医学的にも美容的にも注目される。国内外から温泉が大好きな人たちが、湯治客や観光客として集まり、温泉地はにぎわいを呈する。まちの活性化という視点を含んだ観光機能もある。逆に、自然豊かな環境に秘湯として存在する隠れ湯のファンも多い。全国各地には名湯とされる有名温泉や人気温泉が多く点在する（**図1**）。しかし温泉の魅力とは裏腹に温泉はバリアの多い危険な空間でもある。

日常性と非日常性のはざまを超えて、私たちの生活における温浴空間の機能と魅力に着目し、高齢者や障がい者だけを考慮するという狭い福祉的視点ではなく、それぞれの多様な違いを超えて、だれもが「しあわせ」を感じ、健康につながるユニバーサルデザイン（以下、UD）としての温泉の可能性について考察する。

■住宅における事故死が多い危険な浴室

最も身近な生活環境として住宅内では、浴室は高齢者の事故死がもっとも多い空間のひとつとなっている（**図2**）。高齢者の身体特性を考慮した手すりや床の段差などのバリアフリーの問題だけでなく、浴室と脱衣室などとの温度差などの問題が指摘される。



出典：厚生労働省「平成28年度人口動態調査」より

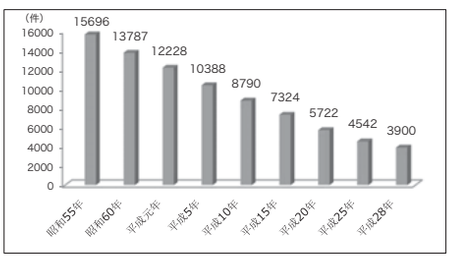
図2　住宅内における高齢者の事故死

高齢者だけでなく、親子で入る場合や子どもだけで入る場合など、家族にとっての安全や快適性を追求するしかけや工夫が必要である。露天風呂感覚を生み出す外部空間とのつながりや自然要素のデザインも考えてみたい。

災害時の被災地では避難所などで入浴できない生活が問題となる。自衛隊などによる仮設の浴場の提供があるが、利用者によっては利用しがたい状況もある。仮設であっても不自由がない基本的なバリアフリーを考慮したものの開発が期待される。近くに温泉がある地域では、地域の既存温泉施設を開放するなど、地域の温泉資源の活用も図りたい。仮設住宅団地では各住宅に加え、集会所や談話室の整備が定着しているが、住民のコミュニティの場としても温泉場（温浴環境）を設けるのも一案と考える。温泉地で各住戸に温泉水を供給している事例もある。我が家に居ながら本物の温泉を家族と楽しむことができる。

■地域のお風呂屋さん（銭湯）

かつて市民の日常の温泉であった地域のお風呂屋さん（銭湯）は家庭風呂の普及とともに激減している（**図3**）。それでもいつの時代も銭湯は、庶民の暮らしに寄り添って変化してきた。今もなお全国各地域には老舗の温泉「銭湯」があり、庶民のコミュニティの場であるところがある。



出典：厚生労働省　平成28年度「衛生行政報告例」より

図3　銭湯数の推移

田中直人

神戸市生まれ。
東京大学大学院工学系研究科建築学専門課程修了。博士（工学）。
神戸市にて福祉のまちづくり計画のほか、西神ニュータウン、舞子駅前再開発などを担当した後、神戸芸術工科大学教授、摂南大学教授を経て2013年より現職。
各地でのまちづくりやユニバーサルデザインの計画に携わる。著書に「建築・都市のユニバーサルデザイン－その考え方と実践方法」（彰国社）－日本建築学会著作賞受賞、「ユニバーサルサイン－デザインの手法と実践」（学芸出版社）、「五感を刺激する環境デザイン－デンマークのユニバーサルデザインに学ぶ」（彰国社）等。
ユニバーサルデザイン監修や作品に、ビッグ・アイ、イオンレイクタウン、奄美海洋展示館等。

サウナや各種の浴槽を導入することで魅力を高め、駐車場設備なども整備し、大型化し、スーパー銭湯の方向へ変化する傾向もある。1000メートルも掘れば温泉が出ると言うことで温泉掘削しての温泉開発する例も多い。また、最近では、イベントを行うなど、趣向を凝らした新しいタイプの銭湯も生まれている。京都府の八幡市などでは一定時間を地域の高齢者に無料開放するなど、デイケア銭湯ともいえる地域の福祉的サービスの拠点として、通常のデイサービスセンターでは出来ない温泉気分を味わう試みがある。このほか、浴場内の段差解消、洗い場や浴槽の手すり設置、車いす使用者トイレの整備など、高齢者から子どもまでだれもが利用できる事例も普及している。京都生協では、永年、地域住民の方に親しまれてきた銭湯“葵湯”を改装し、2007年にデイサービス第一号「コープ葵湯デイサービス」をオープンしている。施設は銭湯を改修したお風呂に加え、厨房を備え、地域のコミュニティの核でもある。

■福祉施設や宿泊施設における温浴環境と福祉

福祉施設や宿泊施設における浴室の利用においては、利用者本人の自力によるのか、介助者によるのか、機械浴を利用するのか、それぞれの身体状況に応じた整備が求められる。福祉施設などではより専門的な高度な対応が基本となるが、健常者を含む、他の利用者とともに利用する場面では、UDの考え方が求められる。

UDとしてややもすれば、ハードウェアに注目が集まるが、ソフトウェアも重要である。例えば、肢体不自由への対応だけでなく、情報障害に対応するために、UDの客室を整備するだけでなく、外国語や手話ができるスタッフを揃えることやホームページ、カタログ等の色使いの配慮が求められる。個々の施設空間のバリアフリーに力を入れるだけでなく、専用の客室や館内全体がバリアフリーに対応することも忘れてはならない。

■取り組み事例から見る温泉のUD

1）温泉施設のバリアフリー：UDをめざして

佐賀県嬉野温泉では、温泉に入りたいけれど身体的な不自由がある人たちに入浴できるバリアフリーを進めている。このような取り組みは全国各地で進展している。さらに飛騨高山温泉では、早期から、車いす使用者へ向けた床の段差解消や手すりだけでなく、ロービジョンなどの視覚障がい者を考慮した空間を区別する色や照明のコントラストを配慮しているホテルもある。

同様に、有馬温泉の老舗の旅館では車いす使用者の玄関アクセスのリフトを設けるほか、浴室に手すり、スロープを設ける等の配慮がある。実際の利用においてはスロープの勾配や形状など改良の余地があると思われるが伝統的な和風建築においてバリアフリーに取り組んでいる事例として注目したい（**写真５・６**）



写真５　玄関の昇降機



写真６　浴室のスロープ

施設の水回り空間は浴室のみならずトイレなども含め、基本的な車いす等のアプローチを考慮することに加え、手すりや水栓金具・ボタンなどの使い勝手で改良の余地が大きい。美肌の湯として人気のある温泉の中にはお湯がぬるぬるでとても良いが、そのために床がぬるぬるして滑りやすい。風光明媚なところで露天風呂に思わぬバリアがある。そこに安全のための手すりを付けるとせっかくの環境の雰囲気を損なうこともあるのでデザインも工夫したい。

2）まち全体を対象にした温泉のUDまちづくり

有馬温泉について、温泉施設だけでなく、まち全体をUDの対象として、こうべUD広場のメンバーでフィールドワーク点検した（**写真７**）。有馬の歴史を踏まえた環境を考えるとともに、ワークショップでは、有馬温泉街でUDについて足りている部分と足りていない部分について多くの問題提起がなされた。最大の課題は急峻な坂道等があり自然環境の状況をバリアフリーとしてどのように克服するかということである。かつて高低差のある斜面にケーブルカーを設けていた老舗旅館もあったが、現在はエレベーターで処理している。



写真７　UDの温泉まちづくり点検

箕面温泉ではかつてのケーブルカーに代わり、外部に設けたエレベーターによってメインのアプローチのバリアフリーを確保している。高低差のバリアフリーを克服したのちに得られる景観の眺めが利用者にとっては大きな魅力となる。

熊本県の黒川温泉では街全体が一軒の旅館という考え方で国内外からの観光客からも評価される「景観」整備を成功させている。次の段階では福祉的な環境として高齢者や身体的に不自由な人への限りない配慮が求められる。露天風呂は自然環境の中に溶け込む環境

デザインの魅力がある。しかし、危険なバリアが多くあることを忘れてはならない（**写真８**）。



写真８　バリアフリーが求められる急な坂道

まち全体を対象として、点・線・面と施設間の移動におけるバリアフリーを基本に全体の環境の美しさや特性を大切にしたい。

３）利用者参加型の調査による温泉のUDまちづくり

岐阜県の高山市では、「高山市誰にもやさしいまちづくり条例」に基づき、積極的にUDや施設のバリアフリー化、平成８年から平成15年まで、計13回にわたりモニターツアーを実施している。参加者は身体にいろいろな不自由さを抱えている人を中心に、毎回様々なメンバーによって、多様な人の観光に対する要望が出された。高山の古い街並みが持つ段差や移動のための車いす使用への配慮、観光地でのトイレの問題等、このツアー参加者の声によって改善されたバリアフリーは大きい。

大分県別府市でも平成14年から、高山市と同様に実際に体の不自由な方に別府市内の旅館ホテルを利用していただき，その感想から施設の改善点を見つけ出すことを目的にモニターツアーを開催している。

国内外からの利用者の声を今後のまちづくりに反映していく利用者本位のUDのまちづくりは、観光の視点だけでなく、住民の視点からも住みよいまちづくりにつながることが期待される。まさにだれもが「行きたくなるまち」や「行きよいまち」が「住みよい」まちにつながる利用者参加のまちづくりが求められる。

４）バリアフリーに関する温泉の情報整備

温泉のまちづくりとして、UDの考え方が進展している。実際の施設やまちづくりの状況について、インターネットやICTを活用した情報整備の事例が多い。館内、客室、温泉、大浴場、食事、駐車場、交通、送迎などの各項目ごとにバリアフリー状況を知らせるものである。現状としては、車いす使用者向けの情報が中心となっているので、今後は他の利用者に対する情報提供も充実させる必要がある。また、外国人向けの対応や事故、災害時などにおける情報提供も課題と言える。

５）多様な生活機能をつなぐ温泉を活用した健康福祉の拠点づくり

熊本市南区のみゆきの里「ウェルネススクエアー和楽」は健康と福祉が一体化した老人福祉センター・温泉利用プログラム型健康増進施設である。健康食堂と天然温泉浴場とトレーニング室がある。基本コンセプトとして「食を楽しむ、体を動かす、心を癒す、感性を磨く」とそれぞれが健康管理維持上大切な機能である。予防の拠点という位置づけでもある。健康食堂「田園キッチン」は、在宅高齢者の生活の質を維持・向上させ健康寿命を延ばしていくことを目的に、健康づくりの体験の場として適正な栄養素（食物）の摂取のあり方の助言を行っている。

源泉を敷地内にある病院からとする天然温泉浴場は田園に包まれた露天風呂のある「やすらぎ」の場を提供している。温泉利用プログラム型健康増進施設として、歩行浴スペースを確保している（**写真９**）が、一般の健康な方々も利用でき、お風呂だけ利用の人もいる。熊本の近辺で温泉機能をつけた総合施設はおそらくこちらの「みゆきの里」だけだろう。地域に受け入れら期待され、健康長寿のまちづくりを目指す事例である。



写真９　歩行浴スペース

■温泉の魅力をより多くの人が享受できる「温泉UD」と課題

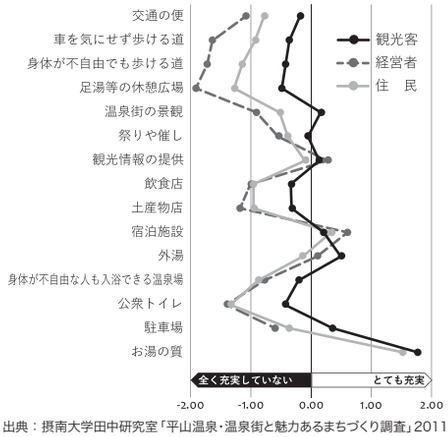
１）温泉利用者の意識と今後の課題

熊本県下で人気のある平山温泉にて、地域活性化協議会のみなさんと進める「温泉のUDまちづくり」の一環として、里山の景観を考慮したサイン計画や湯の里市の整備に加え（**写真10**）、旅館経営者および観光客、住民へのアンケート調査を行った（**図11**）。



写真10　平山温泉のサインワークショップ

この結果として、①平山温泉の現状について、旅館経営者の評価は非常に厳しいが、住民は、旅館経営者ほど評価点は低くなく現状に満足している。②同様に、観光客は旅館経営者が考えるほど、低い評価はしていない。③観光客は、特に平山温泉の景観や環境について高い評価である。そして、④観光客は、「身体が不自由になっても訪れることが可能な温泉街」や⑤「長期療養可能な湯治場」を、旅館経営者は消極的であるが、観光客は希望する傾向にあることが確認できた。



出典：摂南大学田中研究室「平山温泉・温泉街と魅力あるまちづくり調査」2011

図11　平山温泉現状評価の観光客、経営者、住民比較

温泉のもつ身も心も開放的に人とのコミュニティや療養・福祉効果を促進する仕掛けとして機能することが期待され、基本的なバリアフリーをもとにユニバーサルデザインの導入が求められている。

2）男女の共同利用が可能な温泉

平山温泉のある熊本県には介護を要する家族がいる親子をはじめ、グループで利用できる家族風呂が多い。異性介助の場合もあるが、UDとしては男女の共同利用が可能な施設計画や水着着用により、温泉をさらにだれもがいっしょに楽しめることが期待される。

奄美大島ではサンゴ礁の広がる浜辺から採取したミネラルたっぷりの海水を利用した温浴施設「タラソ奄美の竜宮」がある。老若男女がともにプール感覚で、前に広がる大自然の中で癒される空間である（**写真12・13**）。



写真12　身も心も健康につながる海水プール



写真13　東シナ海を望むサンセットデッキ

ドイツのバーデンバーデンなどの温泉は医学的な温泉利用などとしても有名であるが、ここでも男女や障がいの有無にかかわらずみんなで利用できるような配慮があることも着目していいだろう。

3）福祉サービスと温泉の連携

温泉でなくても高齢者などが利用する施設に温浴施設を設けている福祉施設の事例が多くなっている。医学的な効用だけでなく、家族や友人と個々の身体的な条件を超えて、ともに利用できることから、コミュニティの場としての機能も期待できる。温泉の場合はさらに自然の恵みに身を置く健康環境として活用されていく可能性も大きいと考える。

熊本県の平山温泉ではデイサービスとして温泉入浴のプログラムを地域の方はもちろんその周辺からも利用者も対象として実施している。あわせて地域の食材や旅館の腕を凝らした味をふるまう食事サービスがあり、人気がある。福祉サービスを地域の持つ資源を活かしながら、従来の福祉サービスの枠やイメージを超えた健康的な地域活性化まちづくりに取り組んでいる。このような福祉サービスと温泉の連携も今後注目される。

4）観光資源としての温泉と国内外からの利用者

海外からの観光客や国内外からの多様な年代やニーズの利用者への配慮は欠かせない。観光地におけるおもてなしのUDが重要課題となる。多くの観光資源の中でも、「温泉」は日本独自の癒しの文化であり、利用者に満足していただくには、建築的な配慮のみならず、温泉水を利用した料理など温泉食文化を意識した食事や多言語に対応したサービスなども重要であろう。温泉地に求められる様々なUDの視点を大切にしたい。

国内外からの観光客に提供される情報の質と量、あるいはどこまでの情報を時期折々の変化に応じて適切に提供できるかが課題である。生活文化や風習の異なる海外からの利用者に温泉の利用におけるマナーや作法を理解していただける取組みも大切である。

多様な違いを超えてユニバーサルデザインとして、健康的な文字通り、「裸のつきあい」が自然体で生まれることが期待される。

（たなか　なおと）

図1　日本建築協会計画系分科会による全国温泉100選

日本各地には有名無名を問わず多くの魅力的な温泉がある。温泉100選は100人100色である。この図に掲載した温泉は独断と偏見で日本建築協会編集委員会の計画系のメンバーが選んだものである。

寄稿　日本各地の温泉から、温泉100選にこだわらず、ぜひ紹介したいとルポしていただいた温泉紹介です。（掲載順は温泉名の五十音順）

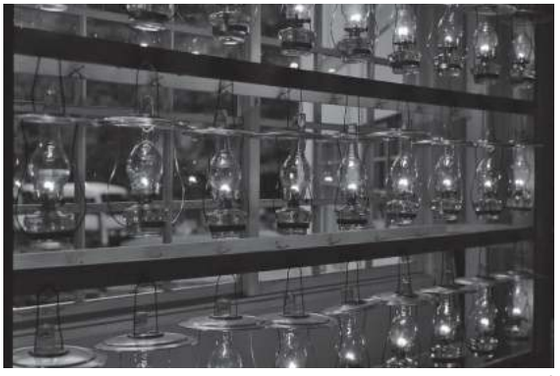
■ランプの宿の青荷温泉

田中 直人（島根大学）

青森県黒石市でまちづくりの集まりがあった後、地元黒石市の友人に案内していただいた。市の中心部からかなりの距離を車で走る。行けども、行けども緑濃い山間の中を走る。ようやくたどり着いた山の中の一軒宿。ランプの宿の「青荷温泉」だ。夕方の日差しが木々の木漏れ日と交錯する林間に、水音とかすかな温泉のにおいが漂う。季節はちょうど遅く開花する桜のシーズンだったので、暖かくなった風の通りもさわやか。まさに五感を体感できる温泉。季節の移ろいを堪能できそうな環境だ。新緑だけでなく、紅葉や雪景色も魅力的なことは想像に難くない。夜はまったくの闇、ボウッと灯されるランプの温かい明かりだけ。テレビや携帯電話もだめ。ほんとに何もないところに湧き出る秘湯に身も心も解放される。静かな時間が自分自身と会話できる。贅沢なひと時は湯めぐりと素朴な田舎料理で満たされる。中心部にある露天風呂は混浴。だれもいない深夜にチャレンジしたが、なかなか勇気がいるけど思い出深いものになっている。また来たいなと思ってからずいぶん年月が経ってしまった。今も昔の素朴な面影が残っていて欲しいと願っている。



木漏れ日に煌めく内湯



宿の夜を灯すランプ

■温泉初心者の秋保温泉体験

井筒 智子（日本建築協会事務局）

2013年春、せんだいメディアテークの館長に鷲田清一氏が就任され、記念のトークイベントが開催されると知り京都から出かけた。旅慣れない人が遠路遥々行くのだから気疲れもするだろうと、仙台駅から車で30分ほどの場所にある、日本三御湯のひとつ秋保温泉に宿をとってもらった。名取川沿いに露天風呂をもつ伝承千年の宿である。

着いて早速、浴衣に着替え、夕暮れ時の「河原の湯」へ。小屋のような脱衣所から観音開きの木戸を開けると、なみなみとした湯に誘われる。源泉かけ流しの湯加減、川からの薫風、小鳥の囀り、気分は極楽である。が、橋の上に目を移すと、男性らしき人影を発見。視線の方向は見えない。凝視していると背後から不意に声をかけられた。「あの、京都から？」驚愕して大きく頷くと、「やっぱり！キジンに見えたので」奇人!?　「仙台と京都って色というか、感じが似てますよねっ！」。そういえば鷲田先生のお話に、人口移動率がだいたい同じとあった。考え込んでいると、「お先に」と、湯をかき分けてあがって行かれた。部屋に戻って、知らない人から奇人と言われたと泣訴すると、「貴人じゃないの？」。以来、温泉地に行くたびにこの出来事を思い出し、心が落ち着かない。浩然の気を養うのが、思いのほか難しい質である。そのうちいつか、旅慣れた頃に、もう一度秋保温泉に行けるといいな、と思っている。

■チープな有馬温泉

内山 優子（日本建築協会事務局）

有馬温泉といえば自分にとっては高級な温泉旅館が建ち並ぶ場所というイメージがある。関西に住む人は多かれ少なかれそんな感じでは無いだろうか？　そこに「小宿とうじ」という、神戸市の施設を有馬温泉旅館協同組合が借り受けて運営する宿泊だけの宿がある。当然宿泊料も安い。

ある年の年越しをそこで過ごした思い出は、今も楽しい記憶として残る。

滞在期間中は外湯「金の湯」「銀の湯」が入り放題。宿にサービスらしいものはほとんどなく、食事も自分たちで好きなところで好きな時に食べる。チルド配達のおせちを観光案内所気付で送らせてもらってチェックインの時に受け取る。室内に冷蔵庫は無いけれど、冬の窓辺は十分涼しい。町歩きで見つけた蕎麦屋で年越しそばを食べ（帰宅して店名を検索したら評判の店だったと知って、美味しかった記憶がより強くなった。）、深夜まで街をうろうろする。ほどほどの行列に並んで除夜の鐘を突き、知らない人と新年の挨拶をする。持ち込みのおせちとお酒でお正月を迎え、自宅とは一味違う年末年始をゆっくりと過ごした。

チープで贅沢な有馬温泉だった。

■金泉、銀泉の有馬温泉

田中 直人（島根大学）

関西の奥座敷、有馬温泉。太閤さん豊臣秀吉も愛した有馬には今も多くの歴史的な遺跡が残る。有馬は歴史と自然環境豊かな温泉街として、多くの国内外からの観光客でにぎわっている。秋には瑞宝寺公園などで太閤さんゆかりの大茶会が開催される。小さい時から神戸っ子の私は六甲山を超えてよく温泉に連れて行かれたものである。特に新年の初湯は家族で有馬に行くことが多かった。谷あいの温泉街は急峻な坂道に面している旅館が多く立ち並ぶ。滑りそうな坂道にカラコロと下駄の足音が響く。金泉、銀泉。鉄分の多い金泉は赤茶色の有馬温泉特有のお湯だ。赤茶色のお湯にすぐ染まるタオル。父親の口癖は「直さん！タオルつけないで、染まってしまうぞ」だった。大人ぶった雰囲気でタオルを頭の上に載せて「いちー、にー、さーんー・・」と我慢して、透明な二酸化炭素泉、ラドン泉の銀泉に最後に入る。お土産は決まって炭酸せんべいである。なぜかしら割れた炭酸せんべいの味と香りが懐かしい。



温泉街の風景（坂道と金湯）



観光客でにぎわう足湯

■三陸の山あいの鄙びの湯・峠の湯追分温泉

森　裕史（石巻市復興事業部市街地再開発整備課）

数多くの温泉がある東北地方ですが火山がない北上山地にもいくつかの温泉があることは知られていません。私は石巻市の山あいにある峠の湯、追分温泉を紹介します。石巻駅から車で40分、南三陸町との境にある峠の途中に、無造作に置かれた旧車コレクションと共に一軒家の温泉宿があります。ここは北上山地の旧金山のわき水と建物を使って昭和23年に旅館の営業を始めたと言います。お湯は冷鉱泉でその無色透明の泉質は特に個性はありません。ただ床、壁、天井だけでなく湯船も榧（かや）の木で作られており、その風情は雰囲気重視の方にはお勧めです。この宿の特徴は志津川、女川という二つの漁港が近く、その地の利を活かして多くの海と山の幸が並ぶことです。そして朝食は名物サンマの塩焼き付きです。料理が豪快なので地元町内会、職場などの団体の親睦旅行にもよく使われており、私も震災の復興支援に来ている者として三陸の被災地めぐりの宿泊先にお勧めしています。



湯船まで榧の木で作られた湯小屋



旧車と本館入口



焼きサンマの朝食

■城崎温泉の戦略

守井　辰（日建設計）

温泉街を楽しむなら、城崎温泉をお薦めする。温泉街再生の成功事例だと思うからだ。成功の鍵は、狭いエリアに趣の異なる外湯を七つも分散してつくったことだ。筆者が経験しているのは、一の湯と御所の湯の２つだけだが、ともに好印象を持っている。特に御所の湯では、裏山の自然との一体化を意図した浴室空間が構築されていたことに驚いた。経験した外湯の印象が良かったら、他の外湯にも行きたくなるし、また城崎に来たいとも思うだろう。外湯体験が、城崎温泉の印象と評価を高め、リピート客を増やすことにつながるのである。

外湯は観光客をまちに誘う仕掛けでもある。外湯の周りには、土産物店や遊技場、飲食店があり、観光客は温泉とともにぶらぶら歩き楽しむことができるのだ。地域色のある店や個性的な店も並んでおり、天候さえ恵まれれば、散策は楽しい思い出になるはずだ。

さらに観光客は、各旅館が用意する浴衣と下駄で外にでてくるから、温泉街は日本的な情緒がたっぷりだ。カランコロンという下駄の音が、賑わいの雰囲気を盛り上げてくれる。

外湯を核としてこのような好循環をつくりあげた城崎温泉は、まちづくりにおける選択と集中（＝まちづくり戦略）のお手本になると思うのだが、いかがだろうか。



外湯の一つ（御所の湯）

■街全体が一軒の旅館になる黒川温泉

田中 直人（島根大学）

大地震や大雨洪水で被害があった形跡が少し見られたが黒川温泉はやはり元気だった。いまや全国有数の魅力的な温泉まちづくりの優等生として注目される。黒川温泉のセールスポイントは何といっても景観のまちづくりだろう。いきおい、ばらばらになりそうな各温泉旅館で一体性を確保し、豊かな自然環境に溶け込み、絵になる風景を醸し出している。街の中心を流れる田の原川といくつかの橋の風景、色彩を配慮した各種の案内サイン、個性的な各旅館の露天風呂など、野趣と癒しに満ちている。「街全体が一旅館、通りは廊下、旅館は客室」という考え方は、他の景観づくりプロジェクトに対しても大きなヒントを与える。交通の便の悪さが逆に秘境に魅力ある温泉街を創出させる条件になっている。入湯手形などのアイデアは、日帰り、宿泊客など多様なニーズに応え、個性とサービスの質を高める。2002年「街づくり協定」で温泉地の景観形成のルールを定めているが、心に沁みこむ個性的な景観は関係者のやさしい心配りのディテールによるところも大きいと思う。黒川温泉の街で多くの外国観光客にも出会ったが、この日本の風景はどのように映っているのであろうか。



広場の案内所と湯めぐり手形



黒川温泉街の風景

■二十歳女子３人と混浴した郷緑温泉の思い出

設楽 貞樹（安井建築設計事務所）

私がまだ学生のころ、父親が知人から岡山県に秘湯があるよと聞いてきて行ってみたのが郷緑温泉（ごうろくおんせん）である。

県北部鳥取県境近くの湯原温泉から西のほうに行ったところにある一軒だけの温泉宿。訪れたときにすでに相当な老朽家屋だったので、それから半世紀近く経っているし、なくなっているか建て替えられているかと思いながら、ネット検索したらまだ健？在。

写真を見て当時のことが思い出された。浴場はひとつしかなく混浴である。35度前後とかなりぬるめの湯に一人でつかっていると、60過ぎと思われるおばあちゃん（50年前の60歳ならおばあちゃんでいいでしょ？）が入ってきて、私の方を向いて一言「お兄ちゃん、そんながっかりした顔しなさんな。二十歳の子が３人入ってきたと思いなされ」

今でも混浴なのかしらん??

■八甲田山中にある由緒正しい一軒宿 酸ヶ湯温泉

守井　辰（日建設計）

酸ヶ湯温泉は、八甲田山中にある一軒宿の温泉である。300年以上前に開湯された由緒ある温泉で、昭和29年には湯治の環境が整った優れた温泉地として国民保養温泉地第１号の指定を受けている。泉質は酸性・含硫黄泉で、療養に適した温泉としての効用が認められているという（以上、HPより）。

筆者が酸ヶ湯温泉を知ったのは学生時代で、一人旅で乗った十和田湖から青森駅に向かうバスが途中で酸ヶ湯温泉に途中停車した時だ。その風格と由緒溢れる佇まいに強く魅せられた。その時から、酸ヶ湯温泉はいつかきっと訪れたい温泉になった。

その後に調べてみると、酸ヶ湯温泉は総ヒバ造の千人風呂でも有名だった。160畳の広さを有するというヒバ千人風呂はまだ混浴で、昔からの姿を留めているという。

あれから30年近く年月は経過しているが、酸ヶ湯温泉への思いは変わらない。八甲田の紅葉の時期に、酸ヶ湯温泉のヒバ千人風呂の白濁した硫黄泉にゆっくりと浸かる時が来ることを今でも楽しみにしている。



千人風呂（酸ヶ湯温泉 提供）

■酸ヶ湯にて

米井　寛（東畑建築事務所）

路肩には３ｍもありそうな雪の壁。降りしきる雪に視界を遮られながら、のろのろと車を走らせる。短い冬の日が暮れ始め、行程に軽い不安を覚えかけた頃、酸ヶ湯の建物群が目に入ってきた。国内屈指の多雪地帯である八甲田の山裾に、その建物は半身を雪に埋めながら堂々と建っていた。

300年ほど前、鹿に導かれて開かれた湯だという。内部にはヒバ千人風呂と呼ばれる大空間があり、ヒバの浴槽には文字通り酸っぱいなめらかな白い湯が満たされている。湯治客よろしく時間をおいて何度もこの湯に滑りこむ。深夜、ひとりになった。白熱灯のあかりが湯の上でゆらゆら揺れる。外にはしんしんと雪が降り、その背後には八甲田の巨大な山塊。ふと、静かな深い森にひとり身を置き、霊的なものと交信しているイメージにとらわれた。縄文文化が最後に花開いた地青森、霊場恐山、ねぶたの熱狂。根拠の希薄な連想かもしれないが、青森にはいわば日本の古層が露出したかのような、自然に分け入り霊的なものに触れる気配が充満しているようにみえる。その古層から湧き上がる湯に身を浸しながら、しばらく森羅万象の声を聞いていた。





■美肌の姫神の湯の玉造温泉

田中 直人（島根大学）

島根大学に赴任して、すでに５年。温暖で晴天の多い神戸に比して、当地では曇天や雨の日が多い。しっとりとした美肌美人はこの気候のせいだけでなさそうである。島根地域には宍道湖や中海の周辺をはじめ、多くの温泉地がある。その中でも姫神の湯、玉造温泉は安全性と肌への効果をセールスポイントにする。松江の宿舎で一人暮らしの私の楽しみのひとつは温泉めぐり。玉造温泉には春は桜がきれいな玉湯川河岸に立ち並ぶ老舗の旅館だけでなく、勾玉の形をモチーフにデザインされた日帰り温泉「ゆーゆ」がある。ここでは入湯のほか、昔ばなしカフェや出雲神楽公演など多彩である。おすすめは「安来節ショーどじょうすくい」。見ているだけじゃつまんない！みなさんご一緒に～あらえっさっさ～。老若男女が思わず、微笑んでしまう踊りにも山陰の地域に伝統的に根づいてきた温かい文化を感じる。温泉街の川べりの広場などでは、地元観光協会や旅館協同組合などの企画による多彩なイベントや広報PRによっても活気を呈している。



玉湯川沿いの温泉街風景

最後に少し、散歩がてら、少し足を運べば玉作湯神社など荘厳な佇まいの歴史空間に至る。心が洗われるお薦めしたいスポットである。



安来節ショーどじょうすくい
（一社）松江観光協会玉造温泉支部 提供

■温泉の主の洗礼を受けた道後温泉

松田奈緒子（大阪産業大学）

二十歳の冬、成人式には行かず、友人と松山を旅行した。もちろんメインは道後温泉だ。家族以外の人と温泉に行くのは、これが初めて。風格のある建物に恐る恐る入る。ランク分けされていたが、よく分からないので一番安いのにした。大きなお風呂が真ん中にあり、緊張しながらも楽しめた。だけど、その後がショックだった。自分の脱衣籠が床に放り出されていたのだ！常連さんの棚を使ってしまったらしい。ここでのルールを知らなかったことに恥ずかしくなったものの、何か割り切れない思いが残った。

後に、この話を夫にしたら、自分は「湯掛けじじい」に会ったという。湯船に入る人に大声で「湯を掛けろ」「湯を掛けろ」と言って回るお爺さんらしい。もうウン十年前の話だ。最近、別館が新オープンし、本館もリニューアルされるとのこと。また是非行ってみたい。



あの時の思いは鮮烈で、今でも家庭以外のお風呂では、一寸だけ、びくびくしている自分がいる。

■地中に眠る太古の植物を起源とする十勝川モール温泉

守井　辰（日建設計）

平成16年に北海道遺産に認定された十勝川温泉は、植物性温泉のモール温泉として知られている。この温泉は、十勝川湖畔の葦などの植物が長い時間をかけて堆積し、出来上がった亜炭層を通って湧き出たもので、植物性の有機物が多く含んでいるという。ドイツを中心としたヨーロッパのモール浴に使用される亜炭等の泥炭と同じ成分を含んでいるため、モール温泉と呼ぶようになったらしい。肌がつるつるになるという評判だ。

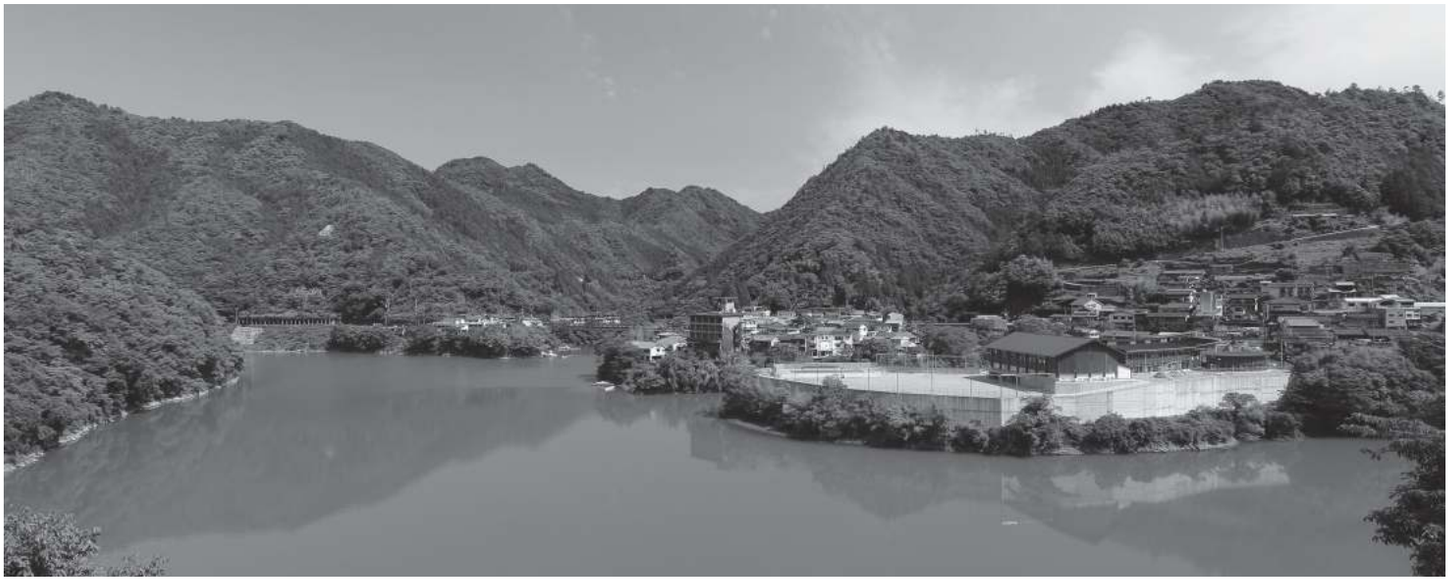
日本の温泉は鉱物性温泉が一般的で、植物性温泉は希少だという。北海道随一の畑作地帯で、雄大な風景が広がる十勝の大地は、地下にも希少なモール温泉の資源を有しているという。十勝の大地のポテンシャルに脱帽だ。

百聞は一見に如かず。是非とも十勝を訪れ、十勝川モール温泉を体験しながら、十勝の土地のポテンシャルを感じて欲しい。

■心と体に効くパワースポットの中の秘境温泉
―奈良県十津川温泉

勝山 太郎（日建設計）

日本最大の面積を誇る村、奈良県十津川村。96％が山で占められ、急峻な地形で車・バスでのアクセスに限定されますが、その分手付かずの本当に豊かな自然に出会うことができます。世界遺産「紀伊山地の霊場と参拝道」にも含まれるパワースポットとして、都会の喧騒から完全に離れることのできる神秘的な別世界が広がり、精神的な癒しを与えてくれると共に、温泉という大地の恵みを同時に享受できる、他にはない素晴らしい特別な場所です。



撮影：岡　靖久

■四季を彩る外湯めぐりの野沢温泉

田中 直人（島根大学）

若かりし時から、冬ともなればスキーに出かけたものである。そのホームゲレンデのひとつが野沢温泉である。変化にとんだ大自然の中のゲレンデやコースでは夢中に滑った青春（？）があった。日も暮れて宿に戻った時にブーツを脱ぎ、温泉に身を浸す時の解放感は格別。のどを潤す一気のビールも格別。野沢温泉には温泉街に点在する天然温泉100％のかけ流しの13か所の外湯が魅力的。いつしかスキーより、温泉が好きーというわけで、最初の日はスキー三昧でも、翌日からは外湯巡りを楽しむ。少し足が不自由になった母にも温泉村の情緒を味わってもらおうと付き添ったことがある。泊まった旅館のお風呂よりも、外湯を巡り、野沢温泉のシンボルとなっている「大湯」などが気に入ったようだった。

年々、スキーの後の外湯めぐりと美味しい野沢菜をいただきながら、こたつで飲むのもいい感じになっている。外湯をいい状態に維持管理する村の人たちの日頃のお世話に感謝する次第である。冬だけでなく四季折々の野沢温泉も魅力的である。



湧き出る熱湯で野沢菜などの野菜や卵を茹でる麻釜（おがま）



外湯「大湯」

■箱根の藤吾、温泉を凌駕する

松田奈緒子（大阪産業大学）

私の場合、旅の思い出は宿で決まると言ってもいい。箱根には「富士屋ホテル」をはじめ有名な宿が数あれど、心惹かれたのは村野藤吾の「ザ・プリンス箱根芦ノ湖」だった。置かれた調度、手すり、階段。ディテールの一つ一つに目が奪われるあまり、肝心の温泉については・・・はたと覚えていない。夕方の、朝の、霧深い湖畔から円形のホテルを眺めては満足感に浸った。

振り返ると、訪れた2年前は、連日、火山噴火のニュースが飛び交っていた頃だ。出かける前に、ちょうど箱根を舞台にした、元AKBの大島優子主演の『ロマンス』が上映されていて、予習をかねて観に行った。規制により、大涌谷での彼女がほおばっていた黒たまごは食べられなかったものの、宿がよかったので充分だね、となった。

箱根を一周し、最後に両親の新婚旅行の地でもある強羅でお茶を買ったら、くじ引きで2等賞に！さっき行ったばかりのポーラ美術館の入場券が2枚当たった。



■桃源郷の温泉「平山温泉」

大佐古和代（U-plan）

熊本県山鹿市には温泉場が2か所ある。山鹿温泉と平山温泉だ。山鹿温泉には近年伝統工法によって九州最大級の木造温泉として甦った元湯のさくら湯と国指定重要文化財の八千代座があり、中村玉三郎や市川海老蔵の公演の時には全国からの鑑賞者で賑わいをみせる。一方平山温泉は、山鹿温泉から車で5分ほど行ったところにあり、田んぼや畑の中に宿はポツン、ポツンと点在している。夕方になると農作業を終え燃やす草からの煙があちらこちらで立ち、宿を揺らす風景は桃源郷そのものだ。

子どもの頃休日にはよく家族で平山温泉へ出かけた。日帰りが出来る宿や共同浴場では朝から温泉を楽しむことが出来る。湯船には湯の花がポカポカ浮かんでいて、よく手ですくって遊んだ。湯は肌にまったりとまとわり、ぬめりが肌をつつむ。湯から上がると肌をはじくように湯が玉となり、姉と二人よくその玉を競い合ったものだ。

先日久しぶりに平山温泉を訪れた。最近は東京資本によりおしゃれな宿がたくさんできてきたようだが、町は相変わらず静かで田んぼではおじさんが作業をしていた。田んぼのあぜ道に咲く彼岸花の横には、子どもの頃訪れた温泉宿が、同じ姿でお客を招いていた。



山鹿温泉さくら湯



平山温泉の風景

■別府の贅沢な市営温泉－築80年の木造で五感を癒す

吉村 英祐（大阪工業大学）

竹瓦温泉は、別府の旧市街の裏通りに隠れるように建っている。その名前は、1879（明治12）年の創設時の建物が竹瓦葺きであったことに由来するという。現在の建物は1938（昭和13）年竣工の木造２階建てで、正面玄関の唐破風が存在感をいっそう高めている。内部の休憩所は白漆喰の真壁と格子天井で、戦前の雰囲気を色濃く残している。入浴料金が普通浴100円（砂湯1,030円）と格安なのは、ここが別府市営の温泉だからであろう。



正面玄関の唐破風屋根

休憩所から青色の暖簾をくぐって男湯に入る。脱衣室は地元の人たちの会話でにぎやかである。足元に気をつけながら９段の階段を下り、洗い場から見渡すと、壁際に水栓が一つもなく、置いてあるのは腰掛と洗面器のみである。掛かり湯をして湯につかるが、かなり熱い。だが、やがてじんわりと体に湯がしみてくる。しばし目を閉じ、全身で温泉を愉しむ。そこには、立派な温泉ホテルでは味わえない、贅沢な時間と空間が満ちあふれていた。



天井高が２間ほどもある休憩所

■国宝投入堂と三朝温泉

松田奈緒子（大阪産業大学）

「あ～、お湯に浸かりたい!!!」こんなに汗だくになったのは、大人になってから初めてかもしれない。大量の汗に加えて、すべって転んだ土もまとわりついている。国宝三徳山、投入堂への道は、想像よりずっと長く険しかった。数箇所くらい大変だろうと思っていたら、最初から難関続きで心が休まる暇もなかった。

そんな疲れを癒してくれたのが三朝温泉である。ラドンの湯が身に心に沁みわたり、夜は温泉街を楽しもうと出かけた。と言っても味のある目抜き通りが一本あるくらいだが、なかなか風情があった。

さて、驚いたのは橋を歩いている時に川辺にチラチラと裸が見えたことである。気にはなったが、のぞき見しているみたいで目を逸らした。「河原温泉」といって混浴露天風呂らしい。ルポを書くと分かっていたら、入っておいたのに。いや、でも、あれ程丸見えなのはさすがに…、と思ってネット検索したら、男性でも入るのに相当勇気が要るとのことであった。





温泉街のまちなみ

■大阪郊外の保養地・箕面温泉

守井　辰（日建設計）

箕面温泉は、阪急電鉄箕面線箕面駅から箕面の滝に向かう途中にある。施設は箕面観光ホテル（箕面温泉スパーガーデンを含む）１か所のみだが、同ホテルは宿泊施設と日帰り温浴施設以外にも演劇場やボーリング場、ゲームセンター、プール等を併設した温泉レジャー施設である。

箕面温泉が存する箕面公園は、古くから大阪近郊の景勝地として知られたところだ。明治43年に箕面有馬電気軌道（今の阪急電鉄）が開業した折には、箕面観光ホテルのあるあたりに約10万㎡の動物園も設けられたという。

箕面観光ホテルの建設は1968年（昭和43年）。今でいうアーバンリゾートホテルとして整備された理解していいだろう。設計は坂倉建築研究所の西澤文隆氏。圧迫感を嫌って斜面地に沿うように分節された形態やモダニズム建築の痕跡が残る外観が見どころである。



箕面観光ホテルの外観

ホテルやレジャー施設の経営は難しい。箕面観光ホテルも、平成24年に経営が行き詰ったが、翌年にスポンサーが見つかり、何とかリニューアルオープンしている。

移り変わりの激しい中で、都市郊外のレジャー地として生き残ることは難しいことだと思うが、身近な温泉保養地として是非とも持続して欲しいと思う。

■山代温泉の総湯

飯田　匡（大阪大学）

石川県加賀市周辺は山代、山中、片山津、粟津といった温泉が点在する北陸有数の温泉地である。北陸では外湯（共同浴場）のことを総湯と呼ぶらしいが、ここでは山代温泉にある総湯を紹介したい。「古総湯」と名付けられた総湯は、2010年に明治期の総湯をモデルに復元されたものである。浴室には九谷焼のタイルやステンドグラスが取り入れられるなど、当時の温泉としてはかなり斬新なデザインであった。再現された古総湯にはカランやシャワーはなく、石けん・シャンプーの使用も禁止で、昔ながらの入浴体験ができる体験型博物館としての側面もある。また、周辺は古総湯を中心として、旅館や商店がその周りを取り囲むような町並み「湯の曲輪」が残されており独特の雰囲気がある。こうした形態が残されている温泉地は全国的にみても珍しいとのことだ。古総湯の向かいには、湯の曲輪に面してもう一つの「総湯」がある。現代人としては古総湯のお湯につかるだけ、というのは落ち着かないかと思うが、こちらは石けんやシャンプーも使えるのでご安心を。ところで、山中、片山津、粟津の各温泉にもそれぞれ個性的な総湯がある。片山津温泉は山代温泉から車で15分ほどの距離にあるが、ここの総湯などは谷口吉生氏の設計である。いつも通りのシャープな造形で、まるで温泉には見えない。そんなモダンな総湯まで足を伸ばしてみると、ステンドグラスや九谷焼の浴室を見た明治の人たちの驚きを追体験できるかもしれない。



「明治期の町並みと総湯」加賀国山代温泉所全図 明治34年
金沢市立玉川図書館所蔵



「古総湯」と「湯の曲輪」

■温泉とケーキ・・・・・湯の山温泉

戸川 勝之（安井建築設計事務所）

三重県御在所山の麓にある「湯の山温泉」。数年前に家族旅行で行った場所だ。まあ、旅行の本当の目的は子供に行きたいとせがまれた鈴鹿のゴーカートだったけれども。この温泉郷、開湯約1300年の歴史を持つとのこと。この時は、町の入り口附近に一新しリニューアルオープンした温泉に立寄った。癒しと食の複合施設として温泉を核にレストラン・ショップ・宿泊棟を併設した施設である。計画には様々なクリエイター達が参画、新しいだけに時を経た風情はないけれども、どこか懐かしさを感じさせながら洗練したデザインがうまく協調され展開している。温泉は露天風呂のある湯と離れの宿に部屋湯、全て源泉かけ流し。竹林が施された庭を見ながら入る湯は硫黄のかすかな香りとほどよいヌメリ感が体を癒す。湯上り後は、巨大クッションが並ぶ休憩どころで一休み。癒しと食がテーマだけに、湯上り後のビールならぬ自家栽培された食材を使ったケーキを食す。温泉と美味しいケーキ・・・・ああ、幸せを満喫！



部屋湯



休憩どころ



外観

■湯布院、由布院温泉

大佐古和代（U-plan）

まだ遠縁が湯布院町に住んでいた頃、数回泊まりに行った。その家には温泉が引かれ敷地の別棟にお風呂があり24時間いつでも入ることが出来た。家の傍を走る汽車（九州では電車も汽車と言っていた）の音で目覚め、由布岳を覆う朝霧や田んぼの水路で乱舞する蛍に感動し、夏祭りの花火を２階の縁側から眺めた記憶は今も私の宝物だ。その頃は、田園風景が広がる町はどこか神秘的な湯治場で、シンボルの由布岳がただただ大きく見えた。

親戚も無くなりしばらく湯布院町へ行くこともなかったが、20年前父が亡くなった年、それまで一人で父の看病をした母の労をねぎらおうと姉と３人で由布院温泉を訪れた。すでに日本有数の温泉街となっており、通りにはおしゃれなお店ができ、老若の女性で溢れていた。

７．８年前から私たちは紅葉の時期に由布院温泉に毎年訪れている。１泊２日のドライブ。実家を出発し、菊池渓谷を横目にやまなみハイウェイを通り湯布院ICで降りる。道中赤や黄色の絨毯の道を走りながら私たちの気持ちは躍る。途中大観峰から先の一面のススキに運転の緊張をほぐしてもらい由布院に降りると、錦秋の由布岳が目に飛び込んでくる。「綺麗ねぇ」、母の感嘆の声を聞き微笑む姉と私。

熊本地震発生による交通規制のためこの２年間は行ってないが開通も随分進んできた。来年の秋は由布岳を眺めながらのんびり温泉に浸かってみようか。



由布岳をのぞむ

565

法令コーナー

マンション建替え法による容積率緩和特例を許可

中　敦史

枚方市役所都市整備部開発指導室開発審査課
建築グループ課長代理

はじめに

平成26年12月にマンションの建替え等の円滑化等に関する法律の一部を改正する法律（平成26年法律第80号。以下「改正マンション建替え法」という。）が施行され、耐震性不足の老朽マンションの建替えを促進するため、所要の措置が講じられた。そのうちの１つとして、特定行政庁の許可により容積率制限を緩和できる制度が創設された。

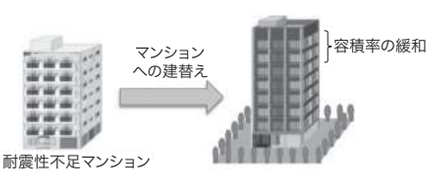
このたび枚方市は、近畿では第１号となる改正マンション建替え法第105条第１項に基づく容積率制限緩和特例の許可を行なった。

改正マンション建替え法とは

わが国のマンションのストック総数は約600万戸あり、そのうち旧耐震基準により建設されたものが約106万戸存在する。それらの多くは耐震性不足であると考えられるところ、平成29年４月時点での建替え実績は累計で約230件に留まっている。

マンション建替え法は平成14年施行されたものであるが、このような背景から、地震に対する安全性が確保されていないマンションの建替え等の一層の円滑化を図るため、マンション及びその敷地の売却を多数決により行うことを可能とする制度を創設する等の所要の措置が講じられたものである。

このように講じられた措置の一つが、耐震性不足の認定を受けたマンションの建替えにより新たに建築されるマンションで、一定の敷地面積を有し、市街地環境の整備・改善に資するものについて、容積率制限の緩和特例を、建築審査会の同意を得て特定行政庁が許可できることとしたものである。



許可手続きの流れ

本制度を利用したマンションの建替えを行なうにあたっては、まず前提となる、マンションの地震に対する安全性に係る基準に適合していないことについて、特定行政庁の認定（要除却認定）を受けなければならない。また、要除却認定マンションが現に存する時点で許可の事前協議を行なう必要がある。

なお、このほかにも改正マンション建替え法を活用した建替えは、事業手法によっては、マンション建替組合、マンション敷地売却組合等の都道府県知事（市の区域内にあっては市長）による認可等の手続きが必要となる場合があるが、容積率緩和特例許可には直接的に関係しないため、詳細については、本稿では割愛する。

許可事例の概要

今回特例許可を行なった建築物の概要は以下のとおりである。

■区域の概要

・用途地域：第一種住居地域
・その他の
　地域地区：第３種高度地区、準防火地域
・指定建蔽率：　60％（角地加算により70％）
・指定容積率：200％

■建築物の概要

・建築物用途：共同住宅
・敷地面積：2,106.47㎡
・建　蔽　率：　30.68％
・容　積　率：263.27％
・階数、高さ：地上15階　43.90m

■マンション建替型総合設計

容積率上限の算定は、改正マンション建替え法の施行に併せて改正された「総合設計許可準則」により位置づけられた「マンション建替型総合設計制度」による。

マンション建替型総合設計は、一般型の総合設計に比べ、接する道路の幅員要件に歩道状公開空地の幅員を合わせることができること、歩道状公開空地の最低幅員や最小面積が小さいこと、容積割り増しにかかる算定式の数値が高いこと等、制度の利用が容易になっている一方で、高さ制限の緩和が適用されないことが特色として挙げられる。

本事例では、敷地が幹線道路や河川に接しているため、高度地区や道路、日影による高さ制限について有利な条件であり、高さ方向に積み上げることが可能であった。また、接する２面の前面道路のうち、歩道のない道路に接して歩道状空地と広場を併せて配置し、まとまった公開空地を設けることにより、近隣の低層住宅から一定の距離をとることができ、かつ、近隣住民にも利用される空間をつくりだすことにより、市街地環境の整備・改善に資する計画となっている。

このことも踏まえ、計画された公開空地の位置、大きさ、性状に応じた数値により容積率上限を算定、容積率緩和特例許可を取得することにより、高速道路事業により縮小することとなった敷地に、建替え前と同じ戸数を確保することを可能としたものである。

課題

枚方市内の住宅は、建替え、改修の促進により、耐震化率が83.1パーセント（平成28年度）に達し、一定の改善が見られる一方で、耐震不足であると考えられるマンションは、木造戸建て住宅と比べると耐震化の進捗は芳しくない。

また、マンション建替えについて研究されている方に話を伺う機会があったが、今回の改正を行なっても、依然として、諸事情により住民の意思形成が困難である事例が多いとのことであった。

窓口レベルでは複数の相談が寄せられているが、許可に至ったのは本件のみである。本件の手続きだけが進行した理由として、敷地の一部を高速道路事業に供与することにより、既存建築物の建て替えが必要になったこと、マンションの住民が任意で耐震診断を行なうほど意識が高かったこと、現在の敷地で住み続けることを希望していたこと、また、そのような時期に改正マンション建替え法が施行されたこと等が挙げられる。

このように本許可事例にあっては、技術的なものよりも、状況的な要因が強く働いたようである。

おわりに

南海トラフ巨大地震が高確率で発生することが予想されるなか、本市としても昭和40年代から50年代にかけて急増したマンションの耐震性を向上させることは、地震による倒壊その他の被害から市民の生命、身体及び財産を保護することになるほか、容積率制限の特例許可は、既成市街地の活性化、都市機能の集約等にもつながるものである。

このことから、今後の枚方市における本制度の運用に際しては、単に耐震性を向上させることに対する特例許可ではなく、魅力あるまちづくりに寄与する一石二鳥、三鳥となる制度に育てていきたいと考えている。

（なか　あつし）

●中　敦史
1973年生まれ。1998年関西大学大学院工学研究科（建築学専攻）卒業。2009年枚方市役所入庁。

420
構造の頁

施設をつなぐ縁側モールとアトリウム空間
―阿久比町庁舎―

安田拓矢
株式会社安井建築設計事務所　東京事務所構造部

はじめに

愛知県知多郡阿久比町は知多半島のほぼ中央に位置する。名古屋中心部までは電車で30分ほどの距離でありながら、緩やかな丘陵が続き、夏には蛍が舞う自然豊かな土地である。

新庁舎は、『みんなの広場』を囲むように『新庁舎』と『アグピアホール』が配置され、それぞれの前面に設けられた『町民ホール』『ホワイエ』のアトリウム空間は、明るく開放的である。さらにその前面の『縁側モール』は、緩やかな丘陵に呼応するように施設をつなぎ『みんなの広場』へとつながっていく（**写真１**）（**図１**）。



写真１　建物外観

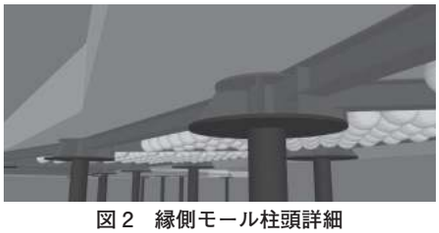


図２　縁側モール柱頭詳細



写真２　縁側モール施工状況写真

新庁舎の構造計画においては、それぞれの空間のもつ特性を活かすことを意図した。

緩やかな曲線を描く縁側モール

縁側モールは、単なる下階の庇機能だけでなく、上部に人があがり交流を深める場でもある。また施設群を緩やかな曲線でつなぎ、特定の方向性を持たない。

そこで縁側モールは、下からの見え方も意識し、ランダムに配置された円形のキャピタルプレート（900ϕ）を持つ鉄骨柱（216ϕ）に、RC造の球体ボイドスラブ（325mm）が直接取り付くような構造とした。実はボイドスラブ内に鉄骨梁（H150mm）が内蔵されるが、外観上はボイドスラブとキャピタルプレート付き鉄骨柱で構成されるシンプルなものとした（**図２**）（**写真２**）。

縁側モールの緩やかな曲線と鉄骨柱上部のキャピタルプレートが、方向性を持たず伸びやかに広がる特徴的なデザインを作り出している（**写真３**）（**写真４**）。

大地震時には、球形ボイドによりスラブの軽量化を図った上、内蔵鉄骨梁と鉄骨柱のラーメン構造により十分な耐震性を確保した。

施設を囲むアトリウム空間

『新庁舎』『アグピアホール』の前面に設けられた『町民ホール』『ホワイエ』は、カーテンウォールで囲まれた明るいアトリウム空間である。カーテンウォール際に1.8mピッチに配置された見付け幅125mmの鉄骨細柱で、屋根スラブの鉛直力を支持し、地震力は本体に負担させることで、柱を感じさせない透明性の高い空間とした（**写真５**）（**写真６**）。

庁舎は免震、ホールは耐震Ⅰ類

新庁舎は、大地震後に防災拠点としての機能維持が必要なため、基礎免震構造として計画した。直近の猿投－高浜断層、南海トラフ地震の模擬地震波を作成し、これに対応した免震構造としている。上部構造は、免震構造の特性を生かしたRC造＋PC梁のロングスパンの計画とし、フレキシビリティの高い執務空間とした。

アグピアホールは、大地震時の避難施設となることが想定されており、1.5倍の保有水平耐力を有する耐震構造として計画した。

●安田拓矢
1969年生まれ。1995年神戸大学大学院工学研究科修了。1995年㈱安井建築設計事務所入社。

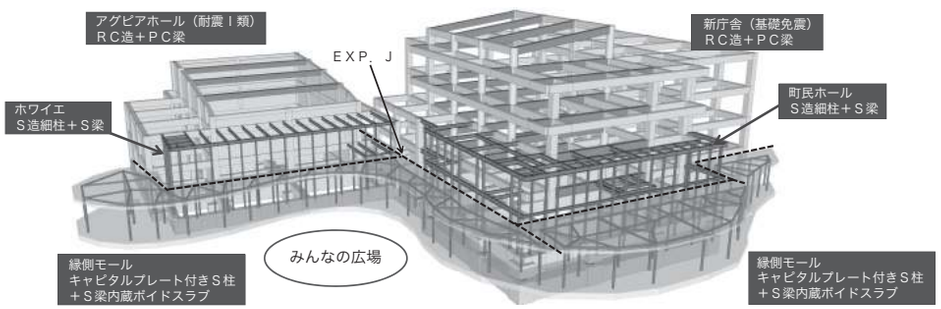


図１　全体架構イメージ



写真３　縁側モール（広場前）



写真５　町民ホール



写真４　縁側モール（アグピアホール玄関）



写真６　ホワイエ

連載
建築と社会を考える
NO.26

成熟社会の住環境づくり

鈴木克彦

京都工芸繊維大学教授

■はじめに

戦後の開発時代は人々の願望や空想を駆り立て、大量生産・大量消費・大量廃棄を繰り返してきた成長社会であった。その結果、資源枯渇や自然破壊など21世紀に大きな社会的負担をもたらしてしまった。そして今世紀に入り、わが国も成熟社会をむかえ、開発や経済成長一辺倒の考え方を改め、新しい豊かさを求める社会を創生しようという考え方が広まりつつある。成長社会の経済システムから脱出するための方向転換として、「脱成長」(Decroissance) という考え方も注目されている。

【成長社会】	【成熟社会】
経済効率重視	→ 精神・生活の豊かさ重視
所有価値の重視	→ 使用価値の重視
自然地の開発	→ 自然地の保全、再生、創出
巨大、拡大指向	→ 身の丈にあった規模
画一的、標準的な施策	→ 地域独自の施策
行政まかせ	→ 住民主体による取り組み
自己中心	→ 人と人のきずな

建築学や都市計画学の研究も、私が大学で研究を始めた頃はまだまだ新しく建築を造ることを前提としたものが主流であった。そんな状況の中、博士論文の研究テーマについて考えた時に思い立ったのは「建築とは竣工してからが重要である」ということであった。それ以来40年間、一貫して維持管理を含めた建築・都市計画のあり方を追求してきた。そのような視点で進めてきた近年の研究プロジェクトの成果を紹介しつつ、成熟社会における住環境づくりのあり方について論じてみたい。

■郊外住宅地の住環境マネジメント

私が研究生活を始めた1970年代後半は、大都市の郊外に大規模住宅地が次々と開発されていた時代である。その際に、将来の住環境を良好に担保するために「建築協定」が締結された住宅地が全国に広まった。建築協定制度は建築基準法の第69条から第77条に定められているもので、地区住民の全員合意を確保できれば、その地域にふさわしい独自の建築ルールを定めることができる制度で、現在では全国に約3千地区存在している。この地域ルールを有効に活用するために、地区住民たちは建築協定運営委員会を組織し、運営委員会が中心となって個性的で魅力ある住環境を保全・育成している。

また、建築協定には有効期限があり、期限に達した際には協定内容を見直し、地域事情や社会情勢に配慮して制限内容を変更できることも大きな特徴である。協定違反を未然に防止するための事前協議制度（建築確認申請前に工事内容を協定運営委員会に届け出、審査する仕組み）や日常のパトロール活動、協定未加入者のための合意づくり活動等も展開されており、建築確認制度では十分にチェックできないきめ細かな対応が実現できている。



写真1　住環境が成熟した建築協定地区（吹田市）

この建築協定制度に着目した研究を続けて約35年となるが、建築協定地区も成熟社会を迎え、開発時代とは異なる新たな課題に直面している。当初は建築協定への理解を深めることや協定違反の防止等が主な課題であったが、今日では建築協定の更新手続きや協定運営の担い手の育成等が新たな課題になっている。協定の有効期限に達して更新する際には、改めて全員合意を確保して協定の認可申請をしなければならない。このことが高齢化が進行した成熟社会での大きな障害となっており、住民合意を確保できずに更新を断念した地区も多い。協定運営を引き継ぐ次代の担い手不足も、世代交代の時期を迎えて深刻な問題となっている。

しかしながら、このような問題を克服して永く建築協定を継続している地区では、良好な住環境を持続的に維持・創生しているとともに、永年にわたる住環境の管理運営で養われた豊かなコミュニティが育成され、地域の課題を自ら発見し、解決していく能力を備えた「地域力」も醸成されている。自ら住む住環境を大切にしたいという住まい手自身の思い入れに支えられ、成熟社会でのあるべき地域の姿を示していると言えよう。

この建築協定の運営活動には「協同性」、「自律性」、「規律性」という三つの側面を持っている（**図1**）。地域紛争等を契機に地区住民

鈴木克彦

1953年静岡県生まれ。
1976年大阪大学工学部建築工学科卒業。1978年大阪大学大学院修了後、京都工芸繊維大学工芸学部住環境学科助手を経て現職。工学博士（大阪大学）。一級建築士。専門は、建築・都市計画学、住環境計画学。日本マンション学会副会長、NPO法人エコデザインネットワーク副理事長なども務める。
2004年に日本建築協会「建築と社会」賞（論考）、2008年に日本建築学会賞（論文）、日本マンション学会論文賞、2010年に都市住宅学会賞業績賞、日本建築学会技術部門設計競技「優秀賞」などを受賞。
著書に「現代建築学　建築計画 1、2」（共著、鹿島出版会）「建築協定の運営とまちづくり」（鹿島出版会）「マンション学事典」（共著、民事法研究会）など。

が自主的に締結した合意協定地区では、住民意識が当初から高く、「協同性」、「自律性」が高くなっている。一方、「規律性」は宅地開発事業者等が分譲前に締結した一人協定地区で高くなっており、協定運営年数が長い地区ほど高まっている。ただし、住民意思を再確認する手続きを踏まえて建築協定を再締結した一人協定地区では、合意協定地区のように「協同性」と「自律性」も高まる傾向がある[文1)]。

このような結果は、成熟社会にふさわしい住環境マネジメントを持続的に展開していくためには、建築協定のような地域ルールをいかに円滑に更新し、地域に定着させていくかが重要であることを裏付けており、その支援の仕組みが求められている。

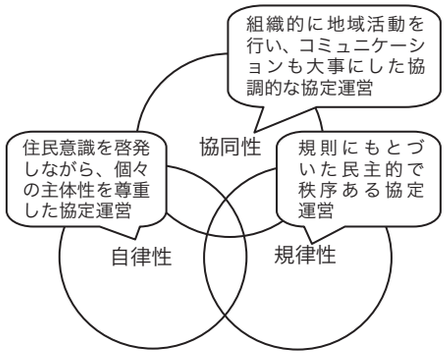


図１　協定運営活動の三側面

■人口減少社会における団地再生

高度成長期に大都市の郊外に大量に建設された大規模団地やニュータウンでは、その住宅ストックの再生期を迎えている。高経年の住宅団地は、従来は建替えによる再生が主流であったが、これまでの建替えで繰り返されてきた容積増による事業手法は、人口減少社会では特効薬の効能を失いつつある。特に、郊外の大規模団地では戸数を増やすような方法は意味をなさなくなりつつあり、成熟社会を見据えた多様な改修方法をミックスさせた再生手法の開発が求められている。

そのため筆者の研究室では、UR都市機構等からの協力を得て解体前の住棟を借用し、空き家となった団地の住戸内を改修して再生するというプロジェクトを2007年から継続的に実施してきた。最初のプロジェクトでは、1962年に建築されたUR西武庫団地の住戸内部を学生の手で自主改修し、建築廃材を可能な限りリユースすることで高経年団地の再生の可能性を探った。引き続いて、2008年にはUR浜甲子園団地、2010年にはUR枚方市中宮第一団地において同様の改修実験を実施した。こうした自主改修実験をつうじて、新たな居住者ニーズに見合ったストック活用の可能性を提示することができ、老朽化団地の有効な再生手法のひとつとして将来性が見いだされていった。

そして、2008年からはUR都市機構との共同研究により、1960年に建設された向ヶ丘第一団地（堺市西区津久野町）において住棟を丸ごと改修する実証試験に取り組むことになった（～2011年）。2008年５月の技術提案公募において筆者を含む戸田建設グループが選定され、この団地を舞台に増築や減築も併用した住戸空間の改修と、新たな共用空間の創出によるコミュニティ環境の再構築に重点を置いた再生実験が実施された（**写真２**）。



写真２　住棟改修されたUR向ヶ丘第一団地

再生にあたっては既存環境の良さを最大限に継承しながら、魅力ある集住体に再生すべく多様な住棟改修を実施したが、住宅の狭さは隣戸との２戸１化や上下階を一体にするメゾネット化を実施することで改善している。また、アクセスの不便さから空き家になりがちな５階建住棟の上部２層を全面的に減築する施工も行った（**写真３**）。

２層減築した結果、IS値の足りない住棟を耐震補強工事することなしに耐震性を確保することができ、来場者へのアンケート調査でも、景観の改善や空間価値の向上に対して減築の効果が検証できた[文2)]。



写真３　上部２層減築による住棟再生（右側）

■成熟社会におけるマンションづくり

一方、都市住宅としてすっかり定着した分譲マンションにおいては、大規模改修や建替えが事業的に難しいケースが多いとされることから、第３の新たな選択肢として、マンション及びその敷地の一括売却を区分所有者の多数決で行うことができる「解消制度」が新たに創設され、注目されている（**図２**）。

現行は耐震性能が劣るマンションのみに適用が限定されているが、わが国も「いいものを造って、きちんと手入れして、長く大切に使う」ストック型社会を迎えている。この解消制度の適用範囲を拡大し、ある一定の年数を経た老朽マンションへの適用や建物の残存を前提とした区分所有権解消が可能となれば、幅広く有効活用されることが期待できる制度となろう。

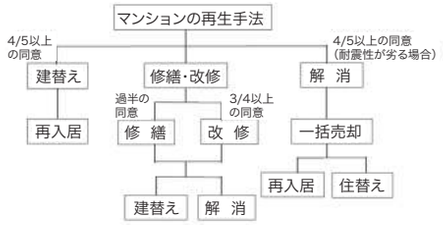


図２　分譲マンションの再生メニュー

また、マンションはもはや周辺地域と一体となった街区を形成している。災害時の緊急避難拠点や子育て支援施設等としての役割も期待されるようになっており、指定容積率を緩和して保育施設等の併設を促す取り組みも促進されている。成熟社会を迎えたこれからは、周辺地域と一体となり、地域社会に貢献するようなマンションづくりが求められている。

地域社会と一体となったマンション居住の一例として、マンションに住む新住民が祇園祭を担うことをきっかけに新旧住民の交流が活発になった地区がある。1200年もの伝統をもつ京都市の祇園祭では山鉾の巡行が主要な祭事として知られている。その山鉾町のひとつである鯉山町（中京区）では、町内にマンションが建設（1998年）される際にマンション住民の祭事への関わり方が議論され、人口減少が進む将来対策として新住民も祇園祭を担うことが義務づけられることになった。そして、マンション住民を次代の祭の担い手として積極的に受け入れた結果、巡行お供やお手伝いに参加する住民が着実に増えることになった。１ヶ月以上にもわたるさまざまな

祭行事を共に仕切ることで、結果として新旧町民の豊かな絆を創り出すことができている（**写真４**）。いまや、町内の主要行事の参加者はマンション住民が半数以上を占めるようになり、町内にとって欠かせない人材となっている。

地域社会と一体となったコミュニティ活動を展開していくためには、地域の資源を活かしつつ「暮らしの価値」を共有できるような仕組みを構築していくことが何よりも大切であることを物語っている。



(a) マンション前に一同に会した巡行参加者



(b) マンション集会室での袴の着付け

写真４　マンション住民が参加する祇園祭

■地域再生につながる空き家活用

わが国の人口と世帯数が減少傾向であるにもかかわらず、毎年90万戸前後の住宅が新築されている。その結果、管理不全となった空き家はますます増加し、空き家総数は約820万戸（13.5%）にも達している（総務省平成25年度住宅・土地統計調査）。このような深刻な事態を受け、５年ごとに見直されている「住生活基本計画」（全国計画）においても、空き家や既存住宅ストックの利活用が重点的な目標になっている。

建物が老朽化し、床面積も狭い住戸は居住性が劣り、空き家になりがちである。その空き家を有効活用する方法としてさまざまなアプローチが模索されているが、韓国釜山市では、朝鮮戦争後の避難民が住んでいた山肌の集落をアートプロジェクト「夢みる釜山のマチュピチュ」を展開してコミュニティ再生を実現し、釜山の代表的な観光地にもなっている（**写真５**）。



写真５　釜山市甘川洞文化村

住宅が余っている時代にあっては地域のニーズを反映した空き家改修を施し、住宅以外の活用を図っていくことも必要である。そのモデルケースとして、研究室で取り組んだ再生事例を紹介する。

■古民家の再生

少子高齢化や人口減少が進む中、管理不全となった空き家の増加は地方都市でより深刻化している。その中には、古来からの木造建築の技術が詰まっている古民家も多く含まれている。このような古民家を既存集落のコミュニティ維持やインバウンド対策、地方移住や地域振興などに利活用する動きが各地で広まっており、開発許可制度の弾力的運用を可能とする制度改正もなされている。そのような状況の中、兵庫県洲本市との域学連携事業により、市に寄贈された築100年を超える古民家（明治42年棟上げ）を学生が主体となって再生するプロジェクトに取り組んだ（2015～2016年）。

本プロジェクトは、30年も空き家として放置されていた格式ある古民家の再生案を本学の学生が立案した上で実際に改修工事も施し、地域の魅力発信拠点となるような空き家活用の可能性を探ったものである。敷地内は母屋、蔵、長屋門からなっており、これらの建物群の内装と設備機器に建築資材のリユースや地域産材を活用しつつ改修を施し、地域住民に開放される施設に再生した（**写真６**）。また、『里床』と名付けたウッドデッキを母屋から長屋門へと張り出す形で新たに設置し、美しい田園風景を体感できる場を創り出した（**写真７**）。

土壁造の蔵の改修にもさまざまなアイデアを凝らした。蔵には窓がなく、入り口も入りにくくなっていたことから、入り口段差を改修するとともに、南側一面を思い切ってガラス張りに変更し、収納空間であった蔵をあえて地域に開放することで、幅広い用途で使えるようにした（**写真８**）。蔵の内部には空き家に残されていた農機具やミシンなどを展示するとともに、地域住民たちのワークショップの場としても活用できるようにしている。明かりが灯された蔵は癒し感が溢れた地域のランドマークとして生まれ変わり、地域住民に親しまれている。今後は地域住民やNPO等の活動拠点になるとともに、地元農林水産物などの情報発信拠点や人材育成に資する拠点として有効活用していくことが期待されている。



写真６　再生された古民家（洲本市五色町）



写真７『里床』と名付けられたウッドデッキ



写真８　地域に開放された蔵

■賃貸アパートの再生

次に紹介するのが、東大阪市にある築46年のRC造の賃貸アパート（昭和46年竣工）の空き室再生である。対象となったアパートは、ラグビーの聖地ともいわれる花園ラグビー場の東に位置するが、庁舎の移転を契機に地域

全体の賑わいは失われつつあり、空き家率も高い。そのような状況の中、オーナーの協力により、空き室となった１室をアパート住民や地域向けのコミュニティスペース兼活動拠点として整備することとなった。

改修にあたっては「廃材などを用いた、ローコストなリノベーション」を目標とし、さまざまな用途での活用を視野に入れ、学生が主体となって設計・施工を行った。竣工を記念した交流会では地域の子供たちも偶発的に参加して賑わいを見せ、今後の有効活用に期待をもたらす契機となった（**写真９**）。



写真９　住民交流スペースとして再生された空き室

住宅宿泊事業法が昨年公布され、本年６月に施行されることになったことから、空き家を活用した民泊事業に拍車がかかることが期待されている。地域再生につながるような空き家活用を展開していくためには、不足する地域施設を補うような改修を施し、地域社会の活性化に貢献していくという視点を忘れてはならない。

■インクルーシブデザインによる住環境づくり

成熟社会を迎えた今日では、デザイン手法にもこれまでとは異なった発想が求められている。20世紀後半の大量消費社会では、売れるニーズが最も高い商品を企画・デザインする戦略が支配的であった。この現象は住宅市場でも同様にみられることであり、これまで標準的な家族を想定した画一的なデザインの住宅が大量に造られてきた。

こうした「マスハウジング」が広まった結果、似たりよったりのデザイン・間取りの住宅が氾濫し、現代の多様化したライフスタイルとの齟齬が生じてしまっている。成熟社会においては、マスハウジングの過ちを繰り返すのではなく、多様な人々のニーズや思い入れ、ライフスタイルや文化を包含（インクルード）する取り組みを大事にしたハウジングが求められる。ストック型社会の不動産は、一般受けする物件ではなく、魅力的な個性ある物件が流通の中心となっていくであろう。

そのような社会背景の中、年齢や能力、性別、経済、居住環境、人種等のさまざまな社会的排除に対処する「社会的包摂（Social Inclusion）」という思想が重要視されるようになり、その政策課題を反映する形で「インクルーシブデザイン（Inclusive Design）」というデザイン手法が誕生している。その理念は地域や文化、社会状況などの違いを超えて障がいをなくしていこうとする流れの一つであり、広範な社会的排除の問題をデザインによって解決していく点に特徴がある[文3)]。

標準的な生活像を想定してきたこれまでのハウジングとサービス開発の姿勢では、想定された生活タイプに合わない人々は特殊なケースとして取り扱われてきた。インクルーシブデザインは、標準的なユーザーを対象とした従来のデザインプロセスから排除されていた多様なユーザーをデザインプロセスの初期から巻き込むデザイン手法であり、そのアプローチは「極端な例を理解することで主流となるイノベーションが生まれる」という発想である（**図３**）。その点で、インクルーシブデザインによるハウジングは、ストックマネジメントが主流となる成熟社会において、多様な解決策を前提としたハウジング手法の有効な手がかりとなるであろう。寛容（Tolerance）の精神を大切にした「インクルーシブハウジング」の時代の到来である。その際に主役となるのは、デザインパートナーとなる住民である。

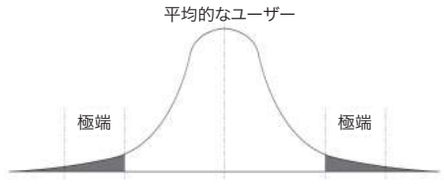


図３　インクルーシブデザインの理念

■成熟社会における住環境の価値

不動産の資産価値は、立地場所や建物の築年数、広さ、維持管理状況といった「もの」としての不動産価値で全てが決まってしまうものであろうか。大切な住環境の価値がこのような市場原理によって評価されてしまうならば、不動産の価値は経年とともに低下し、必然的に空き家化も進行していくであろう。しかし、不動産が過剰となり、「負動産」とも言われている成熟社会では、市場原理では評価できない大切な価値を創り出すことが必要となる。とりわけ成熟した住環境では、長年の居住で人々のつながりが醸成され、さまざまな人材が育っている。潜在する「コミュニティ力」を発掘し活用すれば、十分に豊かな住生活を過ごせる住環境に再生できる可能性を持っていよう。

つまり、住環境の価値を持続的に維持していくためには、何よりも「コミュニティ力」を大切に醸成していき、不動産の価値が「もの」としてではなく、時間の蓄積で得られた「暮らしの価値」として評価される社会システムを醸成していくことが大切となる。「場づくり」「人づくり」「仕組みづくり」が日常の住環境管理において相互に作用していくことで「暮らしの価値」が時間とともに増大し、お金では換えられない大切な価値を共有することができるのである。永年にわたる住環境の管理運営で養われた大切な価値を守り育て、良好な住環境と豊かなコミュニティを持続的に維持・創生していくことが成熟社会でのあるべき姿である。

■おわりに

モノを大量に生産・消費することで成長を目指すという従来の発展モデルに執着し続けようとするならば、人口減少社会の見通しは暗い。しかし、地域自立経済や長期的利益安定の経済システムに支えられ、お互いに知恵を出し合い、協調しながら進化していく社会に醸成されたならば、成熟社会の未来は明るい。

成熟社会における住環境づくりとは、お金では換えられない価値を共有し、人々の絆でもって守り育てていく暮らしのデザインであり、多様な人々のニーズをインクルードする姿勢を大事にした取り組みである。

（すずき　かつひこ）

参考文献
1）鈴木克彦「建築協定の締結経緯と運営実態からみた持続的コミュニティの醸成プロセスに関する研究」日本建築学会住宅系研究報告会論文集、第２号、pp.177～184（2007.12）
2）本誌1016号（2011.1）
3）ジュリア・カセム他「インクルーシブデザイン」（学芸出版社、2014）

中村昌生・池田俊彦対談①

茶室

～究める道を歩んで

半世紀以上にわたって和風建築・茶室の伝統の追究に打ち込まれ、茶匠の心境に迫るため自らも茶室の設計を手掛けられた京都工芸繊維大学名誉教授の中村昌生さん（90）。今回、その後継者として指名されましたイケダ数寄屋研究所所長の池田俊彦さん（62）との対談がシリーズとして実現の運びとなりました。さて、対談の第１回では愛弟子の池田さんを前に、これまでの自分の研究人生を顧みてどのような考え、思いを語られるのでしょうか。（2017年10月23日、京都伝統建築技術協会で）

人前で話すこと

中村：私がよそに講演に行ったりし始めるのが昭和30年代。助教授になりたてのころ、「大阪倶楽部」の昼食会に招かれ、スピーチをと言われたのが始まり。年でいうと30代半ばごろから。あちこちに講演に行きましたが、しかし、建築家・建築技術者の人に話を求められたことはほとんどありません。私自身も別にしたいと思ったことはあまりありませんでした。

誰に話していたかというと、一般の市民や美術同攷会、林泉協会、庭や美術に関心のあるサークルの人たちだった。そして、私の研究そのものを話す相手は、ほとんどお茶の世界の人ばかり。したがって建築は素人であるお茶の人に、建築である茶室について理解してもらうためずいぶん心を砕いた。当時はスライドもなかったから、自分で掛図を書いて貼り付けてやったものです。

大学では、私は木造教育がなくなっていくなか、講義は建築史、建築意匠をやっていました。当時、土曜の半日をもらって文化財などの修理の現場の見学を行っていました。その頃学生だった人もそれだけは面白かったと言います。少なくとも学生が木造に接する唯一の機会でした。今の建築教育から締め出された木造建築、日本建築というものの一端を建築史の演習で若干、補うことが出来たと思っています。

藤井厚二の研究

中村：建築意匠の講義をやっていたころ。私の恩師である藤原義一先生が京大の天沼俊一教授の下で研究をしておられた。その恩師から藤井厚二のことをよく聞かされてね。あまり恩師と藤井はそりが合わなかったようでしてね。藤井は貴公子で金持ち、自分のお金で実験住宅を建てるような人でしたからね。

しかし私は藤井の本を読んで、聴竹居、中田邸などの住宅にひかれてよく学生を連れて見学に行った。「数寄屋建築集成」（小学館）には、聴竹居はもちろん横の藤井式の茶室、中田邸の座敷なども載せた。その頃は、大阪芸術大学でヴォーリズの研究で一家をなした山形さん（政昭教授）などと見て回りました。楽しかった。ある時、松ヶ崎の堀野邸が潰されるという情報を山形さんが聞きつけてきて、交渉の末、最後を見学できました。

そんなことで藤井厚二の住宅とかは、私の



対談に臨む中村先生（右）と池田俊彦さん（京都伝統建築技術協会で）

しかし、私自身が研究していることは学校ではひと言も喋らなかった。大学院へくる人にも茶室の研究をやれとは誰にも言いませんでした。今現在、茶室の研究をやっている人もいるが、大学院の頃は皆違うテーマで論文を書いていました。茶室の研究は勧めなかった。これはやりにくい。意味があるかもしれないけれど、建築史的に茶室を研究するだけでは茶室に肉薄することはできないからです。角度から色々と勉強させてもらった。

ところが50代になってからだが、ある雑誌の座談会で「中村は藤井の作品なんかは関心ないんだろう。おそらく見たこともないだろう」といったことが書いてあった。「何故そう思ったの？」って、聞いてみたかったが、ああ、世間からは中村はこんな風に見られているのかと思った。おそらくは僕は茶室だけをやっていて、特別な論文を書くわけでもなく

ものづくりもやっている、といった研究態度が世間にこう思わせたのでしょうか。

でも私は、世間の評価を求めなかった。なんと思われても良かった。

堀口捨己先生と理解者

中村：ただ、理解者があった。東大で建築史の教授をしておられた稲垣榮三さんでした。彼は東大三羽烏（稲垣、伊藤ていじ、村松貞次郎）の一人だ。稲垣教授は堀口捨己先生の講義を聴き堀口先生の建築家としての“高さ”を深く知っておられ、畏敬の念を抱いておられた。

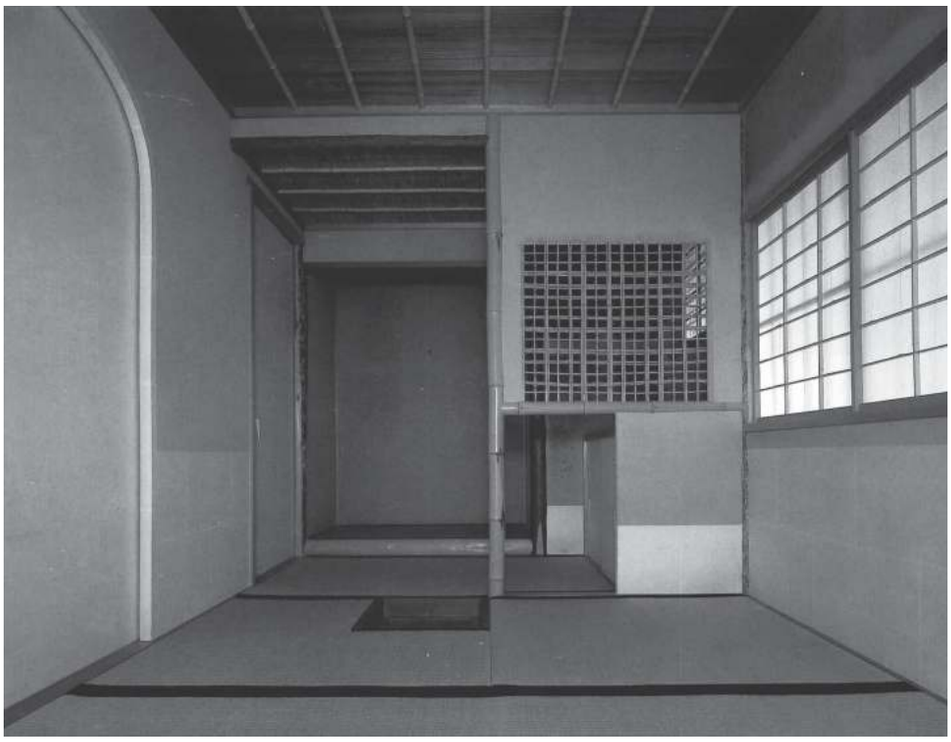
図らずもその稲垣さんと共に堀口先生の仕事を手伝うことになった。それは東京国立博物館に所蔵されている一橋の徳川家伝来の「起し絵図」復刻という仕事だった。私にとってはこれは大きなチャンスだった。そこで稲垣さんと肝胆相照らす間柄となった。なかなか稲垣さんという人は私の心底を理解して下さっていた。私はいわゆる建築史家の時代の動向からは外れてはいるが、稲垣さんは「彼（中村）が何をやろうとしているのか」を見抜いていた類まれな人だった。

堀口先生に師事できたきっかけは、たまたま主婦之友社から「茶の湯全書」が出版されることになり（1959年）、その時、指名を受けたのが最初でした。この時まだ先生にはお目にかかっていませんでしたが、これが私の処女作となり、起し絵図の仕事にもつながっていきました。

如庵と元庵

中村：起し絵図の仕事がほぼ軌道にのった頃、大磯の如庵を犬山に移築する話がありました。全体の指導監督は堀口先生でした。先生からは私が京都におるものですから、自分が東京から来るより近いから「せいぜい来てくれ」とおっしゃっていただきました。

完成後「有楽苑」では茶会が催されるが如庵は使えない…ということで、茶会に使える茶室をもう一棟建てようという計画が生まれた。「それなら新しい茶室は有楽に関係あるものを」という先生の意見で、先生も好んでおられた、有楽が大阪天満の屋敷につくった茶室を復元することになった。ところが、先生は図面を書くとおっしゃらない。「中村が書くならやってもいい」ということになったのです。それで事が進んだ。先生からは一箇所の訂正だけで順調に出来上がりました。（この茶室は元庵と命名されました）





元庵内部（上）と外観（下）

これが昭和40年代後半でした。こうしたものづくりをやりたいというのは、（実は）私が当初から望んでいたことでした。

「草」の建築

中村：私がなぜ茶室を研究するのかと言うと、日本建築の伝統、和風の不易の伝統とはなにかと…。日本建築には社寺等様々あるが、それらの底を貫く伝統を探り当てたい…日本の建築を「真・行・草」に分けると、草の建築が一番研究されていない。草の建築を通じて「和の伝統」を掘り下げてみよう、と考えた。そこで桂離宮と出あい茶の湯の文化と建築とのつながりに注目したのです。「草」の建築には木割がないのです。茶の湯というすごい文化がある。そこで茶の湯を考えると、茶室は茶匠がつくるもので、これは建築技術者ではなく芸術家でもない。お茶をやってる人が自ら茶室をつくる。彼らはどうやってつくるのか、その秘密を探るには、茶匠の、人を知らなければならないと考える。有楽、遠州、織部たち、その人の立場、考え方、哲学、色々なものの中から彼らは茶室と言うものをどのように結実させたか。

私は日本建築の伝統を究めたいというために茶室の研究を思い立ったのです。だから、論文を書こうという気持ちはなかった。むしろお茶の雑誌に書いていました。周りからは「茶室の研究なんかしても学位は取れんよ」と、よく言われたもんです。「学会にでも発表せにゃ、万年助手になる」とも言われました。それでも茶室から離れることは許せませんでした。ある時、連載中の雑誌の編集者が来られ、「京大の大先生が、あなたのことを心配しておられる。雑誌なんかに書いてちゃダメだ」と言っておられる。この先生は僕のことに関心を持って下さっていることを知り「ああ、そうか！」と。連載し始めた雑誌の仕事をやめて学位論文を書くことに専念しました。

自分でもつくりたい

中村：茶室の研究には、「美術史の方法に学ぶべきところが多い」、そう思いました。私の尊敬していた毛利久（仏像彫刻研究）、土居次義（障壁画研究）両先生にその研究法を聞くと、まず実物を見る、それからそれに合わせて文献を調べ、作者について調べるだけ調べ、とにかく実物から離れないという研究だった。これにひかれて自分の研究も「これでやろう」と考えました。

茶匠についての研究、茶匠はなぜこの茶室をつくったのか、この作風になったのかを掘り下げていこうとすると、自分でも体験したいと思い至った。茶匠がやってきたことを体験しよう、寸法はどうやって決めているのか、実際にやってみてその茶匠の跡を追うこともできる、と。

そこでチャンスがあれば自分でもつくりたいと思うが、自分の費用でつくるわけにもいかないから、依頼されなければチャンスは生まれない。不思議にチャンスが出てくる。大阪万博のころ、万博協会とつながりのある先生から、「公園の中に茶室をつくれと言っておいたから、依頼があればやりなさい」と。この話は結局、実現しなかったが、その後ちょいちょいといろんなことを頼まれました。

昭和58年には（茶室設計の）最初の作品集「茶苑の意匠」を出した。序文は私の仕事を理解して下さっていた稲垣教授にお願いしました。

そういうことで、私がものづくりをやっていることは世間に知られていきました。

山形の茶室

中村：山形市では茶室をつくれという市民、茶道界からの声が上がっていた。一部の流儀の声だけでは市民の茶室にならない。市はまず、流儀を超えた団体をつくる指導をされました。そして茶室は流儀に関わる人に頼むわけにはいかないので、最終的に私が依頼されることになった。これがきっかけで不特定多数の人が使える「公共の茶室」を手がけることが多くなりました。

この頃、「公共の茶室」と言う概念が芽生え始めていました。

山形県では５か所つくらせてもらったが、私が定年になるころに酒田市から依頼を受けました。酒田は大火があり、古い木造建築が焼けてしまったということで、若い人にも木造建築を知らせたい、また、市は多数の趣味の団体が使えるメジャーな建物を作りたいと。市の建築課長が「あなたしかいない」と、夜汽車でやって来られたのにはびっくりしました。秋田杉ということで設計したところ、「得られない」と言う。建築課長は「秋田杉でなきゃいかん」と言い張り、幸い隣町の金山の山林所有者が趣旨を理解して下さって、「うちの木を３本切りましょう」ということで出来た。酒田の仕事は大変嬉しい仕事でした。

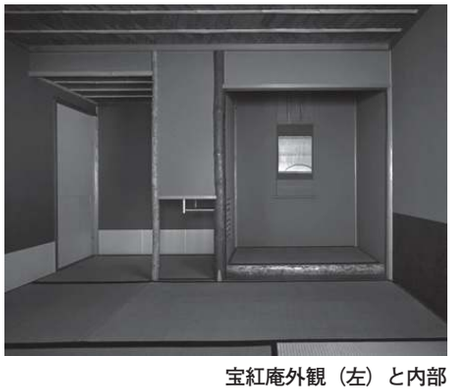
池田：先程、山形の茶室（宝紅庵のこと）のお話では流儀に偏らずにということでしたが、



池田さん

先生は色々な茶匠を研究しそれぞれの思想を熟知されている中で、どのようにそうした思想を取捨選択されたのでしょう。





宝紅庵外観（左）と内部

中村：山形の裏千家の有力な先生が、「玄関を開けた時に○○流の匂いがしてもいけませんよ」と言い出した。急に変わってね（笑）。「いやあ、大丈夫ですよ。何流か分からないものにします」と。全体の雰囲気は言うなれば私の茶の美意識だ。「流儀を超える」とは何なのか。要するに一歩入ってお茶、茶の雰囲気、茶の湯の漂いを感じることが出来る佇まいであるということが基本。そこに織部や遠州はない。自分の独創です。独創というよりもこれまで考え探り続けてきた利休、織部、遠州、石州たち、多くの茶匠の好みに通底している「茶」の心意気のようなものを拠りどころとします。

線を引かずに点を打つ

中村：要は私がつくりたいのは公共の茶室を通じて和の建築・日本建築をつくりたい（ということ）。そこで私がこういうものをやりたいと考えた時に、戦後、皆さんご存知の一世を風靡する吉田五十八先生の「現代数寄屋」があった。私はあの和風は手本にしていない。なんとなれば、優れたデザインではあるが、あの中に伝統は継承されていないと思うからです。障子や簾を使ったら日本的かというものではない。あの先生の言葉の中に「柱も高価。丸太も高価。高いから柱を節約できる。大きな壁を作ってそこに貼り付けるように柱を立てたらいい」とある。これは日本建築の伝統でない。日本建築の伝統は「柱」からというのが私の基本的思想です。私の設計法もそれです。私は線を引かずに点を打つ。柱の配置を決める。柱の配置を決めていくとまず頭に浮かぶのは立面よりも矩計（かなばかり）ですよ。この矩計でほとんどの形は決まる。これは大工の技術そのものです。大工の技術における組立て方で設計をする。そこからおのずと「和」ができてくる。そうすると、むやみに建物は高くならない。

そういう伝統を今の（京都）迎賓館の設計者はうまく実践されました。広がりがあって、あまり高くも低くもならない。「和」の理想が具現されました。

本物のおもてなし

池田：東京五輪招致のとき「おもてなし」がはやりました。これは一部、観光に迎合しすぎるような部分もあったと思うのですが、本物の「おもてなし」には深いものがあると思います。京都迎賓館でいうと、どういうもてなし方が外国人に対して和風のもてなしの神髄であると考えられたんですか。

中村：そもそも迎賓館とは何ぞや、との議論もありました。賓客に喜んでいただく、悪い印象を与えないお迎えをする。ただ迎えるだけでなく歓迎の意を表すやり方として何があるか。まず祝宴がある。そうすると料理、飲み物は別として基本的なもてなしで言えば、武家社会では能、雅楽もある。そういう晴れのセレモニー的なもてなしの他にお互い裃を脱いだ心の内を読み合うような静かなもてなしの場も必要であろう。すると、どういった施設がいいのかを積み上げていってああいうものになりました。問題になったのは能舞台、茶室がないということ。私の立場からいうと、もてなしの原理は「茶の湯」。要するに日本人のもてなしは、その日、その時、その人、だけのために心を込める、ということ。常に来客の度に設えを変えるのが大事だと提案をしていました。客が決まるとその日、その人のために調度品を設えるのがもてなしの基本である。それによって料理その他も決まっていくのです。

レールの上を踏み外さず

池田：先生は若いころから精力的に１分１秒を惜しむように仕事をしていらっしゃるが、何か使命感があって突き進んでこられたのですか。

中村：大体、私は現代の建築界にいてもいなくても差し支えない人間だと思います。しかし、「自分はそれをやるんだ」「そのレールの上を一歩も踏み外さずに走るんだ」と。幸いにもそのレール以外の道を走れないように理解してもらったり、助言をもらったりと、不思議にそういう人に出会いました。自分ではそういう運動をしていないのに自然とさせてもらえるような環境、チャンスに恵まれたというのは、不思議だと最近つくづく思うようになりました。

褒められることをやってきたつもりは毛頭ないけれど、家内にも言うんです。「我が生涯に悔いなし」と。それが90歳を迎えた感想です。戦後、「建築史なんかは後ろ向きの学問だ」と言われたりもしたが、「私は前向きで建築史をやります」と言い返してきました。私はそれを貫いてきた。だから私の前向きの姿勢が、ユネスコの無形文化遺産運動にもつながっています。

周りを気にしないで我が道を歩いてきました。「（今は）すがすがしい気持ちです」

岡倉天心

池田：今でも、なぜ茶室なんか研究するんですか、どうせ過去のものでしょ、と聞かれる。先生は、最初からそれ（茶室）が汎用性、普遍的なものだと確信していたから迷わず突き進んでこられたのかな、と思うんですが。

中村：我田引水になるかもしれませんが、あの天才、岡倉天心がなぜ、茶の湯を世界に向かってあれだけ叫んだのか。感心します。茶の湯ほど日本の伝統を語るものはないんじゃないですか。だから、単に茶を飲む作法のことだけじゃなく、茶の湯と言う文化はもっと日本人の生活を貫く根底から組立てられている。岡倉天心ほど茶の湯を説明できた人はいるのだろうかと思う。彼は茶の湯の本質を見出し確信をもって世界に叫んだのです。



中村先生

「異風になく　結構になく　さすがに手際よく　目にたたぬよう」

中村：茶匠のつくり方には木割がない。書院、御殿のような木割はない。ある女性とこんなやりとりがあった。

「どうやって寸法を決めるんですか」「いやあ絶対値ですよ」「窓の敷居とこれはどうして食い違っているんですか。そろえないんですか」「これが大変なことでね。そろえちゃいかんという判断があるんですよ」

そこに作者の創意がある。その仕事を長年やってきたわけですよ。昔から数寄屋の本というと寸法が書いてあるが参考にならない。しかし、読まないわけにはいかない。その寸法が何を語るかということまでウラを読まないことには、そこに書かれた茶室を理解したことにはならない。

結局、茶匠はどういうものをつくりたいか、あまり語らないけれども言葉に表したもので私が金科玉条にしているのが、「異風になく　結構になく　さすがに手際よく　目にたたぬよう」（変わっていてはだめ、立派に見えても良くない。しかし洗練されているの意）。これを茶室建築の理想としていた。私は和風建築はこれだと思っています。今の（京都）迎賓館もこれに合致しています。日本建築はなるべく低くつくらなきゃ、いけません。

低く、低く

中村：さすがに村野藤吾さんは偉い人です。先生は日本建築の寸法をわきまえておられた。「新建築」で千代田生命ビルを目にして、早速見に行ったのですが、鉄骨ではあるが見事な日本的なプロポーションでした。一度だけ先生と対談したが、鴨居の高さに及んだときに「五尺七寸。それ以上高くしちゃいかん」と言われた。吉田五十八先生の和風とは違う。茶室にはそういうものが求められていて、私もその方向に努力を貫いてきました。低く、低くというのは難しい。草庵の茶室なんかどうしても高くなってしまう。あまり低すぎてもいけませんが、地に這うようなものをつくるのは難しい。

池田：低くつくる技術というのは、つくる段にならないと問題点が分からないこともあると思うんですが、伝統工法全体として見た場合でも、普段の工夫で技術が進んでいるという感覚は、実際につくっていないと分からないものでしょうか。

中村：伝統工法というのは、私はデザインのことでは考えない。あくまで大工、職人の技術、道具を使う技術を大切にしている。それは単に職業訓練所で学ぶだけじゃない技術が工匠の間で伝わってきているという事実を大

切にしています。

一例として、江戸から明治になって主として西洋の技術に変わっていく。そういう段階で一番注目したのは和釘から西洋釘になったということ。技術的には相当な研究が必要だっただろう。これが割に短期間で行われている。京の町家でも明治19年ごろに西洋釘を使っている。大工は伝統技術だけを踏襲しているのでなくて、その時代、時代の研究を織り込んで進歩しながら続いてきている。お互い職人は競争しながら進んだ。その進歩は先に続くようなものでなくてはならない。止まってはいけない。私は技術を守り育てていくためには、和風建築を建てると言う人がもっと現れてほしい。それによって技術が伝わる。

「徒弟制度」がなくなり、ひょっとして技術の進歩が絶えるかもしれない。徒弟制度は聞こえは悪いが、技術の熟練した人の懐に入って自分の技を磨くというシステムだ。今や自分の周りを見ても経験者の話を聞こうという雰囲気がなくなってきている。私は幸いにも堀口先生の懐に飛び込めたが、私に聞きに来る人は一人もいません。きょうはこの人がいて下さるけれども（笑）。職人の世界でも技術教育をするだけだ。「以心伝心」が成り立たない時代になっている。最近ちょっと悲観している。

池田：中村先生にとって最も切実な問題は、「徒弟」のことでしょうか。

中村：徒弟制度を復活すべきだとは思わないが、徒弟によって培われてきたものの尊さを改めて認識するということです。美術工芸などごく一部の分野では続いていますが、それが崩壊したら、これに代わる習慣ができていくのかどうか…です。

床の間について

池田：今の住宅で和風を感じることは少なくなってきています。名古屋のある茶室が一般公開されていた時の話ですが、親子連れが躙口（にじりぐち）の竹の結界をのけて入り、床の上に上がって「これなんや」という感じでした。想像以上に断絶が大きいと感じています。

中村：床の間の話が出たので思いの丈を少し述べる。

最近、高僧の墨蹟がとんと売れなくなった、というのを耳にします。そもそも床のない家が多い。実は茶の湯は衰退の方向をたどっているのではないかという指摘がある。私もそういう気がしないではない。そもそも根本的に考えると床の間が茶室の大黒柱のように、将来ともに床の間中心に茶室が成り立つのかどうかは私にも分かりません。

茶の湯において床の間がどういう役割をしているのか、残念ながら建築史の論文の中でこのことを解明したものはない。床の間は全く分からん。床の間がなくなる茶の湯の世界が成り立つのか。今の現象を見ると茶の湯は普及しているけれど、本質が真に栄えているのかどうか分からない。むしろ戦前の数寄者の時代の方が茶の湯全体としては豊かだったのではないか、という気がしないでもない。おそらくこれから茶の湯は大きな変革があるのではないか。今、茶室について建築家が試みをしているが、これだというものにはならないでしょう、おそらく。もっと根本的に床の間の問題を解決するような空間、茶の湯を根本的につくりかえる茶室が出てこなければ改革にはならないのでは、というのが私の考え。だから私は将来の茶室について夢を描けません。

池田：建築的に見て床の間がどうかという以上に、茶掛けが形式的に掛けるだけじゃなく茶掛けの根本に迫るような役割が認識されないと床の間は今のままで終わるのでしょうか。

中村：そういう可能性もある。だが、利休の床の間の考え方は違うと思う。そこに何を掛けるか、掛けないかという以前に、床の間を設けることの意味を利休がどう考えていたかが重要だと思っている。そこへいかないとだめで、茶室だけじゃなく住宅の床の間についても同じ。深淵な問題だが、研究者がなぜそこを研究しないのか分からん。床の間はありとあらゆる座敷の根底を支えており、そこに何を掛けるかは何でもいいんだ。この根底がこれからも日本人の生活に必要なのか、ということ。難しい問題だが、学問的にも解明されていない。これを解明したら日本人の文化、生活の根底とはを捉え直すことになるでしょう。

池田先生、やったらどうですか。

池田：何を飾るかという以前の問題ですよね。そこに同座している人の心境のあり方の問題ですね。それができない限り何を飾ろうと一緒だということですか。

中村：えらい深刻な話になりましたな。あなたが言い出されたんだよ（笑）。

池田：今となっては常識、当たり前のことでも、もう一度根本から考え直すという作業はどの分野でも必要でしょうね。

中村：それこそ必要なんじゃないでしょうか。

（茶室対談は随時掲載予定です）

中村昌生（なかむら・まさお）

1927年愛知県生まれ。京都工芸繊維大学名誉教授、福井工業大学名誉教授。

（一財）京都伝統建築技術協会理事長。多年にわたり和風建築・茶室の研究と創作を通して日本建築の伝統を追求。日本建築学会賞、日本芸術院賞、圓山記念文化賞、アカデミア賞、京都府文化特別功労賞等受賞。京都市文化功労者。作品に「新宿御苑楽羽亭」（東京都）、「山寺芭蕉記念館」（山形市）、「出羽遊心館」（酒田市）等。

著書に『茶匠と建築』（鹿島出版会）、『茶室の研究』（墨水書房）、『数寄屋邸宅集成』（毎日新聞社）等。

池田俊彦（いけだ・としひこ）

1955年兵庫県生まれ。京都工芸繊維大学大学院建築工芸学研究科修了後、福井工業大学建設工学科勤務。2016年同大学を退職しイケダ数寄屋研究所（倉敷市）を設立。現在に至る。

著書に『国宝·重文の茶室』（世界文化社・共著）、『建築史論聚』（思文閣出版・共著）、『茶道学大系 第6巻 茶室·露地』（淡交社・共著）、『藪内家の茶道』（古儀茶道藪内流竹風会·共著）、『裏千家今日庵歴代 第三巻 元伯宗旦』（淡交社·共著）、『和風建築の意匠』（学芸出版社）、『金沢市史 資料編十七　建築・建設』（金沢市·共著）他。

第63回 工高生デザインコンクール

設計課題／伝統工芸館

【応募校数】20校　【応募作品数】128点
【締切日】平成29年９月30日　【審査会】平成29年10月14日　【表彰式】平成29年11月11日

審査総評

審査員長　上羽　一輝

日本建築協会が100周年という節目を迎える年の課題として、第63回の工高生デザインコンクールは「伝統工芸館」が課題とされ、地域の伝統や建築文化の継承と発信、伝統を通じた交流について、数多くの若々しい提案が寄せられた。

今年の課題が「伝統工芸館」と聞いてまず感じたことは、昨年の「インフォメーションセンター」という課題に比して、工芸作品をモチーフに具体的に外皮やインテリアを扱うなど、「館」としての創り込みに視点をおいた作品が多くなるのではないかということであった。

そして、審査員の間でも、ここ数年、プログラムやダイヤグラムの提案に留まっている作品が多いと感じてきた昨今にあって、建築の造形に対する熱意を久々に感じることができるのではないかという期待を胸に審査に向かった。

伝統工芸をどのように捉えるのかという問いに対して、自分が生まれ育った地域の伝統をテーマとする提案、日本全国の伝統工芸品を取り寄せ展示する提案、展示するだけでなくその伝統技術を継承して工芸品を製作する工房の提案、生活の一部として使い古された物を家族の工芸品とする提案など、その捉え方は様々であった。

その中にあって、古めかしい印象をもつ伝統工芸を新しく発信する建築としての造形に注力した上で、特定した敷地のもつコンテクストを読み解き、まちを取り込み活性化させるような提案、日常生活の流れの中で自然に訪れ、伝統に触れることができるような提案など、敷地や建築単体で完結することなく、まちや人とのつながりを生むような提案が高く評価された。

その中でも入選案は、パースや各図面･模型写真の色彩、ドローイングに表現された光と影の迫力と繊細さ、紙面レイアウトの纏まりなど、建築を創り出す上で求められるバランス感覚と訴えたいことを造形に昇華させ的確に表現するセンスを感じさせる作品であった。

私ごとではあるが、京都西陣に織物職人の両親のもと生まれ育ち、無意識に伝統工芸に触れながら成人し、卒業設計には「西陣織会館_新館」をテーマとして取組み、今年の学生諸君と同じように伝統工芸とは何かという課題に向き合った30年ほど前のことが懐かしく思い起こされた。

最後に、このコンクールへの応募にあたり多大な努力をされた学生諸君と、その作品の完成を見守り熱心にご指導いただいた先生方に感謝と敬意を表すとともに、表彰式でお会いできることを楽しみにしている。

【審査員長】



【学歴】
1965年　京都市生まれ
1988年　京都工芸繊維大学　工芸学部
　　住環境学科卒業
【経歴】
1988年　東畑建築事務所　入社
現在　　東畑建築事務所
　　設計室長・BIM設計推進室長
【主な作品】
京都スタジアム（仮称）（2019年完成予定）、西予市宇和球場（2016年）、カプコン研究開発第２ビル（2016年）、JA兵庫信連姫路支店（2015年姫路市都市景観賞）、カプコンテクニカルセンター（2015年）、武田薬品研修所（2011年大阪サステナブル建築賞）、岡山シティライトスタジアム（2003年）、和光純薬工業大阪研究所（2003年）

【審査会】



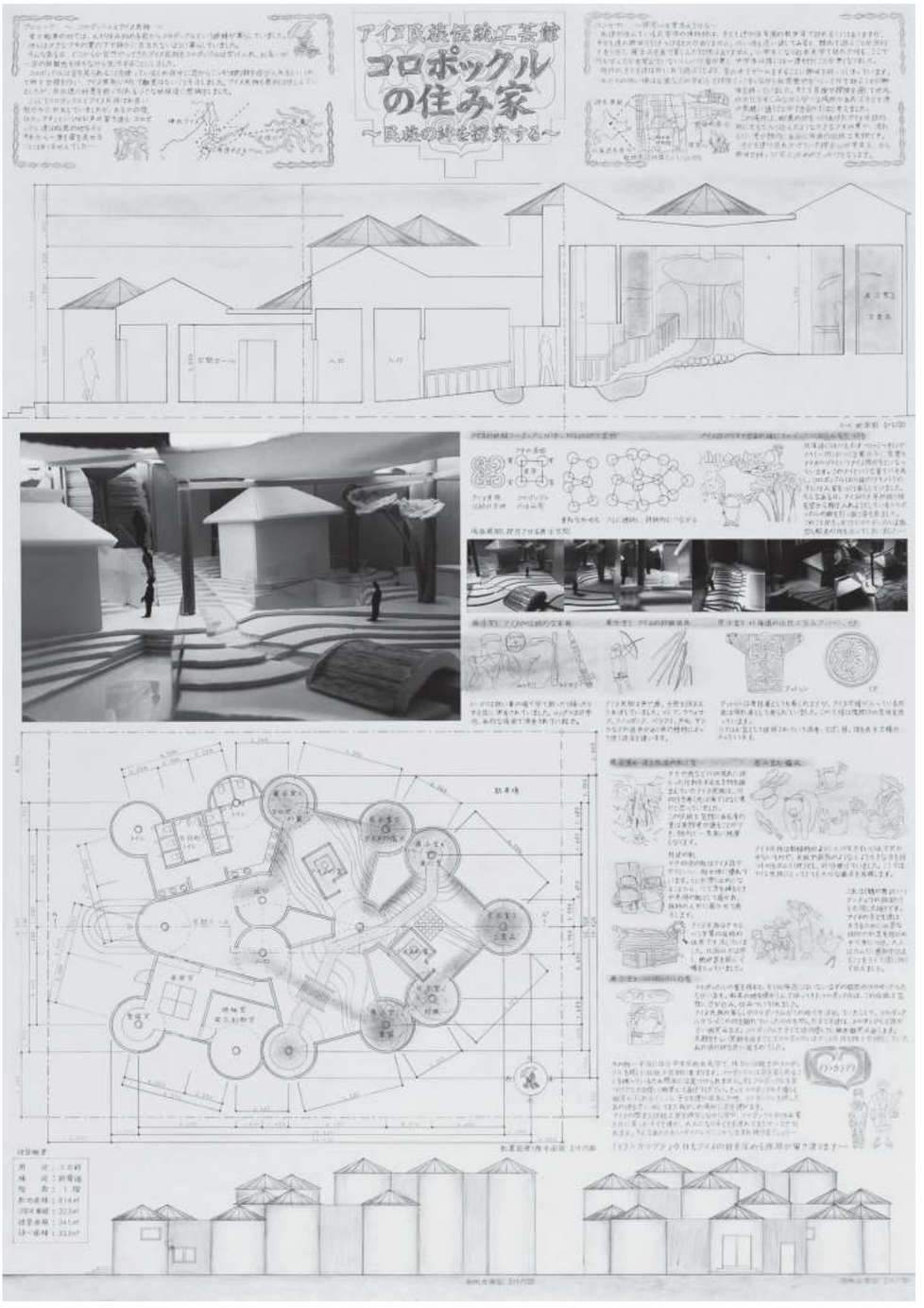






●審査員（50音順・敬称略）ー職場は平成29年10月当時ー

一階　聡之／㈱日建設計設計部門設計部長
上羽　一輝／㈱東畑建築事務所設計室長・BIM設計推進室長
大平　滋彦／㈱竹中工務店大阪本店設計部設計第４部長
小笠原絵理／間工作舎一級建築士事務所主宰
神谷　浩司／㈱大林組大阪本店建築事業部　プロジェクト設計部副部長
河崎　昌之／和歌山大学システム工学部環境システム学科准教授
戸川　勝之／㈱安井建築設計事務所大阪事務所設計部設計主幹
橋本　　修／㈱昭和設計執行役員　プロジェクト推進室室長
前田　茂樹／大阪工業大学工学部建築学科准教授
矢田　朝士／ATELIER-ASH主宰



入選・最優秀賞

北田　幹・谷口毅和

北海道名寄産業高等学校３年

今回の「伝統工芸館」というテーマを見た時に、北海道の伝統工芸品とは何になるのかを知らずに調べる事から始まりました。そしてたどり着いたアイヌ民族の生活や文化を徐々に知り、伝統工芸品をどのように建築的に表現するかを考えました。

地元にある唯一の博物館は、子供たちの興味を引くような空間では無く、固いイメージのままの工芸館でいいのかという疑問が残りました。そこで私たちは子供たちの探究心を育てる様々な仕掛けを持った「また来場したくなる工芸館」を目指しました。

結果を聞いた時は実感が無く驚きでいっぱいでした。初めてのコンペで分からない事ばかりで、計画を立てなかったので失敗が続き、気付いたら締め切りまで残りわずかになっていました。しかし、たくさんの人の支えがあり完成させる事ができ、その支えがあったからこそ取る事ができた大きな意味のある賞だと思います。

両親や先生、友達には感謝の気持ちでいっぱいです。

本当にありがとうございました。

▲審査コメント／上羽一輝

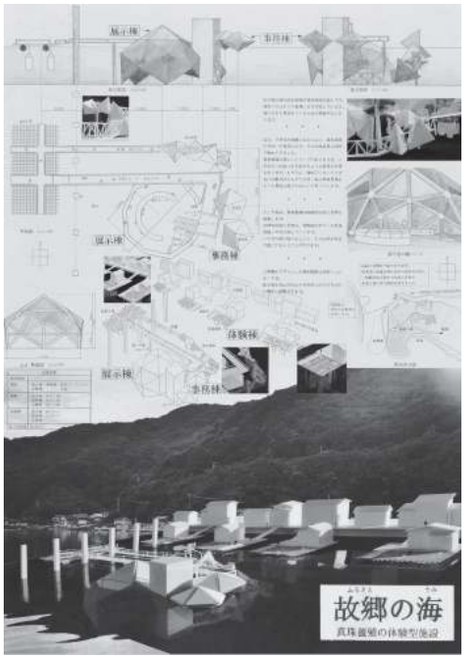
アイヌに伝わるコロポックルの小人伝説をテーマにした伝統工芸館の提案である。訪れる子供たちや親子連れが、起伏のある空間を探検し、展示室を巡り、この地に伝承されるコロポックルの伝説を通じてアイヌの人々の伝統や生活様式を学ぶことができる。

まず、この作品を見て感じたことは、各展示室をつなぐ空間の豊かさと楽しさを素直に表現している模型写真の光と影のコントラストの美しさであった。幻想的にも感じるその空間では、展示室や木陰を覗き込むと今にもコロポックルに出会えそうな感じがする。

そして、それぞれの展示室では、狩猟道具や楽器、衣類などが展示される他、住まいや儀式の様子も紹介させており、この施設全体としての実現性を感じさせる。

図面としての纏まりも良く、模型写真を中心に非常にバランスよく配置されており、綿密に書き込まれた各展示室のプログラムも、すぐ横に配された平面図と合わせて心地よく読み解くことができた。

この伝統工芸館で、アイヌの伝統を学び育った子供が大人になり、また子供を連れて訪れる。生まれ育った地の伝統を継承する上で、シンプルな手法ではあるが、子供たちの探求心、冒険心を掻き立てる空間の造形とコロポックル伝説とが非常に上手く融合された作品であると感じた。



入選・優秀賞　岸　夕海　三重県立伊勢工業高等学校２年

海沿いの町は、津波などの影響で好まれなくなり、人が減っていき、漁業の跡継ぎも問題になっています。私はまず、津波への心配をなくすことと、地域の漁業の魅力を伝え、次の世代へと繋げていきたいと思いました。私は小さい頃、真珠養殖の手伝いや見学をしていて、真珠養殖をとても魅力的に感じ、今でも手順や工程を覚えています。伝統工芸館を体験型にすることで、より魅力を伝え、記憶に残すことができると思いました。

この度は、優秀賞という賞をいただき、ありがとうございます。私は、手書きの作品を応募するのは初めてで、不安ばかりでした。先生から優秀賞という結果を聞いたとき、嬉しさより先に驚きがありました。

この優秀賞は、自分の中で大きな自信となり、たくさんの方に支えてもらっているということを実感しました。これからも、感謝の気持ちを忘れず、もっと上を目指して頑張っていきたいと思います。

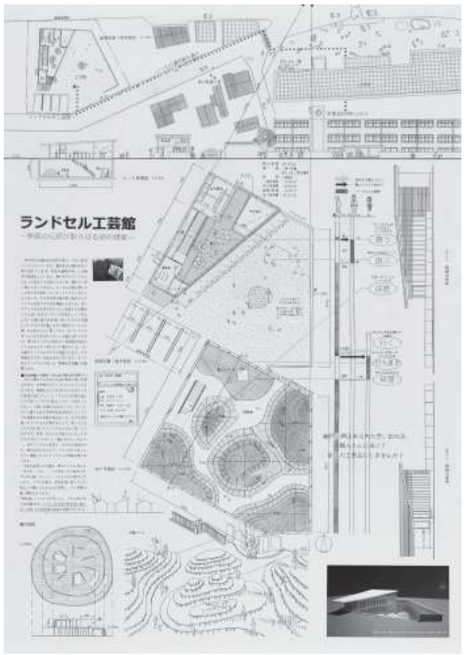
◀審査コメント／神谷浩司

場所は故郷。それも海、とある。それ以上の詳細な設定は割愛されているが、紙面を大きく占めるモンタージュ写真により、小高い山を背にした海辺と、そこに並ぶ家々といった敷地の状況が良く伝わってくる。

建物自身が水中に建てられているという点や、船と海中通路によるアプローチといった点においては、意表をついた建物である。一方で、既存の建屋を体験棟とし、実際の養殖筏のそばに展示棟を配置するなどのリアリティも併せ持っている。このリアリティは、祖父母が住む慣れ親しんだ海が舞台になっていること、また、幼少のころの実体験が寄与していると思われるが、審査での好評を得た一因でもある。

建物の規模としては決して大きくなく、体験棟である筏小屋や周辺の環境と整合したスケールとなっているが、水面に突き立つ柱列、幾何学的で力強い造形などから、我々の世代にとって懐かしい“建築の夢や力”を感じる計画となっている。

この作品の素晴らしさの一つはその表現にある。先に述べたモンタージュ写真は水面下の建物も合わせて見せることで、この建築の全容とその魅力を一目で窺うことが出来る。作図、レイアウトにおいて、見せたい部分を効果的に、かつ迫力を持って見る者に訴えている。



入選・優秀賞　松下琴音　三重県立四日市工業高等学校２年

今回、「伝統工芸館」というテーマを見て、私はまず地域の職人さんに話を聞きに行きました。そこで「伝統は意外と身近にあるもの」と教えていただきました。そこで家の中を探し、発見した物がランドセルでした。家族でランドセルを囲み、小さい頃の話や両親が小学生だった頃の話を聞き、同じルールでランドセルを使っていた事を知りました。

一つの物を通じて人がつながる事も伝統の一つだと思います。買ったっきりではなく、この伝統工芸館を通じて、職人さんや、家族と話す時間を作る、そんなきっかけになれば良いと思い設計しました。

はじめに結果を聞いた時、悔しさと嬉しさでうまく言葉が出ませんでした。入選した事はとても誇らしく、嬉しかったのですが、悔しさが勝ちました。しかし作品を作っていく中で上達した事もたくさんあったので、この悔しさをバネに成長し、身を引き締めて作品作りに励もうと思います。これまでご指導してくださった先生、支えてくれた家族、友達に感謝しています。

◀審査コメント／矢田朝士

本作品は、構想、コンセプト、図面表現、完成度など多くの点でとても高いレベルにあり素晴らしい作品である。対象とする伝統工芸にランドセルを選んでいるが、単に技術的な話だけではなく、親と子そして製作した職人を絡めた長い時間軸の中で物語が進んでいき、私達の多くが共感できる内容である。

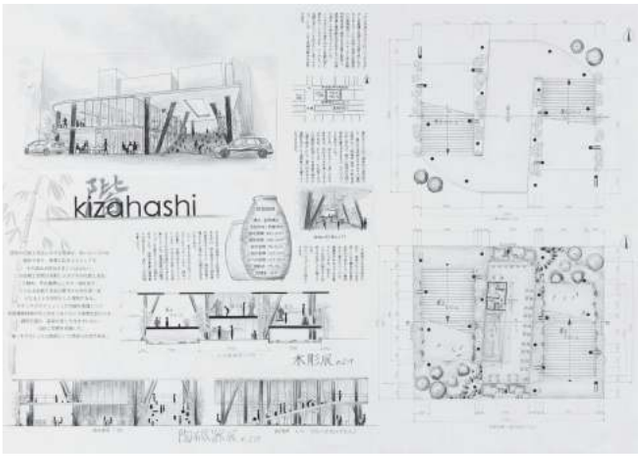
にも関わらず何故最優秀ではないのか？

一つ目は、建築的な魅力（又は力強さ）に欠けているからである。建物自体の形態や平面計画は素っ気なく、工芸館の存在を知らない人を引きつける要素が見えてこない。

また一番重要な保管庫や職人スペースが地下にあり、建物に積極的な発信がない中での展示等の表現等にはもっと工夫が必要なのではないだろうか。

二つ目は、自ら設定した敷地環境の学校や駄菓子屋等との関係、地域での建物のあり方などの提案が見られないからである。子供の世界（そして大人になった時の記憶）にとって大きな存在であるこれらが加わることで提案に一層の広がりがもたらされるものと思う。様々な伝統が街に広がったときにはどのような風景を見ることが出来るのだろうか？頭のなかにあるイメージを伝えて貰いたかった。

多くを求めるのは酷なことだと思うが、松下さんには実力があるのでまだまだ良くできるだろう。講評についてはそれを見たいと思う励ましの言葉と捉えて欲しい。



入選　阿部隼人　大阪市立工芸高等学校３年

今回のテーマについて、私は展示する伝統工芸品をいかに美しく、かつ効率的に伝えるかを考えました。そのために「伝統工芸品に対する興味がほとんど無い上に自発的に博物館などに展示を見に行くほどアクティブな性格でもない人」でも気軽に見られる手軽さと開放感を追求する事にしました。そのために敷地を都会の真ん中とし、展示室を道頓堀川と通りを結ぶただの道として造り、物理的、心理的な壁を取り払いました。階段の形としたのは、伝統工芸品を横からだけでなく、上下からでも見られるようにするためです。特に下から見上げる伝統工芸品は左右の緑と相まって、山頂にある寺社仏閣を下から見上げるような荘厳さを生み出し、自然と人を引き寄せるのです。

高校三年間で、というより、生まれて初めて、公に自分の作品を認めていただき非常に嬉しく思います。欲を言えば最優秀賞も頂きたかったのですが、自分の作品はまだまだ稚拙なようです。

この入選で思い上がらず、これをさらに踏み台として、これからも自らのセンスと製図の腕を上げるために努力していこうと思います。

数多ある素晴らしい作品から私の作品を選んでいただきありがとうございました。

▲審査コメント／一階聡之

繁華街という、人通りの多い「場」を狙って、フラッと立ち寄ることが出来そうな、親しみやすい現代的な「伝統工芸館」に仕上がっています。

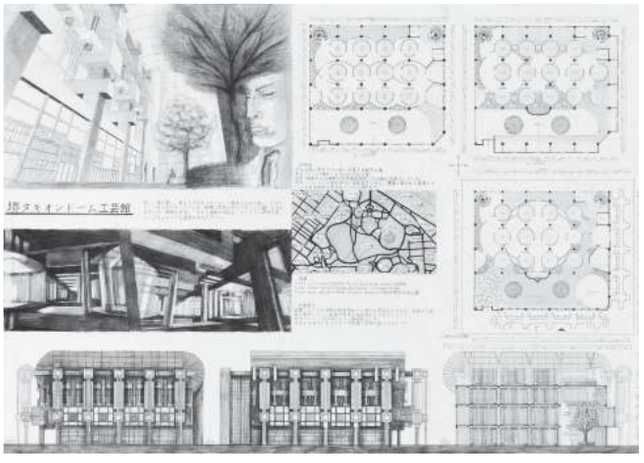
建築的には、若干、恣意的であると感じる部分も見て取れます。

コンセプトにおいては、「モノ」が売れない時代にあって、本当に良いものを志向する傾向が顕著になって来ています。東京ガールズコレクションで再生した鯖江メガネの事例のように、伝統に根ざした職人技による「一品」が注目を集めている時代であるとも言えるでしょう。そのため、一概に「伝統工芸に対する意識が低い」と言い切ることは視野が狭いと感じます。

また、デザインにおいては、孟宗竹の必然性も読み取りにくいのですが、中央部ガラスサッシや屋根の形状が、オーソドックスに過ぎるなど、「形」としての主張や関係性が弱い部分も見受けられます。

が、しかし、楽しそうな雰囲気が画面全体に溢れ、心を躍らせてくれる表現になっていることが、これらの小さな疑問を吹き飛ばし、生き生きとした、そして爽やかな作品の印象が心に残るものとなっています。

今後のさらなるご発展に期待いたします。



入選　上野航祐　大阪市立工芸高等学校３年

これは“人間味の徹底排除”をテーマとした作品です。

というのも建築でいう人間味というのは抽象的な理想から生まれたものです。この行為が現実逃避であるなら、私は現実と向き合いたいと思ったのです。また作品を作るにあたっては、コンピュータを脳の拡張領域として使用しました。コンピュータは魔法の箱です。そこに潜む様々なグラフィックイメージからどうやってカタチを創り出すかを考えたのです。でもまだこのテーマはサブカルチャーでしょう。これをハイカルチャーにするには今までの古い障壁を消失させていかなくてはなりません。

（通知を受けた時）我が身に何が起こったのかという気持ちです。

まさかこのような結果になるとは思っていませんでした。

どうもありがとうございます。

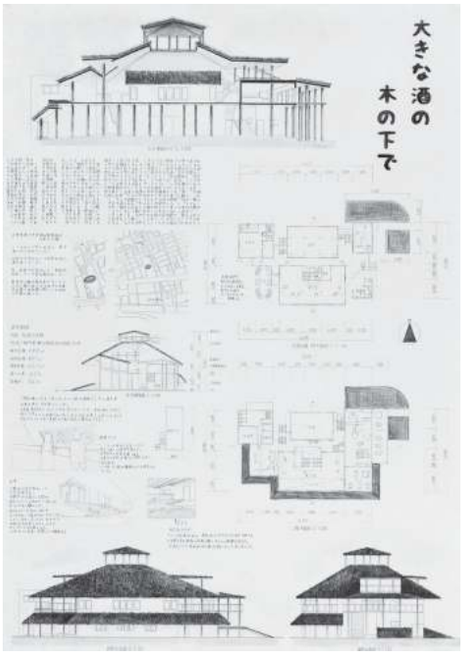
然るに私は今度入選通知を受け、どのような感想を残すかに困りました。概ね通知の当日は、ハートフルな物にしようと考えていたのです。しかし私の場合はモノを作る動機がはっきりしておりました。それが益々自分の首を絞めゆる物になるとは驚きであります。総評して“動機とは世界に成り得る”という訳であります。

▲審査コメント／大平滋彦

圧巻の鉛筆ドローイングの中に仕組まれた多くの謎。それらは、SF映画のプロローグのごとき設計主旨にはじまり、超光速で動く未知の粒子の名前に由来するのであろう建物名称、動力機器を想起させる建物のフォルムとインテリア、元素配列のようなプランニングに隠されている。しかし、物語性豊かな作品に登場するこれら魅力的な「キャスト」は図面の中では、建物の中心に鎮座する巨大人物のマスクのごとく沈黙を続けている。作者に会ってこれらの謎を解き明かしたいという思いから票を投じた作品である。

一方、本題である伝統工芸との関係性を建築に見つけ出すことは難しかった。展示空間は独立柱とガラスの衝立によって緩やかに仕切られた一体空間となっているが、パースに巧みに描かれた光と影のつくる透けた空間性を、日本の古建築にある柱と梁、建具が織り成す伝統造形手法に結びつけることが、その一つの答えとなったのかもしれない。

自己の世界観から導き出される造形の独自性や精緻なドローイングによって、美的センスと表現力の高さが、見る側の知覚を超えて感覚にダイナミックに伝わることで、ひときわ異彩を放つ秀作であったが、本人も未だ知りえない自身の無限の可能性によって、より多くの謎を秘めた「物語としての作品」がこれからも生み出されてゆくことを期待している。



入選　黒住隆二　神戸市立科学技術高等学校３年

このコンペをきっかけに兵庫県の伝統工芸を調べると工芸品が並ぶ中に一つだけ酒という飲み物が伝統工芸として載っており目をひかれました。

しかし、日本酒で有名なこの地域には酒造記念館がいくつかあり、それらとの違いをシステムと機能の面で表す事が重要だと考え計画しました。

工芸館としての施設ではなく風土を活かした計画とまちに開く事を目的として考えました。

焦る気持ちが大きく断面パースとレイアウトに納得できないまま応募したので入選できるか不安でしたが、平面計画と細かい計画はできたと思うのでそこを汲み取っていただいたと感じ嬉しかったです。

これから計画するときは細部の計画をもっと突き付めて考えられるよう努力します。

◀審査コメント／戸川勝之

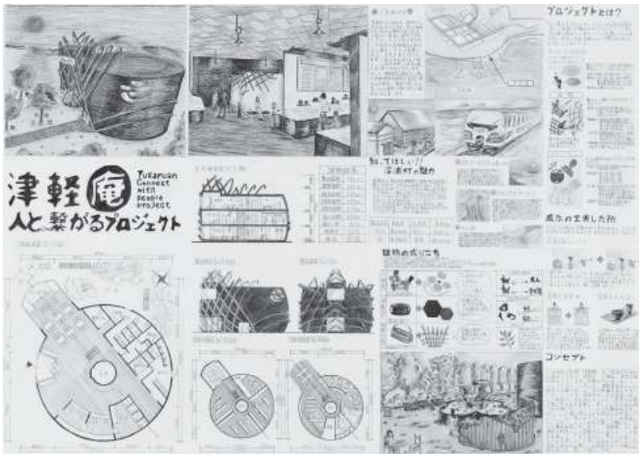
最初に目に飛び込んでくる迫力のある立面図と断面図。緑を配した大屋根と内外の繋がりを持たせた気持ち良さそうな空間がこの作品への興味を抱かせる。

神戸「灘五郷」、石屋川沿いの駅前公園に計画。酒づくりのまちとして、蔵・屋根がつくっていた風景がなくなり無機質な姿に変わってきたことに対し、新しいものと古いものを融合させ伝統工芸館をつくるという提案。

伝統工芸館を展示や紹介の場だけではなく、町のコミュニティの中心施設として扱い、人々が気軽に訪れる仕掛けをつくりコミュニティを活性化、しいてはそれが文化・伝統の広まりや継承に繋がるきっかけになるという視点が評価できる。

内部空間は一つ大きな屋根の下に、入れ子状で諸室を配置。各エリアがゆるやかにつながり様々な出会いが期待できる魅力的なものとしている。また、随所に開口部を設け、町との繋がりや自然通風・換気への配慮など、建物を巡るわくわく感と居心地の良さが感じられる。欲を言えば模型写真があれば、この魅力がさらに増したのではないか・・・・。

これからも「こういうものをつくりたい！」という建築に対する想いと情熱を持ち続け、具現化する術をしっかりと学んでいって欲しい。



入選　千福友里奈　大阪市立工芸高等学校３年

この作品を作ろうと思ったきっかけは、祖母の話です。祖母は、青森県深浦町出身で、そこに妹が住んでいます。その人がたまに美味しい物を送ってくれて、その度に祖母が懐かしそうに話してくれました。日本海が綺麗だという話や、ウミネコがたくさんいる話、白神山地の話など、聞いていてとても楽しくなり、興味を持ちました。その時私は祖母の育った場所に行ってみたいという気持ちになり、この作品を作りました。この作品を見てくださった人が行ってみたい、と思ってくれたら嬉しいです。

初めて通知を受けた時、嬉しさももちろんありましたが、驚きの方が大きく、どう喜んでいいのか戸惑いました。この作品は夏休み前から締め切り目前まで製作していましたが、その努力が実った気がします。たくさんの人たちに祝福され、とても嬉しかったです。

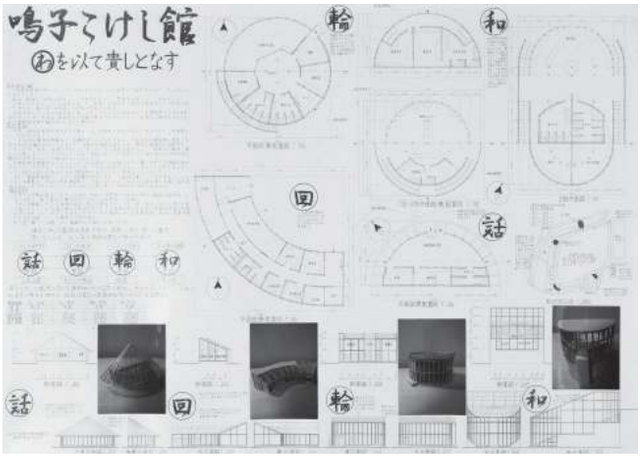
▲審査コメント／小笠原絵理

「津軽庵　人と繋がるプロジェクト」は、深浦町の魅力をしっかりと捉え、地元の工芸品を核に、「コトモノヒトが、出会い繋がる」ことを軸に考え計画、表現できている作品です。実際に深浦町を訪ね、伝統工芸館を直に訪問している、そんな具体的なイメージが広がる「立つ場所と、そこでの人の行為から生まれた建築」その点が素晴らしい。つくり手の思いが伝わってきます。

気づいた点について、円形の平面をみると、内部間仕切りが直線で構成されていますが、カーブ形にすることで、回遊性を高め、よりつながりのある空間に。断面は、吹き抜けを検討することで、上下三層の空間が一つになり、一体感や出会いが生まれます。開口部は、内と外をつなげる大切な空間要素。トップライトを効果的に設けることで、ふくらみのある空間と光が共鳴し、「自然とともにある建築」になるのではないでしょうか。

津軽の職人の手でつくられた工芸品を接点に、自然と建築と人とがつながる「津軽庵」は、「新たなつながりを生む役割を担う」なくてはならない建築です。

展示の工夫から、夕日が映りこむ外観を含む修景まで、総合的に考えている。その視点を大切に、これからも建築することを期待しています。



入選　角田広紀　**仙台市立仙台工業高等学校３年**

正直、私は、日本の伝統工芸について疎く、興味もそれほどあるわけではないため、今までの課題に比べるととても難しく感じました。しかし、裏を返せば、私でさえ行きたくなるような伝統工芸館を作る事が出来たら、当コンクールで勝ち抜けるのではないかと思い、半ば自分好みの設計をしました。

具体的には、４つの敷地を設け、それぞれの建築物に鳴子こけしの製作過程と、こけしの歴史的背景を与える事で、活動的な体験学習を行いながらも、地域住民との会話を交えて工芸品の歴史を随所で感じられるようにしました。

入選通知を受けた時、喜びよりも悔しさの方が圧倒的に大きかったです。

何が一番悔しいかというと、自分自身、一位を取れなかった理由が何となく分かっていた事です。負けず嫌いなので、今でも余裕を持って設計が出来なかった自分に不満を抱いてますが、この失敗と悔しさを糧にして、これからも日々精進していきたいと思います。最後に、この作品を完成させるにあたって、協力して頂いた皆さん、本当にありがとうございました。

▲審査コメント／橋本　修

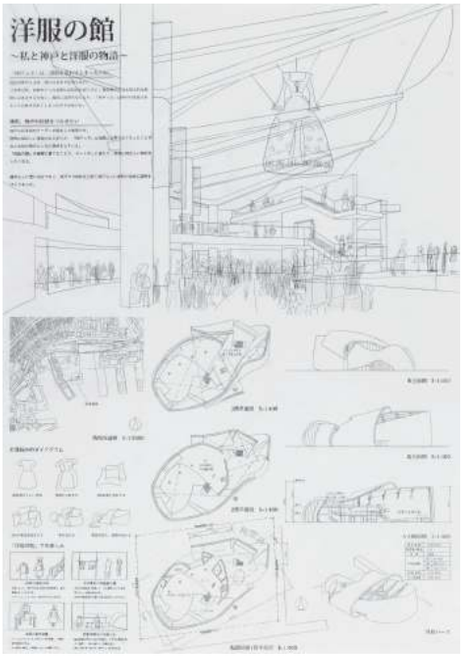
この作品は、宮城県の伝統工芸品「鳴子こけし」の展示や体験学習ができる伝統工芸館である。緑豊かな山間合いの小学校を囲んだ道沿いの民家が連なる敷地に、４つの個性的な建物を点在させ各施設を回遊する事でこけしの展示や作業工程が体験でき、地域住民との交流も図れる施設として計画されている。作者はこの設計にあたり実際に宮城県内の伝統工芸館をいくつか見て回ったようである。非常に研究熱心な高校生である。

第一印象として、しっかりと組み立てられたコンセプト、周囲の景観に調和した木造の軽快なデザイン、バランスの良い紙面構成、丁寧に仕上げられた模型など、角田さんがこの作品の込めた思いがこの作品に表れており好感が持てる。

次のステップとしては、トイレや事務室など共用部のプランニング、ランドスケープや一本道を活かした交流イメージなどの工夫があればより魅力ある空間が生まれると思われる。

今すぐにでも「まちおこしの事業」として役所などに提案できそうなコンセプトは、高校生でありながらこれから将来設計をしていく上で最も重要なスキル「コンセプトメイク力（りょく）」を身につけていると感じる。

今後も幅広い知識と好奇心を身に着け、りっぱな建築家と成長し活躍して頂くこと期待している。



入選　中西梨乃・志智麗未・中田朋加　**兵庫県立兵庫工業高等学校２年**

はじめに、今回の設計課題である『伝統工芸館』という問いに対して、私たちの地元である神戸らしい伝統工芸館を設計する事を目標に取り組みました。

神戸らしい伝統とは何だろう？と考えていた時、ふと最近の神戸っ子はあまり港街らしい洋服を着ていない事に気が付きました。SNSなどを用い、全国的に様々なものが画一的となる中、私たちの世代では、神戸っ子も全国の人たちと同じ格好を好むようになり、これでは神戸らしさがなくなってしまうのではないかと思うようになりました。

そこで、建物は洋服に見立てた特徴的なデザインである事を意識し、伝統工芸館を港の先端に建てる事で、人の港への心の距離が近づく事を目指しました。港街神戸らしい「洋服の伝統工芸館」を計画し、神戸の文化性をこれからも残し、発展できる事を目指した伝統工芸館を設計しました。

この作品は、私たちが初めて自分たちで考えて設計したものです。夏休みだけでなく、土･日も学校に来て何度も案を出して検討しました。そのため、完成した時は本当に嬉しく、凄い達成感がありました。また、先生には長期間に渡り丁寧に教えて頂いたので、本当に感謝しています。みんなで本当に頑張ったので、入選したと聞いた時はとても嬉しかったです。これからの学校生活では、この経験を生かして頑張っていきたいと思います。（志智麗未）

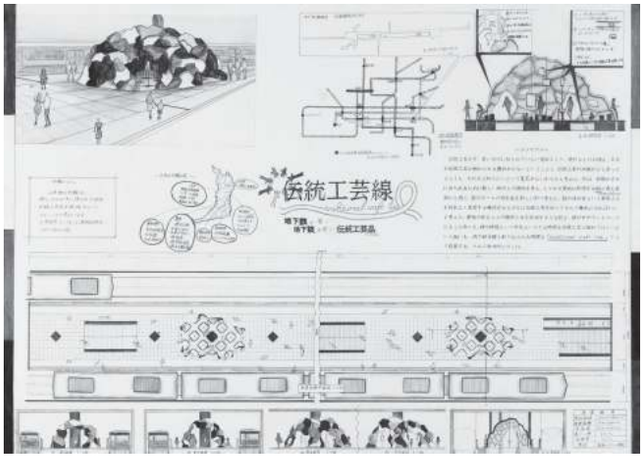
▲審査コメント／前田茂樹

本作品は伝統工芸を服飾デザインとした上で、立体裁断した布のような外装を３次元的に重ね合わせることによる内部空間及び外観の美しさを評価した。

またその複雑な空間を活かしたファッションを軽快に展示するパースに加えて、手書きの平面図や断面図等のプレゼンテーションも秀逸である。

すでに航空機や船舶設計技術の応用などで、複雑な３次元をそのまま解析しながらBIM技術をもって設計から施工までを一貫して設計可能な時代に入っている。

今後海外の大学や設計事務所の最新の作品や動向を視野に入れ、本作品のような建築を実現するための技術に関する勉強を重ねてつつ、アイデアを現実化に向けて膨らませていってほしい。



入選　和田龍輝　大阪市立工芸高等学校３年

今回のテーマが「伝統工芸館」と聞いた時に、まず伝統工芸とはなんだろうから始まりました。伝統工芸は伝統工芸を好きな人しか見たり触れたりする機会はないと考え、来てもらうのではなく少しでも目に触れ知ってもらう機会になればと思い設計しました。

できるだけたくさんの人に知ってもらいたい時にたくさんの人が利用する「駅」が良いと考えました。駅の場合、電車の待ち時間も考慮し待合室と合体すれば待合室が一つのきっかけの場所になります。

また、今現在はスマートフォンの時代ですぐに発信できるという利点も活用していけば一人でも多くの人に知ってもらえて、色々な駅につくる事でそれを「伝統工芸線」として一つの繋がりをつくれればと考え提案しました。

入選通知を受けた際、一番最初に安心しました。賞は人のために取るものではないけど工芸高校の先輩方が毎年取られている分、少し重圧があったのが本音です。ですが入選できて良かったし、とても嬉しかったです。

▲審査コメント／河崎昌之

地下鉄の、特に乗降客が多い乗換駅のホームを敷地に見立て、そこに大阪府内に点在する伝統工芸品を再配置して、それらを日常に近接させようという考え方を評価しました。課題文中の“発信”によく応えた提案で、タイトルどおり、個々の工芸品が路線網により、互いに関係を持つことで、「伝統工芸」という枠組みを印象付けることが期待されます。

展示空間の岩山のような造形には確かに、ランドマーク性を認めます。他方その内部の展示パネルに、２次元バーコードを添え見る者を情報空間へと引き込む手法には、電車を待つ短い時間のうちに、伝統工芸を訴求し得る速効性があります。ここで本作品のこれら二つの具体の組み合わせを考えます。特徴的な外観の背後には「埋もれた工芸品を掘り起こす」という「物語」があるようですが、それが行き交う人々の視線を、展示物から遠ざけ、せっかくの今日的な手法の利点を、限定的にしてしまっているのではないでしょうか。作者に確認を促したい点です。

空間もまた“普段づかい”に。この意味で，今回の敷地設定からすれば，「“地下に眠る”工芸品」という「物語」もあったように思います。

※入選者の感想文は誌面の関係上、要約して掲載いたしました。　作品写真撮影：河合止揚（アトリエ　リベラ）

●応募学校

- 北海道名寄産業高等学校
- 岩手県立水沢工業高等学校
- 仙台市立仙台工業高等学校
- 茨城県立水戸工業高等学校
- 東京都立墨田工業高等学校
- 神奈川県立向の岡工業高等学校
- 静岡県立科学技術高等学校
- 名古屋市立工芸高等学校
- 三重県立伊勢工業高等学校
- 三重県立四日市工業高等学校
- 大阪市立工芸高等学校
- 大阪市立都島工業高等学校
- 和歌山県立和歌山工業高等学校
- 神戸市立科学技術高等学校
- 兵庫県立兵庫工業高等学校
- 鳥取県立鳥取工業高等学校
- 岡山県立岡山工業高等学校
- 岡山県立津山工業高等学校
- 松山聖陵高等学校
- 佐賀県立佐賀工業高等学校

【表彰式】



●審査記録

10月５日　予備審査：応募作品について応募規定違反の有無を調べ、その検討を行った。検討の結果、一部作品に要求図面の不備が見られたので、予備審査結果を審査会に報告することとした。（教育委員会・工高生教育小委員会）

10月13日　審査会：審査会当日欠席の審査委員３名により審査を行った。

10月14日　審査会：審査委員７名により当日審査を行った。（審査時間13：30～17：15）

●審査経過

審査を開始するにあたり、本年度の応募校数、応募作品数の報告を行い、一部作品の要求図面に対する不備について予備審査報告として審査会に提示された。その結果、審査に影響する大きな違反ではないと判断され、全作品を本審査の対象とし、続いて審査員長より審査方針の確認があり、審査に入った。

■１次審査（審査員７名）128作品→29作品

全応募作品について審査委員１名につき10作品を選んで投票し、事前審査の票を加え集計。

得　票	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
作品数	1	1	0	3	3	1	2	3	5	10

票を得た29作品を１次審査通過とした。（審査時間13：35～15：00）

■２次審査（審査委員７名）29作品→入選10作品

１次審査通過29作品のうち、得票数１の作品について、投票者より理由の説明がなされた後、次のステージに残すべきかどうか審議した。続いて得票数２の作品について同様に審議し、続けて得票数３の作品について…と段階的に審議が重ねられ、合計12作品に絞り込まれ、この作品を２次審査通過とした上で、再度投票により10作品を選びだし、再審議を経て最終10作品を入選作品とした。（審査時間15：15～16：30）

■３次審査（審査委員７名）入選作品10作品→最優秀作品１点、優秀作品２点

引き続き、優秀作品３点を選ぶに当たり、入選作品10点について審議され、３作品を選出、その後最優秀作品を審査員の挙手により決定し、最優秀作品１点、優秀作品２点が確定し、審査を終了した。（審査時間16：30～17：00）

会誌“建築と社会”への審査経過報告掲載にあたり、10点の入選作品について審査委員が分担してその評価を誌面にまとめることを約束し、審査会を終了した。（審査会終了時刻17：15）

ヒマラヤの学校建設
―ネパール中部大地震からの復興支援を通じて―

野田隆史
特定非営利活動法人
Asian Architecture Friendship（AAF）

■被災したヒマラヤの学校

2015年４月25日15時11分（現地時間11時56分)頃、ネパールの首都カトマンズから北西約80km地点を震源とする、マグニチュード7.8の大地震が発生した。この地震の影響で、Asian Architecture Friendship（以下「AAF」という。）が支援するヒマラヤ山麓の村、フィリムの学校（本誌2012年５月号で紹介。以下「ブッダ・スクール」という。）も少なからぬ被害を受けた。

１日も早くフィリムへ行き、学校や村の状況を確認しなければ、と思いながらも実際にAAFが現地に入れたのは地震発生から約５か月が経過した2015年９月26日であった。震災直後から現地入りを模索してきたが、崖崩れ等により分断された山道の復旧が進まず、陸路で行くことはまず不可能、またヘリコプターも各地への支援物資の輸送のために不足している状態が続いていたため、AAFのような民間の小さな組織に対してはなかなか利用許可がおりず、予想以上に時間がかかってしまった。

現地を調査して明らかになったことは同じ敷地内の建物でも建設した時期によって被害の状況に大きく差があったことである。2003年に竣工した１期工事の校舎、図書室、職員室等は一部の教室の壁の石が部分的に脱落した程度で被害はごく軽微であった。損傷した教室の壁も、教員と生徒たちですぐに修復を行い、地震の１か月後にはこれまで通り授業が再開されている。ところが2009年に竣工した２期工事の寄宿舎は３棟とも外壁が大きく崩落し、修復不能な状態であった（**写真１**）。この寄宿舎３棟に入居していた生徒95名と、道が崩れて通えなくなった生徒12名の計107名がテントでの生活を余儀なくされることとなった（**写真２**）。同時期に竣工した食堂棟と便所棟は、円形という平面形状や小規模であったことから一部の外壁の石が崩落したが、修復可能な範囲であった。

本来２期工事で計画されていたが予算の関係で工事が遅れ、2011年に竣工した４棟目の寄宿舎は他の寄宿舎と同じ設計にもかかわらず、全く被害は見られなかった。また建設中であった３期工事の教員宿舎は３棟の寄宿舎同様、壁が大きく崩落し、これも修復不能な状態であった。

なぜ、寄宿舎３棟と教員宿舎の被害が他の建物と比べて大きかったのか。AAFが崩落した壁の構造を調査したところ、外壁の石の積み方が設計図通りに施工されていなかったこと、石と石の間にモルタルを充填するように指示していたにもかかわらず、部分的にしかモルタルが充填されていなかったことが判明した。工事中は随時工事の進捗状況と工事写真を付けたレポートをAAFに提出することを現地スタッフに義務付けていたが、そのレポートからはそのような工事の不備を把握することはできなかった。またAAFによる中間検査時には目視で確認できる範囲にはきちんとモルタルが充填されており、問題なく施工されているとの判断をしていた。おそらく期中で工期に間に合わせるために少しでも工事を楽に進めようという意識が働いたのであろう。あるいは壁の構造の重要性に対する認識のギャップがあったのかもしれない。私たちも含めて、２期工事ということで１期の時の緊張感が薄れていたことも否定できないだろう。

私たちはミーティングに集まった村人たちに今回被害を受けた寄宿舎等が設計図通りに施工されていなかったことを説明し、二度とこのようなことが起こらないよう、理解を求めた。地震が起こった４月25日は始業式の１日前で、校舎にも寄宿舎にも誰もいなかったため、学校内での地震による死傷者が１人もなかったことが不幸中の幸いであった。



写真１　大破した寄宿舎（地震直後）

■再建に向けて

ネパール教育省によると、今回の地震によりネパール全土で8,242校の公立校に被害があり、約２万5,000教室が全壊、約２万2,000教室が半壊あるいは一部損壊とされている。この状況を受けてネパール教育省は被害が大きかったゴルカ郡を含む６つの郡でJICA（国際協力機構）と提携し、日本政府の資金協力により校舎の再建計画を策定している。

2015年９月、AAFはネパール教育省に赴き、この再建計画の詳細を確認したところ、第１段階として全壊の80校を選定し、次に被害の程度に応じて第２、第３段階の学校を720校選定、2016年から2019年まで４年かけて計800校を再建していく、というものであった。現在は再建のための耐震モデルを検討中とのことで、再建工事に着手する時期は第１段階の80校が最短で2016年２月。また寄宿舎を再建の対象に含むかどうかは現在のところ未定、とのことであった。

この計画ではいつになればブッダ・スクールの寄宿舎が再建できるのか、また再建の対象になるのかどうかも定かではない。特にフィリムのような車でアクセスすることができず、歩いて２日もかかる遠隔地は、現地の状況の確認や工事のモニタリングも困難なため、どうしても後回しになる可能性が高い。AAFはブッダ・スクールの学校運営委員会と協議し、現在残っている壁を一旦すべて撤去して、資材の運搬が可能になり次第、自力で本設の寄宿舎の再建工事に着手することを決定した。

今回も工事は技術を持った数人の職方をリーダーに、村人たちの手で行うことになる。私たちは村人たちに、一刻も早く被災した寄宿舎３棟を再建し、テントで暮らす子供たちが入居できるようにする必要があることを説明し、協力を仰いだ。村人たちは再建の



写真２　寄宿生107名がテント生活を強いられた

ための瓦礫の撤去と再利用できる石の選別をボランティアで実施することを約束してくれ、ミーティングの翌日から作業が始まった。

再建する寄宿舎は材料調達と施工技術の関係からこれまで通り石積みの壁と木造の小屋組とせざるを得ないのであるが、耐震性能を上げるために、基礎と開口部の上下などを一部鉄筋コンクリートで補強することとした（**写真３**）。外壁の石を型枠代わりに用いることで、施工のしやすさと、コンクリートで補強しながらも自然素材で構成された外観を維持することに配慮した。施工管理体制も第3者的な立場で管理できる技術者を雇用し、設計図通りに施工されていることを逐一写真で報告することを義務付けた。2015年12月には水力発電による送電も始まったことで、学校でパソコンを利用することが可能になり、管理環境は２期工事の時よりかなり改善されている。

建設資金については、地震直後からAAFが実施した「ネパール大地震緊急支援募金」により多くの皆様から支援いただいた義損金と、３期工事に予定していた資金を寄宿舎の再建工事に振り替えることで、何とか寄宿舎３棟の予算を確保でき、山道が復旧し資材運搬が可能となった2016年１月に１棟目の寄宿舎の再建工事に着手した。

■難航した資材運搬

壁の石や木材はできるだけ被災した建物の材料を再利用し、また３期工事用にストックしていた材料を転用することで、資材の運搬は補強用のセメントや砂利、鉄筋など最小限とした。１棟目の寄宿舎は順調に工事が進み、地震発生から１年後の2016年４月には完成、テント生活の生徒たちの一部が入居できるようになった。２棟目も４～７月に工事を終え、その後３棟目の工事を７～10月で完了させる予定であったが、屋根の野地板に使う合板が不足し、屋根工事が未了の状態で９月にストップしてしまった。雨季（６～９月）に入ると、資材運搬が思うように進まないのはいつものことであるが、特に足元が悪いと合板のように面積のある資材を運ぶのは困難なため、その運搬に予想以上の時間を要することになったのである。



写真３　石を型枠代わりに用いた鉄筋コンクリートによる耐震補強

９月中旬から下旬にかけて、AAFがフィリムまでの陸路での資材運搬ルートを確認したところ、山中の道はとても道とは言えず、地震で崩れた岩の上や、地滑りで削れた斜面をかろうじて通ることができるというところが何か所もあった。しかも９月下旬に一度復旧した山道で再度地滑りがあり、４人が亡くなるという事故が起きたこともあって、運搬のための人材が不足し、人件費が高騰した。ヘリコプターでの運搬も視野に入れて検討したが、条件が折り合わず、結局時間をかけて少しずつ人力で運搬することになった。結果、３棟目の寄宿舎の再建工事が完了したのは2017年３月末であった。

こうして大地震発生から約２年をかけて、被災した寄宿舎３棟全ての再建工事を耐震補強も含めて終えることができた（**写真４**）。現在AAFはいまだ壁が崩れたままの便所棟の建替と、生徒数の増加に伴う寄宿舎の増築に取り組んでいる。

■発展するフィリム

この２年の間にフィリムには、いくつかの変化が見られた。地震によって倒壊した民家が撤去され、トタンの波板で屋根と壁を覆った仮設住宅がいくつも建てられていることも大きな変化であることはもちろんであるが、宿泊のためのロッジの軒数が以前の何倍にも増えていること、太陽光発電のパネルや衛星通信のためのアンテナがいたるところに設置されていること、送電のための電柱がどんどん建ち始めていること、保健医療施設であるヘルスポストの建設が進められていることなど、この地域が目に見えて発展してきていることがよくわかる。地震による被害を受けながらも村人たちの表情は決して暗くなく、むしろ明るくまっすぐ前を向いている印象を受ける。

その発展の中心となっているのが、AAFが支援するブッダ・スクールである。向学心旺盛な子どもたちの多くは優秀な成績でこの学校を卒業し、カトマンズやゴルカ、ポカラでさらに高度な教育を受けている。教師となってこの学校に戻ってきた卒業生も延べ人数で９人となった。今ではネパール政府もブッダ・スクールのあるフィリムをゴルカ北部の中心的な地域と位置付け、インフラや公共施設の建設計画も進んできている。

その一方で、仮設住宅のための安価で施工が容易なトタンの波板が大量にこの村に入ってきたことにより、新築建物の屋根にもトタンの波板を使うようになってきたこと、あるいは前述した衛星アンテナや電柱によって、かつては自然の素材だけで構成されていたこの村の景観にも変化が生じてきている。

貧しい村における経済性や生活の利便性の向上はある意味で歓迎すべきことではあるが、そのことによって、ネパール政府が保護しようとしているヒマラヤの美しい自然景観が損なわれつつあることもまた事実である。



写真４　再建工事が完了した3棟の寄宿舎。石積の壁の内部に鉄筋コンクリートにより耐震補強が施されている

1 ゴッホ展 巡りゆく日本の夢

19世紀末に活躍し、今もなお世界中で絶大な人気を誇る芸術家フィンセント・ファン・ゴッホ（1853－1890）。ジャポニスムの只中にあった19世紀のパリで日本に関する文献や浮世絵と出会い夢中になった画家にとって、日本は創意の源であり理想郷であった。一方1920年代には日本の芸術家や知識人がファン・ゴッホに憧れ、その墓のあるフランスのオーヴェール＝シュル＝オワーズを巡礼した。ファン・ゴッホ美術館との共同企画である本展では、世界中の名だたる美術館が所蔵するファン・ゴッホの油彩画やデッサンに加え、浮世絵やオーヴェール巡礼に関する資料などにより、互いの夢の交差を通してゴッホの魅力を紹介する。



フィンセント・ファン・ゴッホ《花魁（渓斎英泉による）》1887年 ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）蔵 ©Van Gogh Museum, Amsterdam（Vincent van Gogh Foundation）

期　　間　1月20日（土）～3月4日（日）
9：30～17：00
（会期中の金・土曜日は20：00まで）
※入館は閉館の30分前まで
休 館 日　月曜日（ただし2/12は開館）、2/13
会　　場　京都国立近代美術館
京都市左京区岡崎円勝寺町
TEL.075-761-4111
観 覧 料　一般1,500円、大学生1,100円、高校生600円
＊中学生以下無料
＊障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者１名は無料

2 伝統工芸企画展 赤膚焼・奈良一刀彫・奈良漆器… 悠久の美と技

日本文化の源流の地である奈良では、古くから優れた工芸品の制作が盛んであった。その歴史に裏打ちされた精緻な技は、日本の伝統文化として脈々と受け継がれてきた。そしてこれらの文化に支えられ、高い芸術性を備えた工芸品が多く生み出された。
本展では美術的にも優れた奈良の伝統工芸として、赤膚焼・奈良一刀彫・奈良漆器を取り上げる。現在、工芸の分野でも芸術性の高い作品が創作されるなかで、奈良の伝統工芸を絶やさず、さらなる飛躍の契機となることを期して、伝統工芸の「これまで」と「現在」の比較展示を行う。近世・近代の匠たちが生み出した名作と、いま活躍する作家たちの力作による美の競演をじっくりとお楽しみいただきたい。



森川杜園「福の神」明治22（1889）年 個人蔵

期　　間　1月27日（土）～3月25日（日）
9：00～17：00　※入館は16：30まで
休 館 日　月曜日（ただし2/12は開館）、2/13
会　　場　奈良県立美術館
奈良市登大路町10-6
TEL.0742-23-3968
観 覧 料　一般400円、高大生250円、小中生150円
＊65歳以上の方は無料
＊障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者１名は無料

3 アラビアの道ー サウジアラビア王国の至宝

古代より交易路が張り巡らされ、人々と諸文明が行き交ったアラビア半島。
本展では、その躍動的な歴史と文化を示すサウジアラビア王国の至宝を日本で初めて公開する。100万年以上前にさかのぼるアジア最初の石器、5000年前に砂漠に立てられた人形石柱、ヘレニズム時代やローマ時代に賑わった古代都市からの出土品、イスラームの聖地マッカ（メッカ）のカァバ神殿で17世紀に使われた扉、サウジアラビア初代国王の遺品（20世紀）など、400件以上の貴重な文化財をとおして、アラビア半島の知られざる歴史をお楽しみいただきたい。



人形石柱（ひとがたせきちゅう）」前3500～前2500年頃、カルヤト・カァファ出土 サウジアラビア国立博物館所蔵

期　　間　1月23日（火）～3月18日（日）
9：30～17：00（金・土曜日は21：00まで）
※入館は閉館の30分前まで
休 館 日　月曜日（ただし2/12は開館）、2/13
会　　場　東京国立博物館　表慶館（東京・上野公園）
東京都台東区上野公園13-9
TEL.03-5777-8600（ハローダイヤル）
観 覧 料　一般620円、大学生410円
＊高校生以下および満18歳未満、満70歳以上の方は無料（要証明）

4 特集展示 ほのぼの俳画、生田南水

生田南水（1860～1934）は、名は宜人、通称を福太郎、別号を夜雨荘・百済・鹿鳴草舎などと称し、現在の天王寺区にあった上之宮の神官を勤めていた家に生まれた。南水は、日本の歴史や国学、和歌や俳句などに通じ、当時の大阪を代表する博学者として知られていた。彼の活動は、新聞雑誌への寄稿や『四天王寺と大阪』（明治43年）の出版、さらには芦辺踊や浪花踊（いずれも大阪の芸妓による歌舞）の作詞など幅広く見られる。また多数の俳画を残しており、それらは軽妙な筆致や穏やかな彩色による絵と流麗な書体がみごとにマッチした作品となっている。現代において南水は、女流画家生田花朝の父として名前が挙げられるが、その作品がまとまって紹介されることはなかった。

本展では、大阪市内在住の有本幸子氏より寄贈された南水の俳画を主とし、あわせて絵と文字が一体となった書画の作品、いわゆる画賛物のうち大阪に縁のある作品を展示する。



七月乞巧奠自画賛
生田南水筆
大阪歴史博物館蔵
（有本幸子氏寄贈）

期　　間　1月10日（水）～2月26日（月）
9：30～17：00
※入館は閉館の30分前まで
休 館 日　火曜日
会　　場　大阪歴史博物館８階　特集展示室（常設展示場内）
大阪市中央区大手前4-1-32
TEL.06-6946-5728
観 覧 料　一般600円、高大生400円
＊中学生以下、大阪市内在住の65歳以上（要証明）の方、障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者１名は無料

5 おかざき世界子ども美術博物館　所蔵 天才たちの青春 ー世界の巨匠たちが子どもだったころー

モネ、ピカソ、ムンク、ロートレック、クレー、岸田劉生、青木繁、平山郁夫・・・世界の名だたる美術家たちは、いかにして巨匠と呼ばれるようになったのだろうか。

本展では世界初の本格的な子どものための美術館である、おかざき世界子ども美術博物館のコレクションより、国内外の有名美術家たちが10代を中心とする子どものころに制作した作品を紹介する。また、国内の作家として、尼崎市出身の白髪一雄や、西脇市出身の横尾忠則など、兵庫県ゆかりの作家たちが描いた作品も出品される。身近な環境から美術界を牽引する立場となった人物がいることも感じていただければ幸いである。

どんな巨匠にも、子ども時代があり、絵をはじめ、巨匠になるまでの過程が存在する。それらの作品は、多感な10代の時期を過ごした作家たちの真摯でひたむきな情熱を、みる者に伝える。

巨匠と呼ばれる前に描かれた、天才たちの芽生えをぜひご覧いただきたい。



エドヴァルド・ムンク
《雪景色の中の少年》
1881年

期　　間　1月13日（土）～2月4日（日）
9：30～18：30
※入館は18：00まで
休 館 日　会期中無休
会　　場　明石市立文化博物館
１階展示室及び２階ギャラリー
兵庫県明石市上ノ丸2-13-1
TEL.078-918-5400
観 覧 料　一般1,000円、高大生700円
＊中学生以下無料
＊シニアいきいきパスポート提示で無料
＊65歳以上の方、障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者１名は半額

本欄掲載の１～５の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手（82円）を日本建築協会事務局までお送りください。

謹賀新年

戌

平成30年元旦

常任理事
勝　山　太　郎
日　建　設　計
理事 設計部門 設計部長
〒541-8528　大阪市中央区高麗橋4−6−2　TEL(06)6203-2361

理事
香　西　喜八郎
株式会社 東畑建築事務所
代表取締役社長
〒541-0043　大阪市中央区高麗橋2−6−10　TEL(06)6202-0391

副会長
田　中　日出男
株式会社 きんでん
常務執行役員技術本部長
〒531-8550　大阪市北区本庄東2−3−41　TEL(06)6375-6229

理事
金　井　隆　夫
大成建設 株式会社
専務執行役員関西支店長
〒542-0081　大阪市中央区南船場1−14−10　TEL(06)6265-4556

理事
児　玉　　謙
日　建　設　計
執行役員 設計部門 設計代表
〒541-8528　大阪市中央区高麗橋4−6−2　TEL(06)6203-2361

千　種　幹　雄
株式会社 昭和設計
代表取締役社長
〒531-0072　大阪市北区豊崎4−12−10　TEL(06)7174-8787

亀　井　忠　夫
日　建　設　計
代表取締役社長
〒541-8528　大阪市中央区高麗橋4−6−2　TEL(06)6203-2361

近　藤　康　之
不二熱学工業 株式会社
代表取締役
〒542-0081　大阪市中央区南船場2−1−1　TEL(06)6261-4321

理事
中　井　　進
日建設計コンストラクション・マネジメント
相談役
〒112-0004　東京都文京区後楽1−4−27　TEL(03)5803-9770

北　野　晶　平
ダイダン 株式会社
代表取締役社長
〒550-8520　大阪市西区江戸堀1−9−25　TEL(06)6447-8000

理事
酒　井　祥　三
西松建設 株式会社 西日本支社
常務執行役員支社長
〒540-8515　大阪市中央区釣鐘町2−4−7　TEL(06)6942-1173

永　嶋　元　博
東リ 株式会社
代表取締役社長
〒664-8610　兵庫県伊丹市東有岡5−125　TEL(06)6492-1331

理事
栗　原　信　英
栗原工業 株式会社
取締役社長
〒530-0017　大阪市北区角田町1−1　TEL(06)6313-1101

理事
佐　野　吉　彦
株式会社 安井建築設計事務所
代表取締役社長
〒540-0034　大阪市中央区島町2−4−7　TEL(06)6943-1371代

原　　眞　一
コーナン建設 株式会社
代表取締役
〒531-0075　大阪市北区大淀南1−9−10　TEL(06)6456-4311

小　池　一　郎
西日本建設業保証 株式会社
取締役社長
〒550-0012　大阪市西区立売堀2−1−2　TEL(06)6543-2553

会長
設　楽　貞　樹
株式会社 安井建築設計事務所
常務取締役執行役員
〒540-0034　大阪市中央区島町2−4−7　TEL(06)6943-1371代

謹賀新年　戌　平成30年元旦

設計事務所有志

株式会社 伊藤建築設計事務所
取締役会長　森口雅文
代表取締役社長　小田義彦
本社・名古屋事務所・エルイー創造研究室
〒460-0002 名古屋市中区丸の内1−15−15（桜通ビル）TEL（052）222-8611
東京事務所
〒101-0021 東京都千代田区外神田3−5−12（聖公会神田ビル）TEL（03）5294-6211

株式会社 東畑建築事務所
代表取締役社長　香西喜八郎
本社　〒541-0043　大阪市中央区高麗橋2-6-10　TEL（06）6202-0391
大阪・東京・名古屋・九州・東北
http://www.tohata.co.jp

NIKKEN
EXPERIENCE, INTEGRATED
日建設計
代表取締役社長 亀井忠夫
東京都千代田区飯田橋2-18-3
Tel. 03-5226-3030
大阪市中央区高麗橋4-6-2
Tel. 06-6203-2361
http://www.nikken.jp

安井建築設計事務所
代表取締役社長　佐野吉彦
本社　〒540-0034 大阪市中央区島町2-4-7　TEL:06-6943-1371
支社　大阪・東京・名古屋・広島・九州　www.yasui-archi.co.jp

時をつくる こころで創る

OBAYASHI 大林組

取締役社長　白石 達
本社　東京都港区港南 2-15-2 TEL 03 (5769) 1111

専務執行役員
大阪本店長　鶴田 信夫
大阪本店　大阪市北区中之島 3-6-32 TEL 06 (6456) 7000

100年をつくる会社

鹿島 KAJIMA CORPORATION

本　　社：東京都港区元赤坂1丁目3番1号
関西支店：大阪市中央区城見2丁目2番22号・マルイトOBPビル
電話06（6946）3311
https://www.kajima.co.jp/

子どもたちに誇れるしごとを。

清水建設株式会社

取締役社長　井上 和幸　　取締役専務執行役員関西支店長　池田 耕二

本　社　〒104-8370　東京都中央区京橋二丁目16番1号　Tel. 03 (3561) 1111
関西支店　〒541-8520　大阪市中央区本町三丁目5番7号　御堂筋本町ビル　Tel. 06 (6263) 2800

地図に残る仕事。®

TAISEI 大成建設株式会社

For a Lively World

代表取締役社長　村田誉之
専務執行役員関西支店長　金井隆夫

本社　東京都新宿区西新宿 1-25-1
電話　03-3348-1111
関西支店　大阪市中央区南船場 1-14-10
電話　06-6265-4504
http://www.taisei.co.jp/

想いをかたちに 未来へつなぐ

TAKENAKA

竹中工務店　取締役社長　宮下正裕
〒541-0053 大阪市中央区本町 4-1-13 tel: 06-6252-1201
〒136-0075 東京都江東区新砂 1-1-1 tel: 03-6810-5000

戸田建設株式会社

代表取締役社長　今井 雅則
常務執行役員大阪支店長　光用 薫

本　社　〒104-8388　東京都中央区京橋1－7－1　TEL 東京03(3535)1354
大阪支店　〒550-0005　大阪市西区西本町1－13－47　TEL 大阪06(6531)6095
支　店　東京・首都圏土木・千葉・関東・横浜・名古屋・札幌・東北・広島・四国・九州

夢のレンガを積みあげよう

都窯業株式会社

〒530-0047　大阪市北区西天満 2-8-1 大江ビル
Tel（06）6367-0389　Fax（06）6367-5567
工房　三重県伊賀市西山　伊州窯　伊州観白樓
http://www.miyakoyogyo.com　E-mail：info@miyakoyogyo.com

建材・学校・団体有志等

大阪工業技術専門学校
OSAKA COLLEGE OF TECHNOLOGY

設備環境デザイン学科･建築学科･インテリアデザイン学科･大工技能学科･建築設計学科（リカレント生対象）
建築学科Ⅱ部（夜間）･フレックス建築学科（夜間･単位制）･建築士専科（二級建築士受験資格取得者対象）

〒530-0043　大阪市北区天満1丁目8番24号　0120-0910-19　http://www.oct.ac.jp/　Tel. 06-6352-0093

学校法人　修成学園
修成建設専門学校

〒555-0032 大阪市西淀川区大和田5-19-30　TEL:06-6474-1644（代）
0120-446-456　http://www.syusei.ac.jp/

■建築学科
■建築CGデザイン学科
■空間デザイン学科
■住環境リノベーション学科
■土木工学科
■建設エンジニア学科
■ガーデンデザイン学科
■専科 2級建築士科
■建築デュアルシステム科

一般社団法人 日本建築材料協会

会　長　立野純三

〒550-0002　大阪市西区江戸堀1−4−23　撞木橋ビル4階　TEL（06）6443-0345　FAX（06）6443-0348
http://www.kenzai.or.jp/

一般社団法人 日本建築協会

会　長　設楽貞樹

〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31　TEL（06）6946-6981

一般社団法人 日本建築協会中国支部

支部長　髙松隆夫

〒732-0805 広島市中区十日市町1-1-9（相生通り鷹匠ビル4階山陽工業㈱内） TEL（082）232-6471

一般社団法人 日本建築協会東海支部

支部長　篠原佳則

〒460-0008 名古屋市中区栄2−10−19（名古屋商工会議所ビル9階）TEL（052）201-2201

一般社団法人 日本建築協会京都支部

支部長　長瀬博一

〒604-0944 京都市中京区押小路通柳馬場東入橘町641 京都建設会館別館 TEL（075）211-2857



日本建築協会創立100周年記念誌　頒布のお知らせ

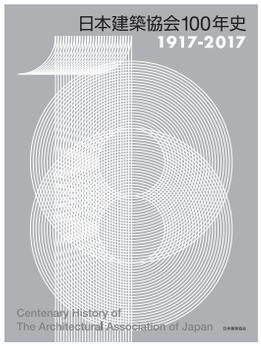
日本建築協会は、2017年3月30日に創立100周年を迎えました。その記念すべき年にあたり、100周年記念事業の一環として、3冊の記念誌を発刊いたしました。
それぞれの誌面では協会100年の歴史を振り返るのみならず、本会が社会の中で果たしてきた役割を見つめ直すとともに、かつて会誌に掲載された貴重な記録を再発見するほか、現在の建築に携わる人々の想いなど、様々な視点から「建築と社会」を取り上げております。
つきましてはこの度、記念誌を頒布することとなりましたので、ぜひお手元に備えていただきたく存じます。

＜お申し込み方法＞
ご注文の書籍名（もしくは3冊セット）、お名前、ふりがな、ご住所（〒から）、電話番号、メールアドレスをご記入の上、下記宛てにFAXまたはメールでお申し込みください。ご記入いただいたご住所に請求書をお送りしますので、お振込をお願いします。ご入金確認後に冊子を発送いたします。
※価格はいずれも税込、送料別です。

お申込先　一般社団法人日本建築協会
FAX：06-6946-6984　Mail：soumu@aaj.or.jp

◆3冊セットでご注文の場合は
特別価格 ￥5,000 にてご提供いたします。

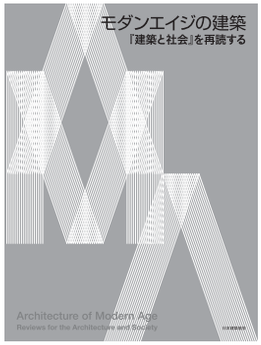
■日本建築協会100年史1917-2017　￥2,000





＜目次＞（全96頁）
序　香西喜八郎
第１部　日本建築協会100年の概要
　石田潤一郎／石川祐一／平井直樹／玉田浩之／三宅拓也
第２部　座談会
　１　座談会　回顧と展望―坂本勝比古先生を囲んで
　　坂本勝比古／佐野吉彦／山形政昭／設楽貞樹／和田康由
　２　座談会　大阪万博から阪神淡路大震災復興の時代
　　上田篤／鳴海邦碩／小林郁雄／天野直樹／大井昇二／設楽貞樹／橋爪紳也
　３　座談会　21世紀を拓く建築
　　本多友常／鈴木　毅／安原　幹／横山俊祐
　４　座談会　支部活動をめぐって
　　香西喜八郎／髙松隆夫／篠原佳則／長瀬博一
第３部　年表（1917―2017）
第４部　協会活動の記録

■モダンエイジの建築『建築と社会』を再読する　￥3,000





2009年～2016年にわたって会誌『建築と社会』に掲載された連載「再読　関西近代建築」をまとめたものです。会誌に収められた貴重な建築記録や論考を取り上げ、解説しています。

＜目次＞（全352頁）
はじめに　史料研究会一同
第１部　『建築と社会』の100年　山形政昭
第２部　建築作品編
　１　官庁・公共建築・学校（泉布観・大阪城天守閣ほか全13件）
　２　業務ビル（旧住友ビルディング・御堂ビルほか全22件）
　３　会館・劇場・博物館（綿業会館・自泉会館ほか全15件）
　４　ホテル・病院・駅舎・百貨店（宝塚ホテル・新大阪駅ほか全16件）
　５　住宅・住宅地（千里山住宅地・住宅改造博覧会ほか全６件）
第３部　論考・記事編（全10件）
第４部　掲載記事一覧

■関西の建築界／群像　￥2,000





2009年より70回にわたり『建築と社会』に掲載された、建築に携わる方々へのインタビュー記事をまとめたものです。（追録あり）

＜目次＞（全164頁）
■関西の建築界/群像　本多友常
■“群像”　全70組
■「大阪」フォトギャラリー　撮影：河合止揚
■公開討論会　1987年と2017年の「関西」
　倉方俊輔、本多友常、岡村吉展、奥　貴人、清原健史、河合止揚、
　駒井陽次、杉山美納、藤原芳寿、三谷勝章、三矢大祐、吉永規夫
■委員プロフィール

日本建築協会

月間の動き

平成29年11月

理事会等

第２回通常理事会
11月22日（水）16：05～16：40
OMM地下１階ギャラリー
出席者　設楽会長ほか25名
議　事（１）平成29年度上半期事業執行状況
第１回会長、副会長、常任理事、支部長会議
11月22日（水）14：30～15：45
OMM地下１階ギャラリー
出席者　設楽会長ほか13名
議　事（１）平成29年度上半期事業執行状況
（２）意見交換

編集委員会

第８回広告企画・編集合同委員会
11月16日（木）18：10～19：00
日建設計会議室
出席者　勝山委員長ほか５名
議　事（１）12月号特集　時間軸に挑むクリエイター達～時をデザインするということ
（２）１月号特集　①東畑建築事務所創立85周年特集　②温泉と暮らす
（３）２月号特集　第24回私の空間作法
（４）３月号特集　東海支部特集
（５）４月号特集　特別編集委員会特集
（６）その他　来年度の表紙
2018年４月特集号第２回特別編集委員会
11月16日（木）19：00～20：00
日建設計会議室
出席者　勝山委員長ほか10名
議　事（１）テーマの選定
第７回構造分科会
11月17日（金）18：00～18：45
日本建築協会会議室
出席者　伊藤幹事ほか５名
議　事（１）構造の頁の企画
（２）2018年特集の企画
（３）2018年度幹事の選定
第７回設備分科会
11月１日（水）18：00～19：50
日本建築協会会議室
出席者　橋本幹事ほか６名
議　事（1）2018年特集の企画
（2）「設備の頁」の企画
（3）2018年４月号の編集委員会特集
第６回法令分科会
11月１日（水）15：00～17：00
日本建築協会会議室
出席者　小林幹事ほか６名
議　事（１）法令コーナーの企画
（２）2018年特集の企画
第８回作品作風小委員会
11月16日（木）19：00～20：30
日本建築協会会議室
出席者　加嶋小委員長ほか２名
議　事（１）作品の選定
（２）作品の掲載状況、予定
（３）gallery掲載報告、予定
（４）その他

事業委員会

第５回情報見学小委員会
11月9日（木）18：00～19：15
日本建築協会会議室
出席者　中尾委員長ほか９名
議　事（１）本年度事業　大徳寺孤篷庵　忘筌茶室見学会　報告
イケフェス関連事業　石田潤一郎と佐野吉彦によるリレートーク『大阪ガスビルに託された夢ー白亜のビルと近代大阪』報告
（２）来年度事業　見学先の検討
（３）2017年建築関係団体合同忘年懇親会について現状報告

次世代委員会

第２回2040委員会
11月20日（月）19：00～21：00
PARK Lab.
出席者　駒井リーダーほか７名
議　事（１）企画内容
（２）今後の委員会活動
U-35小委員会「talk baton 13」
11月３日（金）13：00～17：00
六甲ミーツ・アート芸術散歩2017/六甲山ホテル
参加者　吉田委員ほか18名
ゲスト　川田知志
第８回U-35小委員会
11月17日（金）19：30～
PARK Lab.
出席者　三谷リーダーほか13名
議　事（１）座談会
第９回U-35小委員会
11月29日（水）19：30～
東畑建築事務所
出席者　三谷リーダーほか９名
議　事（１）活動／予定
（２）次回予定／その他

出版委員会

第７回出版委員会
11月28日（火）18：00～19：10
日本建築協会会議室
出席者　西委員長ほか６名
議　事（１）既刊書籍経過報告
（２）制作進行中の書籍
（３）今後の出版テーマ
（４）出版記念講演会開催
（５）既刊書籍を用いた講習会の企画

教育委員会

大阪府住まい・まちづくり普及協議会全体会議
11月17日（金）10：30～12：00
場所 大阪建築会館会議室
報告・議題
１．出前講座の実施
１）サポーター充実
２）HP充実
３）名刺
４）助成金
５）マニュアル作り
２．その他
・次回の日程

100周年関連事業委員会

第３回史料研究会
11月22日（水）18：00～20：15
日本建築協会会議室
出席者　山形委員長ほか５名
議　事（１）新たな連載
（２）今後の活動

審査会

論考コンクール第１回審査委員会
11月27日（月）19：00～20：20
出席者　審査委員　舟橋國男審査委員長ほか４名
協会関係　設楽貞樹会長ほか２名
議　事（１）設楽会長挨拶
（２）審査方針
（３）今後の審査委員会日程

見学会

「大徳寺　孤篷庵　忘筌」茶室見学会
11月11日（土）13：00～16：00
講　師　中村昌生　氏
（京都工芸繊維大学名誉教授）
委　員　夏井委員ほか４名
参加者　34名

表彰式

第63回工高生デザインコンクール表彰式
11月11日（土）13：30～16：30
綿業会館新館２階中集会室
出席者　受賞者21名（引率者９名含む）
審査員６名
委　員　中村委員ほか２名

編集委員会（平成29年度）

■副会長
米井　寛
本多　友常
■編集担当理事
◎勝山　太郎
佐藤　榮一
杉本　浩
竹中　統一
西　博康
松崎　公一
船越　淳久
吉村　英祐
香西喜八郎
■副委員長
○戸川　勝之
■特集小委員会
■計画分科会
★計画系
飯田　匡
鈴木　克彦
△田中　直人
松田奈緒子
三宅　次郎
守井　辰
吉村　英祐
★建築計画系
神戸　嘉也
桑原　悠樹
下坂　浩和
△中辻　浩介
東　拓郎
樋口　展寛
松岡　英緯
三谷　帯介
米山　剛史
渡部　剛
★ｲﾝﾃﾘｱ･住宅系
赤川貴世友
今井　充彦
岩田　圭司
川合　隆之
河西　孝平
△黒栁　亮
塚口　洋之
ペリー史子
■構造分科会
△伊藤　栄治
岡田　健
岸本　光平
瀧野　敦夫
角田　耕一
蕪原　学
前沢　皓生
宮久保秀樹
向井　洋一

■設備分科会
有尾清二郎
木谷　晃之
北野　勝也
佐々木章二
寺井　千佳
夏井　重行
△橋本　直樹
桝井　貴廣
宮崎ひろ志
森山　正和
山本　雅洋
■施工材料分科会
東　琢
木谷　在憲
桜井　和男
△髙橋　秀一
藤丸　啓一
山口　紀宏
山崎　順二
吉田　正友
■法令分科会
磯林　雅之
黒川　正樹
河野　学
△小林　智成
武田　知士
■作品作風小委員会
東井　嘉信
居内　章夫
池上　明
稲垣　和江
太田　栄治
▲加嶋　章博
菊池　浩輔
倉渕奈千子
澤田　純一
髙木　秀晃
鞆野　淳司
西田　佳代
芳谷　晴彦
平野　尉仁
増田　敬彦
■広告企画小委員会
小川　雄介
金築　雄
小山　昭
野山　将男
藤田　昌宏
▲前田　衛
山辻　直樹

（順不同）

◎委員長
○副委員長
▲小委員会委員長
△幹事

印　刷　２０１７年12月27日
発　行　２０１８年１月１日
発行人　一般社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電　話　06-6946-6981
印刷所　㈱中島弘文堂印刷所
デザイン　多田正治（多田正治アトリエ）
定　価　1230円（税込）

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧に対応できるために

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本　　社　〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761／FAX.06-6976-8765

東京支社　〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階
TEL.03-3526-5580／FAX.03-3526-5582

http://www.n-kobundo.co.jp/

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社日本電気化学工業所

http://nacl.jp　E-mail:sc@nacl.co.jp

本部営業部　〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLﾋﾞﾙ2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632

東京事務所　〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

年間広告のご案内

会誌「建築と社会」では、後付部分に
広告スペースを設けております。
1年を通じて、社名広告を掲載されませんか？

掲載期間：４月号～翌年３月号までの１年間
掲 載 料：**48,000**円（消費税込み）
サ イ ズ：1/12頁（タテ40mm×ヨコ90mm）

※毎月掲載誌をご送付します。
※原稿は１年間同じ原稿を使用します。

お問い合わせ先

一般社団法人　日本建築協会　内山・井筒

TEL：06-6946-6981　FAX：06-6946-6984　E-mail：koukoku@aaj.or.jp

総合資格学院は学科試験も設計製図試験も「日本一」の合格実績!

※平成29年度 1級建築士学科試験 全国合格者4,946名中、総合資格学院受講生2,607名 合格者占有率52.7%
※平成29年度 1級建築士設計製図試験 全国合格者3,365名中、総合資格学院受講生2,145名 合格者占有率63.7%

平成29年度 1級建築士 設計製図試験

No.1 全国 ストレート合格者占有率 合格者占有率

全国
ストレート合格者占有率[学科+製図合格]
70.7%


全国ストレート合格者合計1,564名中、総合資格学院現役受講生1,105名

全国
合格者占有率 63.7%


全国合格者合計3,365名中、総合資格学院現役受講生2,145名

※総合資格学院の合格実績には、模擬試験のみの受験生、教材購入者、無料の役務提供者、過去受講生は一切含まれておりません。※総合資格学院のNo.1に関する表示は、公正取引委員会「No.1表示に関する実態調査報告書」に基づき掲載しております。※全国または都道府県の合格者数/ストレート合格者数は、(公財)建築技術教育普及センターの発表に基づきます。※学科+製図ストレート合格者とは、平成29年度1級建築士学科試験に合格し、平成29年度1級建築士設計製図試験にストレートで合格した方です。<平成29年12月21日現在>

1級建築士 卒業学校別実績

平成29年度 1級建築士設計製図試験 卒業生合格者20名以上の学校出身合格者 2,019名中 総合資格学院現役受講生 1,323名

合格者占有率 65.5%

[平成29年度 1級建築士設計製図試験卒業生合格者20名以上の全学校一覧]

	学校名	合格者数	当学院合格者	当学院受講率
1	日本大学	181	119	65.7%
2	東京理科大学	108	70	64.8%
3	芝浦工業大学	102	66	64.7%
4	早稲田大学	71	45	63.4%
5	明治大学	67	48	71.6%
6	工学院大学	60	37	61.7%
6	千葉大学	60	41	68.3%
8	近畿大学	58	43	74.1%
8	法政大学	58	43	74.1%
10	京都大学	56	30	53.6%
11	京都工芸繊維大学	52	35	67.3%
11	神戸大学	52	32	61.5%
13	関西大学	48	30	62.5%
14	九州大学	44	27	61.4%
15	東京都市大学	43	36	83.7%
16	大阪工業大学	40	25	62.5%
17	大阪大学	39	21	53.8%
18	東京工業大学	38	24	63.2%
18	東京大学	38	24	63.2%
20	横浜国立大学	36	25	69.4%
20	広島大学	36	26	72.2%
20	名古屋工業大学	36	29	80.6%
23	熊本大学	35	23	65.7%
24	東京電機大学	33	20	60.6%
25	東北大学	32	15	46.9%
26	神奈川大学	31	21	67.7%
27	大阪市立大学	29	16	55.2%
28	東洋大学	28	15	53.6%
28	名城大学	28	19	67.9%
30	金沢工業大学	27	21	77.8%
30	首都大学東京	27	21	77.8%
30	信州大学	27	17	63.0%
33	室蘭工業大学	26	15	57.7%
33	立命館大学	26	20	76.9%
35	慶應義塾大学	25	16	64.0%
35	中央工学校	25	18	72.0%
35	東海大学	25	21	84.0%
35	北海道大学	25	17	68.0%
35	名古屋大学	25	13	52.0%
40	新潟大学	24	17	70.8%
40	千葉工業大学	24	16	66.7%
40	前橋工科大学	24	18	75.0%
43	広島工業大学	22	12	54.5%
43	福井大学	22	12	54.5%
43	福岡大学	22	17	77.3%
46	愛知工業大学	21	11	52.4%
46	鹿児島大学	21	12	57.1%
46	日本工業大学	21	13	61.9%
46	日本女子大学	21	11	52.4%

※各都道府県合格者数・卒業学校別合格者数は、試験実施機関である(公財)建築技術教育普及センターの発表によるものです。※総合資格学院の合格者数には、「2級建築士」等を受験資格として申し込まれた方も含まれている可能性があります。
<平成29年12月21日現在>

法定講習 法定講習サイト 検索 hotei.shikaku.co.jp
一級・二級・木造建築士定期講習 / 管理建築士講習 / 監理技術者講習/
第一種電気工事士定期講習 / 宅建登録講習 / 宅建登録実務講習

受講生募集中 無料体験入校実施中! お気軽にお問い合わせください

1級・2級 建築士	構造・設備設計 1級建築士	1級・2級建築施工管理技士	1級・2級土木施工管理技士
建築設備士	1級・2級管工事施工管理技士	宅地建物取引士	インテリアコーディネーター

総合資格学院

おかげさまで「1級建築士合格者数日本一」を達成し続けています。これからも有資格者の育成を通じて、業界の発展に貢献して参ります。
総合資格学院 学院長 辰 隆司



スクールサイト www.shikaku.co.jp 総合資格 検索　コーポレートサイト www.sogoshikaku.co.jp
Facebook 「総合資格 fb」で検索!
東京都新宿区西新宿1-26-2 新宿野村ビル22F TEL. 03-3340-2810